



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペ・エリ・ラヴロフ「歴史書簡」(翻訳) 5
Author(s)	松井, 茂雄; Matsui, Shigeo
Citation	スラヴ研究, 5, 97-161
Issue Date	1961
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4957
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113160.pdf



歴史書簡

ラ ヴ ロ フ

松井茂雄 訳

書簡其の一三

国 家

理想化して悪用されなかったといえるような偉大な社会的原理は、一つとして存在しなかった、しかし、最近においては、国家の原理ほどいちじるしくこのような作用を受けたものはほとんどないであろう。もちろん、それには必然的な理由があった。この原理は、封建的専横、ローマ・カトリック教の神権主義的志向、統治者達の専制的志向に対するすぐれた武器であった。相次いでこれらの志向と闘った新しいヨーロッパの進歩的党派は、すぐさまこの原理をその旗印に掲げた。中世から新しい時代への過渡期に、国家的原理を奉じた法律家達は、ヨーロッパの国王たちに協力し、封建論者や教権主義者たちの打倒に助力した。戦は掠奪的諸勢力の間で続けられたが、理想化は、国家の原理の名において、ルイ一世、フェルナンド・カトリック王、イワン雷帝等々の事業を美化し、賢明さと全体の幸福に対する志向の栄光で彼らの事業をおおい包んだ。ルイ四世とスチュアート家がすでに他を圧する優越した勢力となった一七世紀の末に、進歩的党派は、「国家、これすなわち朕である」という言葉に、「国家、それは——全体の幸福である」という別な言葉を対置し、合法性の名において専横と闘った。だがここで、私が前に語った現象が現われた。国家という言葉は、非常に柔軟性に富んでいるために、種々様々な意味づけが可能である。ある人々は、政府の強化という意味で国家を理解し、またある人々は、社会が政治活動にできるだけ広汎に参加し、それによって政府を拘束するという意味で理解した。ある人々は、国家領土の拡大・その対外的勢力を強調し、またある人々は、領土全体の人為的行政管理・一様な法律・一様な生活形式による国家諸部分の機械的結合を最高のものとした、第三の人々は、明瞭に意識された共通の利害によって結ばれるところの諸中心が、それぞれ生き生きと立派に自主性を保ち、かつ、それらが有機的に結合してはじめて、国家が形成されるということを証明した。国家の味方をするか、それとも国家に敵対するかについての論争が必要だったのではなくて、真の理想的国家は正に何に存しているかを理解することが必要だった。国家が重要な社会的原理であることについては、論争するまでもないことであったようだ。麻痺症状におちいった封建論者と教権主義者を除いて、すべての人びとがこの点で意見が一致していた、しかも、国家的原理が中世的諸原理と個人の専横を打破して獲得した諸勝利は、まだ万人の記憶に生々しかった。かくして、保守主義者と進歩主義者・君主主義者と共和主義者・現状維持派と革命派・実践家と哲学者が、一つの点で——すなわち、

国家を最高の原理と認めるという点で——意見が一致していた、しかもこの国家の法律は、他の諸法と同格であり得ない最高の法律であって、他の諸法の承認によるよりも、むしろ人道主義によって若干の制限が許されるものであった。国家の偶像化は、今世紀の30年代ごろにその頂点に達した、そして、ドイツ観念論のもっとも偉大な代表者ヘーゲルは、同時にきわめて率直にこの偶像化を論述した思想家でもあった。

しかし、歴史は前進を続けた、そして、国家の真の意味を明らかにしてきた批判は、そのなすべきことを行なってきた。経済学は、政治とは無関係ではあるが全体の幸福ないしは苦悩を政治より遙かに深刻に条件づけるところの諸原理を、社会生活の中に見出した、そして、政治問題に対する株式取引所の影響は、経済学者たちの理論的考察を実践の領域に移した。観念論者たちの見落した民族の原理は、領土の境界に関する外交家たちの配慮を統制する権利があると表明した、この表明は、多くの場合、きわめて効果的であったので、国家の原理は、新しい（だが実際は非常に古い）原理に從属しなければならなかった。最後に、現代の社会機構に脅威を与えているのは、政治的変革であるよりは、むしろ社会的変革であるということ、政治的諸党派が相混淆し、それらの意義が経済的な階級対立の前で生気を失いつつあるということが、実際に確かめられた。加うるに、国家擁護論者たちの中で、保守的党派だけが有難迷惑な親切を国家に尽し、国家は本来理性と熟慮の所産ではなくて、社会生活における自然的な文化現象であると証明した。彼らは、いうまでもなく、それによって国家を一そう強固にしようと考えたのであるが、実際は、国家の理想主義的な意義をぶちこわしてしまった、なぜなら、人間はあらゆる必然的で純粹に自然的なものを意味づけ改造しようとするものだから。したがって、国家の中で人間的理性が自然的物質よりも大きな比重を占めるような高度の所産に、国家の自然的現象を改造すべきではないか？ ——という問題が出てくる。

現在では、これらすべてのことがらは、最近いまだに神聖視されているところのこの原理に遙かにきびしい批判的態度をとらせ、その嘘偽の理想化をあげき出し、かつ、それを真の理想化に置きかえること——すなわち、国家の自然的基盤を非常に簡明な形で明らかにした後で、いかにすればこの原理が進歩の発達過程にふさわしいものとなるか、いかにすればこの原理が個人の発達の諸条件・社会的諸形態に真理と正義を具現化する諸条件を、満足させ得るかを明示すること——を余儀なくさせている。

各人がいかなる強制にも心を煩らわされずに、変更したり放棄しさえしたりし得るところの経済的・道徳的・知的諸目的を追求しつつ、一緒に生活している間は、人びとは、あらゆる法律的・政治的なものと無縁な社会的関係の中に置かれている。彼らが契約者たちに拘束力を持つところの契約を結ぶや否や、彼らの社会は新しい生活段階に入る。もし、契約の履行を監視する強制的な力が契約に加わらない人びとに属しているならば、この社会は単に法律的に結合されている。社会の成員に契約履行の義務を負わせる権力がその社会自体の中に形成される時、この社会は政治的なものになる。協定を結んだ成員たちに拘束力を持つところの契約が、その承認をまったく求められなかった人びと、ないしはそれに逆って個人的損害のおよぶことを恐れるあまりに承認する人びとにまで、拘束力を持つようになる時、政治的な社会は国家になる。学術団体、適法の商業団体、政治

的秘結社が、初めの三つの形態の例である。

遠い昔に、人びとは彼らの選択しなかつた諸条件に強制的な服従を強いられたが、国家の起源もそれに劣らぬほど古いということは、前述のことがらから明らかである。社会には、知的発達・知識・精力の不十分な人びとが、常に圧倒的多数を占めていたので、それらの点で彼らよりすぐれた他の人びとが、彼らのために生活の諸条件を選択してやる必要があつた、それゆゑに、国家的機構は、初期の前氏族のおよび氏族の間集団や初期の遊牧種族の中に根を下した、そして、今にいたるまで、社会の政治的機関と呼ばれるものだけでは少しも満足してない。人間が自分の判断によらないで、彼の選択しない生活条件に服従しているところではどこでも、人間は国家的原理に服従している。

前述のことがらは、私が書簡第一二の始めに述べたところの対立的な二つの国家観を明らかにしている。いうまでもなく、国家的拘束の原理は、遠い古代に遡るまったく自然的な所産であり、古代に遡れば遡るほどますます広汎に適用された。この原理は、まず、ある人びとの他に対する物質的優越としてあらわれ、次いで経済的な従属関係に転じ、最後に理想化の手を経て道徳的な力になる。

しかし、国家の発達のもっとも初期の段階に、諸個人の一個人への単なる従属から国家を区別するところの契約の要素が、国家の中に現われる。成年の強い家長が、国家的強制の原理によらずに、個人的優越によって、年少者と弱い女性たちを支配する。まったく同様に、予言者は個人の權威によって、信者たちを支配する。家長に服従しないで済み、しかも他の人びとに対する彼の支配を助けるところの成年の成員たちが存在する時、家族の中に国家的要素が現われる。予言者が、儀式の執行者たちのみならず、補佐役達によって取り巻かれる時、宗派の中に国家的要素が現われる。一般に、諸個人の集団が、一個人・一機関・選出代表者会議の出す諸法令の拘束力——つまり、この団体に自発的に加わらなかつた他の人びとにまで拡大適用される拘束力——を、良かれ悪しかれ自分たちの考えている利益の名において、進んで支持する場合に、国家が発生する。したがって、契約を取り決めるのは少数の人間であるが、その強制力は大多数の者に拡大適用されるという特質を持つところの契約の原理は、ここでは、強制の原理に合致する。

もちろん、契約の原理のこのような拡大適用は、それを本質的に変えてしまう。契約の一切の道徳的・法律的な意義は、われわれが考察したように、誠実な人間が熟慮して引き受けた約束を義務として実行することに存している。しかし、ここでは、契約を取り決めるのは実はある人びとだけであつて、その擬制が他の人びとにも拡大適用される。取り決められる契約がどんなものかを少しも知らないのに、その履行を義務づけられるところの人びとの代理として、一個人が契約を決めることは、もっとも基本的な正義の諸要求に背くものである、したがって、進歩の概念に矛盾している。数百・数千・数百万の人びとを義務づける契約、しかも、このような契約に署名する全権を誰からも委任されていないわずかな人びとが、これを作成し・批准し・義務的なものにしたことが明々白々であるところの契約を、法律家はどのように考えるのか？ ある世代の取り決めた契約、しかも、それに続く一連の世代が、暴力によってこの契約を破棄したり、流血によって

これを抹殺したりしようと思いつく時まで、彼らを拘束し続ける契約を、どれだけ正しいものと認めることができるであろうか？ このような契約の中には、もちろん正義は存在しない、これらの契約が唯一の前提としているのは、強力な組織ないしは有力な多数者の存在である、しかも、契約は彼らにとって有利であり、かつ、彼らは自分たちの組織または多数の力によって、国家的契約に不満なすべての人びとを強制的にこれに服従させる。国家を去るか、さもなければ国家的契約を履行しなければならない——このようなジレンマに国民の一人一人が直面する。

もし、この契約に不満な人びとが非常に少数であるならば、彼らだけがこのジレンマの苦しみに敏感なのである、——彼らは憎むべき法律の軛の下で苦しむか、それとも、もっとも基本的な生活上の諸便宜を犠牲にし、これらの法律の不履行またはそれらとの闘争の罪によって、入牢・流罪・死刑に処せられても、甘んじてこれに耐えなければならない。不満な人びとは、最後には亡命する場合もある。これら不満な人びとの党派が、ばらばらに孤立した諸個人から成っている間は、彼らは常に抑圧されるであろう。この抑圧の時代が長びけば長びくほど、またそれとともに法律制度が醜悪であればあるほど、このような社会環境は、そこで生活する諸個人にますます墮落的な影響を与え、彼らの正しい理解力・強い意志力・信念を持ち信念のために戦う能力、ついには——社会的連帯の意識さえも、しばませてゆく。

しかし、不満な人々が、成長してゆく社会的な力に結集し、組織化されてゆくにつれて、彼らを見捨てることができなくなる、そして、国家機構そのものが危険にさらされる。これらの危険には、二つの種類がある。もし、不満な人びとが国土の全領域に分散しているか、またはその主要な諸中心地に結集しているならば、国家は改革または革命による基本法の変革に直面する。もし、不満な人びとが国家の一地域に結集しているならば、国家は分裂の危険にさらされる。いずれの場合にも、国家的結合は強固ではない、なぜなら、国家の諸法律が擬制的契約であって、現実的なものでないから、——つまり、国家的契約にしたがう義務を課されてはいるが、それについてまったく相談を求められたこともなく、同意したこともない人びと、しかも、無力であったり、闘志に欠けていたり、あるいは自分たちの権利と力を自覚し得ないばかりに、この契約に服従している人びとが、非常にたくさん国家に存在しているからである。

国家的契約に対する諸個人の協力が高まるにしたがって、それは一そう強固なものになる。なぜなら、まず第一に、その欠陥がより速やかに理解され、より正しく論議され、革命の手段によらずに漸進的改革によってより容易に除去され得るから。第二に、大多数の人びとが、国家の諸法律を自分たちの義務的な契約として認めており、その反対者たちがますます自分たちを無力に感じ、すぐさまそれに服従してしまうから。社会の全成員が意識的に相互契約を結び、契約者全体の同意によるその変更を認め、しかも、これに同意しかつその違背に対して責任を負うからこそ、その強制力がこれに同意する人びとにだけおよぶというような社会を想定しよう、そして、もしその成員全部が法律をこのような相互契約と見なすとすれば、このような社会が国家機構の理想であることは明白である。

しかし、このようにして国家的原理の本質そのものから得られた理想が、正にこの原理の否定を目指しているということに、読者はただちに気づかれるであろう。国家が他の社会的諸形態と異っている点は、そこでは、契約が少数の人びとによって取り決められ、かつ、多数の人びとを拘束するものとして少数者によって支持されているという点にある。国家的結合の二つの源泉——強制の自然的原理と契約の熟考された原理——が衝突する、なぜなら、後者は正義の名において強制を少なくしようと努めるから。政治的進歩が、社会生活における国家的原理の減少になければならなかったという必然的な結果は、ここから出てくる。このことは、実際に現在も変りがない。

政治的進歩は、二つの志向の中にあられる。第一に、国家的要素が、現実の社会的諸要求の所産である一切の社会的諸形態から分離して、自己の特別な諸機関を創り出してゆく。第二に、国家的契約に対する多数者の強制的従属が、次第に少数の人間に限られ、さらに国家の擬制的契約が一そう多くの現実性を獲得し、国家的結合が強まり、しかも同時にまったく社会的な結合に接近してゆく。これら二つの志向は、進歩的なものということができる、なぜなら、前者は国家の理論的真理を考慮におき、後者は国家的諸形態に正義をもたらすことを考慮にしているから。それにもかかわらず、この二つの志向は、その実現の過程で、人類の生活における国家的要素を最少限に止めなければならない。

家族における夫・父・家長の権力が、文明化した社会でほとんどすべての強制力を喪失した時、経済上の約束が履行されない場合に、それらが第三者の裁判に委ねられるようになった時、司法的要素が教会的・行政的要素から分離した時——その時、法律の強制力は、人間活動の一部にしかおよばなくなった。非常に多くの人びとが、国家的要素の圧迫をほとんど身を感じないで、全生涯を過すことができた。種々の社会的諸形態の役割は、思想家たちの理論の中で変化した。家族の理想は、愛する者たちの自由な結合・年少者に対する年長者の理性的な教育活動に変わった。権威的で偏狭な教会の理想は、個人的良心の自由に対する要求・実践的な信仰課題のための信者たちの自由な結合に対する要求に変わった。経済的結合の理想は、自由で連帯的な社会についての観念に変わった。ここには、社会的寄食者は存在しない。ここでは、競争が消滅して全体的な協力に変る。ここでは、すべての人が全体の幸福と全体の発達のために働く、同時にこの労働は筋肉労働と頭脳労働の諸要素を結びつけながら複雑化してゆく、しかも、それは苦痛と退化の要素でないばかりか、それ自体が喜びと発達の要素を含んでいる。ここでは、すべての人が社会のために自分の力に応じて働き、生活の維持と全体的な発達のために必要なすべてのものを、彼らの個人的な要求に応じて連帯的社会から受け取る、しかも彼らは、この社会の発達が同時に自分たち自身の発達であることを意識している。

かくして、まず最初に家族に適用され、次いで奴隷所有者と奴隷・地主と農奴・有産者と無産者の経済関係に適用され、家父長的・教会的・行政的諸形態における裁判に適用された強制の原理は、——これらすべての領域で次第にその力を失いつつある。しかし、文化的習慣は家族内にいまだに専制主義を維持している。資本家階級は、依然としてプロレタリアを支配している。罷免不能の選挙された裁判官や自主性を保証された陪

審員が、いまだに個人的な利益のために、時々行政機関の指令にしたがっている。これらの《社会的良心》の代表者たちは、単なる身分的・階級的利害の代表者である場合があまりにも多すぎる。ある場合には、個人的な悪用だけがわれわれの前に展開される。このような悪用は、微々たる数のもっとも発達した少数者だけが思想的原理に依拠し、かつ、一方では多数者が個人的ないしは集団的な利害に左右されて行動する社会では、避けることができない。またある場合には、——より意識的に行なわれるにつれてますます尖鋭化してゆく階級闘争の結果を目にする、ここでは、闘争そのものの中止をまたなければ悪は除かれない、しかも、この悪のあらわれは、個々の場合における強制の要素によるものではなくて、現代の社会で一つの階級が他の階級に対して強制的な不利益な状態に置かれていることによるものである。強制的要素のあらゆる形態との闘争は、すでに部分的に承認されかつ必然的に——そう完全な実現を目指す諸理想の名において、行われているし、また行われてゆくであろう。これらの理想の一部分は、この原理の他の諸結果とはまったく無関係に、諸個人の自由競争の名において、現代の社会機構の中にすでに実現されている。これらの理想の他の部分、この競争が全体の協力に代わる時に、実現されるにちがいない、それで、多くの思想家たちは、その時こそ強制的原理の最後の痕跡が必ず社会から消え失せるであろうことを、期待してもよいと考えている。

しかし、社会的諸形態の理想が、強制の要素に制限を加え、自由を求めれば求めるほど、それは、個人の偶然的な悪用からますます保護されなければならない。これらすべての分野で道徳的・理性的に行動する個人は、強制に訴えることを自らに許さない、ということ認めるとしても、第一〇の書簡で述べられたことがらを想起しなければならない、すなわち——道徳的＝理性的行為は、単に人間の行動様式中の一つであるということ、この他に、人間は動物的本能・旧慣墨守・情熱のなすがままに自動的に行動する可能性があるということがこれである。われわれは、人類における進歩が、これらの行動様式に相当する諸行為の量を減少するであろうことに、期待をよせることはできる。しかし、それらが現に存在しており、諸個人の知的・道徳的発達がまだ非常に不十分である間は、弱者を強者の行為から保護しなければならない。この保護は、不可避的に強制の性質を帯びる、したがって——国家的要素を含む。もちろん、ここでもこの要素はその最底の線に止まろうと志す、しかし、それにもかかわらず、進歩が人間の性向と習慣をいちじるしく変えてしまうまでは、この要素はなくなる。社会は、個人と行政機構の専横を排除しながら、その国家的諸機関を単なる非人格的な法の執行者に変えようと努め、かつ、国家の役割を、強制が行われぬように監視すること・弱者を強者の強制から保護することに止めようと努める。家庭人・信者・経済的企業の参加者である人間は、彼が従属している国家機構を、国家の利害にまったく無関係な裁判官が解釈し適用する法律の単なる非人格的な形態に、止めようと努める。

ここで、社会における政治的諸原理の進歩的過程は、その第一の志向の面で——つまり、国家的機能のそれ以外のものからの分離として——完了する。権力に対する服従という嘘偽の理想化は、あらゆる社会的分野で、自由な結合の原理によって崩壊する。国

家の真の理想化は、国家に正義（弱者の保護・誠実な契約の保護・不誠実な契約の阻止）を要求し、この点で国家的機能を最底の線に抑え、人間自体の向上が将来この機能を自然に減少させるであろうことを指し示している。この点における進歩の障害は、この本質そのものよりも、社会の古い習慣の中により多く存在している。主として、これらの障害は、国家的契約に強制的に服従させられる人間の数が、緩慢にしか減少しないということに存している。

この第二の政治的志向は、はるかに重大な障害に出会う、それにもかかわらず、この志向は、第一の志向と密接な関連をもっている。前に述べた一切の社会的諸理想の発達は、国家の保護的役割とまったく同じように、法律が社会の生活的諸要求に合致しているという仮定に立脚している。しかし、それは、この偉大な原理の嘘偽の理想化様式中の一つである。法律それ自体は、すでに考察したように、社会の発達に歩調を合わせて前進する動因を持っていないだけでなく、むしろ社会を文化的諸形態に釘付けにし、停滞へ導く傾向を有している。立法の発達の可能性は、他の補足的な諸原理の中にだけ——つまり、利他的愛情・より良く認識された個人と集団の利害・道徳的信念の中に、存在している。法律を発達させることはできるが、法律自体は発達することができない。正義は、法律がその発効・存在・廃止を通じて、強制の原理をますます多く失うように要求する。これは、社会の立法への参加が増大することによって実現される。立法が、社会と自由に選挙されたその代表者たちの手に移るにしたがって、法律自体が諸法律を改正するための手段を与えるようになる。権力が習慣だけに拘束されるところのまったく社会を墮落させる政府形態は、階層のおよび官憲的国家の多様な形態に移行する、もはやここでは、住民のある部分が、事態の進展に影響を与える権利を持つ。次いで法律国家の諸課題が広汎に取り上げられる、ここでは、階級闘争の経済的諸条件だけが、一般大衆のそのような影響力に制限を加える。国家的結合は、ますます社会的結合に接近してゆく。国家は、自由な契約を結びかつ自由にそれを変更する人びとの結合体であるという性質を、ますます強める。国家的契約の強制力は減少し、しかも、なお一そう減少の方向を目指してゆく。国家の理想は、私がすでに述べたように、契約を審議する手段と可能性を持ち、かつ、それを自由に審議して承認した者、しかも、その履行を同様に自由に拒否し、かつ、そのあらゆる結果をも拒否し得る者だけが、この契約にしたがう、というような結合体についての観念に変わる。

しかし、このような理想の実現は可能であろうか？ 一般に、社会におけるいちじるしい進歩の動きは、このような方向で可能であろうか？ この途上に、自然的ないしは歴史的なうち克ちがたい障害が、存在していないだろうか？ これらの問題は、文明的諸民族の現在の状態を、その前に提起されている諸理想と比較してみるならば、また、これらの理想がいかに実現にほど遠いかを理解するならば、自然に生じてくる。

知識と意志力は、個人が他人の自由を侵さずに、自己の自由を守りかつ享受し得るための必要不可欠の諸条件である。しかし、知識の普及と意志力の発達は人類社会では非常に微々たるものであるから、少数者の決定した諸条件に多数者が義務的に服従することの外には、何一つ現代の社会機構から期待することはできない。どのような国家も、

いまだに次のような人びとの集団としてわれわれに意識されている、すなわち生れおちると同時に所与の法典にしたがわされ、かつ、彼らが相談にあずからなかった政治的諸形態に後で不賛成を表明すると、犯罪者または叛逆者と宣告される人びとの集団がこれである。この集団の中のごく少数の者が、一般大衆を抑圧する諸形態の中で何が特に苛酷であるか、また、国家的結合を弱めずに改革によって社会の状態を改善するためには、それを何に置き換えることが望ましいか、ということをも単に指摘できる程度の発達を遂げる。この政治的インテリゲンツィヤの中のごく少数の者だけが、立法によって自分の見解を実現し得るか、あるいは、せめてその試みだけでもなし得る状態に到達する。それにもかかわらず、この少数者の努力は、歴史に影響を及ぼす。歴史の舞台に登場しながら、わが国におけるがごとく、無制限に権力を振るう古代的諸形態を温存し続ける国々は、ますます少なくなる。もっとも進んだ国々においては、国家的契約を支配する政府は、法律にしたがう一般大衆の中から選挙によって選ばれた信任代表者たちで構成され、有権者の数はできるだけ拡大されている。契約の改正に対する参与権は絶えず拡大する。貴族は平民の政治的同権を認める。第三階級は、貴族および僧侶階級と区別がなくなる。議会の改革諸法案は、政治的な権利行使の資格を下げつつある。概して、成人男子の選挙権は法律化されている。女性の政治的権利の擁護者たちが現われつつある。しかし、選挙権がどれほど拡大されていようとも、また、北アメリカ合衆国の政治機構とアジアの汗国ないしはロシア帝国の機構との間にどれほど大きな隔たりがあろうとも——やはり、これら二つの極端な形態の中には、あらゆる中間的な諸形態における場合と同様に、共通の特徴が残っている、すなわち、非常に多数の人びとが、審議にあずからないか、または同意を表明しないところの法律的契約ないしは階級的支配に、服従させられている。国家は、到るところ、多少の差こそあれ非常に多数の所与の領土内の住民にとって、強制的な拘束となっている。

実に、この所与の領土という言葉の中に、個人に対する国家的契約の拘束力が存している。ある人間が所与の場所に生れた。この場所は所与の領土の一部である、なぜなら多かれ少なかれ過去に遡る時代に起こった多くの事件が、人間の住む一切の土地を政治的領土に区分したから。ここで生れたがゆえに、彼はここの法律にしたがわされる、しかも、これらの法律は、彼が審議にあずかりかつ承認したものでなく、多くの場合、決して審議にあずかる可能性もないであろう。しかるに、これらの法律は、彼を圧迫し、彼の発達を妨げ、彼の誠実な信念に矛盾し、ついには彼を不満な人びとの中に追いやる。祖国を離れること、これは傷ましい解決である、だがこれとても時には実行が不可能であり、ともかくも困難である。信念に背いて服従すること、それは——人間の価値を下げるに等しい。出口は一つしかない、——あらゆるチャンスと悲惨な結果を個人に与えるところの闘争・改革的または革命的諸党派の陣営に加わることだけである。この際形成される諸党派が不可避免的に準拠するところの手段方法については、すでに述べた。しかし、今ここでわれわれが注意を向けなければならないのは、別種の事情である、——すなわち、戦闘的な政治的諸党派の存在が国家組織を脅かすところの危険、およびこの闘争によって社会生活一般にもたらされる混乱がこれである。国家は、領土内に不満な人

歴史書簡

びとが存在していれば、諸法律を彼らの侵害から守りかつ自己の勢力を社会に維持してゆくために、分不相応な力を費さざるを得ない。このことが、社会生活の他の諸分野における生産的・発展的な活動から社会の力を引き離し、すでに考察したように、進歩の諸要求によって最低の線に抑えなければならないところの活動に向けさせる。それが、社会成員の憤懣と相互の不信を社会の中に増大させる、したがってまた、健全な社会的協力に対する強固な障害になる。一方では、保守的な議会在が、司法官の候補にされている非常に立派で有能な法律家を、反対投票で選から洩らす、なぜなら、より良い統治形態についての彼の考えが彼らと違っているから、他方では、自由主義的な編集局は、保守主義者と名のる人間の小説を買うわけにはゆかない。一方では、植物学の教授が更迭される、なぜなら、経済問題に対する彼の見解が、大臣には危険なものに思われるから、他方では、仲間同志が、薄馬鹿の皇帝に対する死刑宣告のことから、射ち合いさえしかねない有様である。国家の領土が広げれば広いほど、所与の不満の原因があれば、不満な人びとがより多くなる可能性はますます大きく、彼らを監視することがますます困難であり、保護者の役割だけにとどまらなければならない筈の要素を守護するという非生産的過程に、ますます多くの力が費される。しかし、このような手段の強化は、通常さらに不満を増大させ、社会機構の強固さは、ますます疑わしくなる。それは、慢性的な不信と不安の病気に冒され、その発作は非常につまらないことから起こる。たとえ事件が動乱にいたらないとしても、社会的有機体の一切の正常な生理学的機能が悪化し、社会は墮落して、その団結が失われる。

しかし、法律が、個人的な不満ではなくて、地方的な不満を生ぜしめる場合には、広大な領土を持つ諸国家は、はるかに大きな危険にさらされる、すなわち、これらの法律が、領土のある部分では多少とも自発的に承認された契約となっているが、他の部分の住民には敵意を抱かせている場合である。古今の歴史を通じて、政治的領土の区分が、はっきり認識された住民たちの諸要求によって決定されたためしはめったにない。しかし、領土の区分が、所与の時代のはっきり認識された諸要求によって決定された場合でも、領土の諸部分の合理的連繋が長い間強固で合理的であるという保証にはならない。所与の時代における住民の諸要求は、あらゆる時代にわたる住民の要求ではない、しかも、社会は発展しながら、その成員間の結合を強化することもあるが、同時にまた、今まで分離の機運に恵まれなかった諸地域だけに見られるところの別種の利害に、存立の根拠を与えることもある。分離主義は、非常に合理的な根拠に基いている場合もあるが、まったく同様に、非常に馬鹿げた衝動に基いている場合もある。しかし、それは、常に社会を弱体化するもとである。この弱体化という言葉は、一〇万平方マイルの領土を支配する国家の中樞が、数百万フランの収入減を伴うおよそ二万平方マイルの領土の縮小に脅かされているという意味で、使われているのではないということを、くれぐれも記憶しておく必要がある。アメリカ植民地の分離は、イギリスを弱体化しなかった、同様に、インドとオーストラリアの独立は、恐らくイギリスをさして弱体化しないであろう。分離主義が社会を弱体化するのは、それが社会の内部に不和と不信の種をまき、国民の一部に全体の事業に対する冷淡を生ぜしめ、国民の他の部分に貨幣と人間の巨大

な資本を——それらが社会の発達のために必要な時に——国家の保全を維持するために大部分非生産的に費させるからである。たとえ分離主義の企図が失敗に終わっても、猜疑と敵意の念は、勝者と敗者たちの記憶の中に依然として長く残る。たとえ分離が成就されたとしても、伝統的な敵意が消え失せるには、また、今心ならずも同盟者となった昨日の敵達が全人類的事業をともしにする隣人・朋友として、一定の目的のための自発的な同盟者として平和な関係を結ぶには、時間を必要とする。優勢なパリに対するブルターニュおよび南フランスの嫌悪を拭い去ったのは、第一フランス革命の諸動乱とこの革命が掲げた——そう広汎な政治的諸理想だけであった。18世紀の闘争の記憶は、現在互にいんぎんな態度をとっているにもかかわらず、ジョン・ブルと兄弟ジョナサンとの間に、まだ消え失せていない。ヤンキーとインディアンの子孫たちが、自分たちを再び完全に一つの国家の市民と感ずるようになるまでには、リッチモンドをとり囲む多くの墓のほとりに立つ樹々の葉は、まだ幾たびも緑に萌えかつ紅葉することであろう。それゆえに、社会における分離主義的志向の発生は、諸国家にとって、分離そのものより遙かに危険である。政治的諸中心地とその他の地方との経済的諸条件の相違、政治的重要性の相違、および個人と政党との政治上の活動範囲の相違が、常に不満の種になり得る国家では、これらの志向を予防することが、進歩の目的になっている。弾圧は、危険を包み隠し、一時的に遠ざける、しかし、弾圧手段を用いることが多くなるにつれて、危険は国家にとってますます大きくなる。第一に、国民相互の憤懣——つまり、分離主義の最大の悪を成すもの——を増大させる、第二に、弾圧手段は人間の価値を低下させ、それが習慣になっている社会では、一切の発達を停止させる。しかし、社会における憤懣の増大と国民の人的価値の低下は、国家を大いに弱体化し、それを隣邦諸国に対して不利な状態におとし入れるところの現象である。ところが、国家の分離主義との闘争は、外部に対するその強固さだけしか考慮しない場合がある。

事実、もしわれわれが歴史の発展諸段階をあとづけてみるならば、国家の大きさとその諸地方の強固な結合は、その外部的関係の観点からだけ、特に重要であったことに気づくであろう。経済的繁栄、社会の科学的・芸術的発達、個人の権利の拡大、より公正な人間関係は、——大きな国々における場合と同様に、小さな国々においても立派に実現されたことがある。たとえ世界を個々の自主的な共同体の集まりであると想像したとしても、われわれは、上述のすべての点で進歩の低下がここに見出されるなどと考えるべき理由がないであろう、なぜなら、広汎な経済的・科学的・その他等々の企図は、もっぱら一定の諸目的のために結ばれた共同体間の同盟によって、実現され得るであろうから。

しかし、外部的諸関係ということになると、問題はまったく別である。強固に組織化された政権を持つ国家は、諸国家の連合体と衝突する際に、——たとえ後者の力が物質的に前者を凌駕していても、両者の文明の差があまりにも大きい（ペルシヤ人とギリシヤ人の戦におけるがごとく）場合は別として——戦争と外交の面で圧倒的に優越した地歩を占める。戦争の準備を秘密にし、精力的に外交目的を追及するには、単独国家の方が、独立諸国家の連合体よりも遙かに都合がよい。諸国家の連合体は、脆弱で現実には

歴史書簡

しないことがあり、そのような場合には、小国は大国に押し潰されやすく、その掠奪の犠牲になるか、あるいは大国の政策に追随せざるを得ない立場に追い込まれ、このようにして唯名ばかりの国家に成り下がるおそれがあるということについては、語る必要もないであろう。ともかくも、諸国家の外部的諸関係は、大小の諸国家に関する問題をまったく異った基礎の上に置くものである。国家が小さければ小さいほど、その諸地方相互の結合が弱ければ弱いほど、その位置する地理的諸条件が隣邦諸国の掠奪に恰好なものであればあるほど、その独立はますます大きな危険にさらされる、したがって、社会の内的発達はますます弱まり、有り得べき外的危険に対する準備のために、ますます多くの力を非生産的に費さざるを得なくなる。しかも、これらの分不相応な力の消費は、ますます重くその住民たちの肩にかかってくる。このような事情に照らしてみれば、嘘偽の理想化が国家領土の一切の増大をその隆盛と見なし、その一切の縮小を衰微と見なしているのも、容易に理解できる。もちろん、国家の一地方の分離は、時には国家を弱体化する、しかし、この弱体化は、その地方が実際に国家組織体の有機的な一要素であるのに、隣国に掠奪される場合に生ずる。たとえば、フランスが新興ドイツ帝国にアルザスとロレーヌを掠奪された時、このようなことが起った。もちろん、このような掠奪は、それを受けた国家に非常に不健全な影響を与える、しかし、その理由は、その国の実際的弱体化の意味においてというよりは、むしろ失地の回復と報復の渴望が長い間あらゆる国家的・社会的配慮の前面に押し出されるということにある。しかし、これらの掠奪の事実、それを行う国家にもっと大きな病的な影響を与える。ポーランドの数次にわたる分割がこれを証明した、すべてのヨーロッパの国々におよぼしたこの墮落的な影響は、今日にいたっても、後を絶っていない。現に、執拗な分離主義的熱情に燃えているアルザスとロレーヌが、これを証明している。根深い分離主義的志向に感染した諸地方は、その離反によって、国家の衰微を促進するよりも、国家を強化する場合の方が多い。しかし、第一に、領土の所与の地方の分離主義的志向が、その地方にどれほど深く根を下しているかを、正しく判断することが非常に困難であり、第二に、この点に関しては大いに誤った判断を下しやすく、第三に、分離主義的志向が、住民中のある階級の利害を目的とし、他の階級の利害に反する場合がしばしば生ずる、それゆえに、疑わしい場合には、いかなる国家も、その諸地方の分離主義と闘うし、社会がこの戦のために巨大な力を——時にはまったく無益に——費さざるを得ないということは、まったく当然である。侵略を好む他の諸強国が存在している時は、いかなる社会も弱者たることを願わない。しかし、国家間の相互関係は、原始的な掠奪性をいちじるしく保存してきた。これらすべてのことが、不可避的結果を導き出す。大きな歴史的諸国家の存在が歴史的事実であってみれば、それを考慮に入れない訳にはゆかない、そして、若干の大国が世界地図にのっている間は、あらゆる社会がその自主的な発達を全うするために強大な国家組織体に結束しようと努めるのは、まったく当然であろう。国家がすでに結束を固めた時には、全力をあげてその保全に努めることも、まったく当然である。

かくして、われわれはゼレンマに逢着する。国家が小さければ小さいほど、したがっ

て、外部との闘争に弱ければ弱いほど、それは、独立喪失のますます大きな外的危険にさらされている。この国家がその独立を全うするためには、この点で一そう強力になり、領土を拡大する以外に道はない。しかし、それと同時に、その諸地方の利害の相違・諸中心地とその他の地方との政治勢力の相違が大きくなる、不満が増大する、したがって、分離主義のために弱体化される国家は、大きな内的危険にさらされる。

もちろん、国家機構における進歩は、このヂレンマの解決——すなわち、それが示している両方の不都合な点を次第に除去してゆくこと——に対する努力に存している。これは、理論的には次のような方法ではじめて達成され得る、すなわち、国家が、国内の諸個人に対する拘束をできるだけ少なくし、小さな住民諸中心地における政治活動をできるだけ広汎に認め、同時にその対外的威信を維持してゆくようにすればよい。

北アメリカ合衆国で、今までに歴史上でもっとも大規模な試みがなされた、この試みは、無限に発展する可能性を持ち、しかも、主要な諸中心地の独立性をできるだけ完全に尊重するところの十分に強力な国家的統合体を、構成しようとするものである。しかし、北アメリカ合衆国は、この点でまだあまりにも大き過ぎる単位から成る連邦であって、州の政治生活のもっとも重要な諸機能に住民が全面的に参加できない状態にある、それゆえに、州の住民全部が、国家的契約——つまり、州の諸法律——に本当に同意しているという保証はなされていない。まったく同じように、理論的にも実際的にも明らかなことであるが、連邦憲法はまだあまりにも多くの次のごとき要素を含んでいる、すなわち、それらは、将来他国に対して一つの国家的統合体として行動し得る全連邦の可能性を傷つけずに、しかも地方の諸中心地に移譲されてよいものである。1871年のパリ・コンミューンの動乱の際に、小さな諸中心地に大幅な自治権を認める政治的連邦機構のプログラムが掲げられた、しかし、闘争の諸条件がこのプログラムの進展を不可能にしたので、政治的実験と呼び得るほどの段階にさえいたらなかった。

かくして、前述のヂレンマはどこでも解決されていないが、国家生活の二つの面——内的な面と外的な面——をより厳密に区別することによって、解決され得る。これは、恐らく、より完全な連邦機構形態の創造によって実現されるであろう。すなわち、北アメリカ合衆国のプランにならって、全領土を強固に組織立てるか、それとも、社会主義者たちの目指す未来の機構の中で一そう確実と考えられるところの自由な一時的連邦を、一定の目的のために組織する場合がこれである。前者の場合には、国家生活の外的な面——つまり、世界の国家系列中における一つの力としての国家——は、領土を統合する中央政権に所属することによって、この領土の拡大に対する自然的志向を維持することができる、しかし、この機能は、歴史が諸国家間の関係を非掠奪的なものにし、かつ、それらの衝突を少なくしてゆくにつれて、ますます重要性を失ってゆかなければならない。国家生活の内的な面——つまり、個々の地方と個人を多少とも拘束し、最大の不満を招来するおそれのあるもの——は、ほとんどすべての成人に実際的な政治活動への参加を許容するところの群小の諸中心地に、ますます完全に移譲されなければならない。多種多様な一切の地方的要求と地方的文化は、地方的機構の相違の中に反映されなければならない、しかも、ある地方の政治機構の諸条件に拘束を感じずる市民は、彼の生

歴 史 書 簡

活の理想によりふさわしく、かつ、政治的に他とまったく同等の権能を持つところの他の地方的中心地に移ることができる。この場合、広大な領土は拘束を感じさせないだけでなく、むしろ市民を気楽にさせる、なぜなら、領土が広ければ広いほど、彼の希望にかなった地方的中心地を見出す可能性が大きくなり、しかもそれと同時に、彼は、ある政治的な生活諸条件を他のものと取り替えても、共通の国家である自己の祖国に忠実であるという意識を、保っているからである。この際、中央政権がしっかり掌握して保護できるのは、領土全体に共通する次のごとき諸法律だけである、すなわち、それらは、歴史的に作り出された文化の諸条件・地方的要求と一時的欲求の所産によって作成されたものではなくて、全人類的真理と全人類的正義に関する科学の正しい結論——つまり、前の諸書簡で指摘した進歩の諸条件とそれらの直接的な総体的結果——によって作成されたものである。これらの法律の科学性と全人類的性は、社会の文化的相違と無関係に、当然あらゆる個人に適用されるものとならなければならない。これらの法律の拘束力と強制力は、社会全体のための進歩の諸条件を、諸個人の私的欲求から必ず保護しなければならないという意味しか持ち得ない、しかし、この拘束力は、社会の発達にともなって、国家的法律からますます多く個人的信念に移行し得る、したがって、ますますその強制力を失ってゆくであろう、つまり、国家機構の特質は、その他の政治的諸関係によってますます薄れてゆくであろう。

このような事態になれば、法律の強制力と個人の関係は、歴史のあらゆる時代がわれわれに示しているものとまったく異ったものになるであろう。発達のおくれた人びとは、いつも無頓着に自分を文化に適応させてきた、しかも、批判力に乏しかったために、所与の機構の欠陥に苦しむことが少なかった。もっとも発達し、もっとも批判力の旺盛な人びとは、法律の強制力にもっとも敏感であった。だが、つい今しがた考察したばかりの社会機構の中では、思索する人びとは、国家制度の中にほとんど障害を見出さないであろう、なぜなら、政治的祖国を去ることなく遠くに移転し得ることが、彼らの選択した文化の環境内で生活することを可能にし、かつ、国家全体の諸法律の科学性が、彼らの力を政治的諸条件の変更に向けさせずに、個人的・社会的発達により重大な利害に向けさせるから。こうすることによって、人類の生活における国家的要素は、すでに述べたように、社会の進歩的発達に応じて、最低の線を目指すであろう。国家間の衝突の減少は、外的諸関係の面で国家的要素の意義を低めるであろうし、個人の意識的成長と社会的諸形態における真理と正義の実現は、国家全体の中枢から発する内的強制力を減少するであろう。小さな個々の諸中心地に移譲される筈の国家の強制的機能は、地方的政治機構の多様性・その機構の地方文化への適合・祖国を去らずに最適の政治機構を選択し得る個人の完全な自由によって、その強制力を失うであろう。こうすることによって、地方の諸中心地は、自由な社会的連合体になろうと努め、国家は、歴史的強制ではなくて、理性の義務を、その存立と統一の根拠にしようと努めるであろう。国家的契約は、一方では、諸個人の自由な契約となり、他方では、科学の成果となるであろう。国家的結合は、自由な社会の結合に完全に変わるであろう。しかし、この国家機構形態でさえ、現代の社会主義が未来に実現を企図しているところの小さな諸中心地および諸集団のより

完全でより自由な連邦制度にいたる過渡的な形態と、見なさなければならぬであろう。

《しかし、こんなことは、一切どこにもない、——と読者はいうであろう。現代の諸国家は、たえず軍備を強化し、法律と刑罰によって厳しくその統一を護持しながら、互に神経を尖らせて対抗し合っている。国家的契約は、この契約に同意するか、しないかについて一度も問われたことのない国民に、拘束力を持っている、しかも、服従は刑罰の恐怖によって保たれている。科学は、講壇の上と書物の中にあるだけで、法典の中に取り入れられていない》と。もちろん、現今の諸国家は、現在のような状態においては、顕著な進歩的志向よりも、過去の歴史の残滓を遙かに多く含んでいる。国家機構の嘘偽の理想化は、まだ多くの信奉者を有している。社会の保護的要素——たえず最低の線に止まろうとする志向を持っている要素——としての国家の真の理想化は、どこにも実現されていないだけでなく、これを認識している者も、まだ非常に少数である。だが、現在を非難するのは止めよう、なぜなら、それは過去の不可避の結果であるから。しかし、進歩の可能性は、現在の中に存在しており、ただ一つの道を進みさえすれば、国家の進歩は可能である。進歩を認識し、それに奉仕しようと望むすべての人は、改革または革命の助けをかりて、現存の諸国家をこの進路に向かわせるように、努力しなければならない。もし、この進路が可能でないとすれば、政治機構の進歩はとうてい考えられないし、政治史は社会的病理学の年代記に止まるであろう。

社会内部の国家的要素を減少させるための要求を、政治的進歩のために提起するのは、ある読者には完全な矛盾と考えられないであろうか？ 進歩一般の名において、この要素を弱めるならば、進歩的党派は、敵と闘うための最上の武器を自から捨てることになる、と考えられないであろうか？ ——社会内部の国家的要素が社会の進歩とともに減少してゆくという思想は、まったく新しいものではない。ついでながら、1813年に出た著書の中で、ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテがすでにこの思想を表明しており、それ以後この思想は一再ならず論述されている。アナーキストの理論家たちは、国家的要素の除去をその学説の原則とし、強力な進歩の敵との執拗な闘争の時期においてさえも、国家的要素の存在の必要性を否定した、しかし、もはやこれには同意しがたい。国家的要素の弱化は、もちろん、国家的な力による弱者の庇護・思想の自由の保護等々の必要性を、減少することにかかっている。法律の保護する資本の独占家たちが存在し、多数者が発達のための基礎的手段さえ持っていない間は、国家的な力は、進歩または反動のために闘う党派が獲得しようと務めるところの必要不可欠の武器である。このような諸条件の下では、批判的に思索する人びとは、国家的な力を、もっぱらこの闘争における武器と見なさなければならない、そして、必要不可欠の武器を手に入れ、これを進歩の完成・反動的党派の撃破に向けるために、全力を尽すことが可能となる、しかし、この武器を用いるに当って、進歩のための闘士たちが忘れてならないことは、進歩的活動家がきわめて慎重に取り扱わざるを得ない諸特質を、この武器が有しているということである。使用する武器の強化について配慮するのは、戦闘においてはまったく当然のことである、しかし、国家的権力の強化は、この本質そのものからしても、その強化が

個々の場合に必要の限度を少しでも越えるや否や、社会の進歩にとって有害なものになる場合が出てくる。それは、常に社会生活の拘束的・強制的要素の増大に対応しており、個人の道徳的発達と批判の自由を常に抑圧する。このことが、国家的手段による進歩的活動を行う上で、主要な障害になっている。このことが、下ごしらえのできていない社会で進歩を法令化したところの有名な改革者たちによってもたらされた失敗または害悪の原因となった。進歩のために闘う際に、その個々の場合における国家的な力の使用方法を決定するのは困難である、しかし、それらの力は、消極的に——つまり、現存の文化的諸形態が社会の自由な発達に対抗させているところの障害を打破するために——利用される場合にのみ有益であり得ると考えるのがもっとも正しいであろう。しかし、これは——大いに議論の余地ある問題である。国家的結合が、進歩および反動のための闘争における強大な力である間は、批判的に思索する個人は、この力を次のごとき諸目的を達するための武器として使用する権利を持っている、すなわち、弱者を保護し、真理と正義を拡め、肉体的・知的・道徳的に発達する手段を個人に与え、進歩の道に入るために必要な最少限の諸便宜を多数者に与え、思想家にはその思想を述べる手段を、社会にはそれを評価する可能性を与え、かつ、社会的諸形態に柔軟な適応性を与えることによって、それらが機能麻痺に陥いるのを防ぎ、それらの修正を容易なものにし、それらを真理と正義の理解を拡めるのに恰好なものとするのが、これである。このことは、所与の時代の實際あるがままの国家に妥当するだけでなく、前に第八の書簡で述べたように、文化的環境の中で個人の遭遇する一切の社会的諸形態にも妥当する。しかし、国家的要素の助けをかりて、他の社会的諸形態における人間的諸要求の科学的実現のために活動する際に、進歩的活動家が銘記すべきことは、国家という形態そのものが何らかの特別な現実的要求に合致しないということ、したがって、それは決して進歩的活動の目的であり得ないし、いかなる場合にもその目的のための単なる手段にすぎないということ、したがってまた、他の指導的諸目的に応じて変化しなければならないということがこれである。身体機能にひどい異状を来した時には、非常に強力な治療を施さねばならぬ場合がある。病状が好転した場合には、医薬をもっと弱めなければならない。医者は、その患者が規則正しく養生につとめ、治療がまったくいらなくなった時はじめて、彼が健全であることを認める。

はたして人間社会が目的とし得るのは、永遠の政治的治療であって、社会学的養生法による健康な生活でないのだろうか？

書簡其の一四

国家の自然的境界

私は、前の書簡で、社会の政治的進歩について語り、この進歩が社会生活における国家的要素の減少に存しているという結論に達した。私は、現代の社会機構がこの進歩の道をまだほんのわずかしか進んでいないこと、領土の一部住民を彼らが審議にあずから

なかつた生活の諸条件に強制的に服従させる国家的原理が、現代社会の通則であることを、指摘せざるを得なかつた。このような事態は、統一諸国家が国家間の闘争で勝利を収める確実な保証を得るために領土の拡大に努め、その拡大にともなつて経済的・道徳的諸欲求をますます異にする住民諸地域を併呑してゆくから、一そう諸個人に重圧を加えてくる。もちろん、一人一人の個人は、彼らの住居を領土内に保有しかつ国民としての義務を彼らに課すところの国家に抵抗することはできない。しかし、思想家たちは、このような種類の不断の偶然事から個人を守るために、国家の拡大の自然的限界を示すべき種々の原理を提起した。もし、このような原理が確立されるならば、各国家の存在の合理性ないしは不合理性、征服戦争の正当性ないしは不当性——すなわち、理想的な地球上の領土分割方式——を、科学的に決定し得るであろう。そうすれば、あらゆる国家は、その領土的発展に対して完全に明確な目的を持つことになるであろう。そして、この目的から逸脱する場合は、必ず後続の諸世代に困難な闘争——もっとも、この闘争は、国家がいつかはその自然的境界におさまるということでけりがつくのだが——を残すのだということが分るであろう。このような考えは、多くの流血の闘争や諸個人の数々の苦悩と悲哀を人類の歴史から取り除くであろう、なぜなら、当然予想されるように、諸民族の運命の指導者たちは、たとえその数が少なくとも、諸事件の自然の流れに本質的に矛盾する事業のために血を流したり資本を投ずることが非常に馬鹿げたことだと、考えるであろうから。

しかし、現在にいたるまで、これについてのいくらかでも合理的な原理は、まだ一つとして提起されなかつた。国家の自然的境界は、大ていは、いずれかの一片の土地を侵略する掠奪的意図を隠すための仮面にすぎなかつた。もし、歴史に讃えられるさまざまな征服者たちの事業を注意深く検討してみるならば、彼らが自分の国家のために獲得しようとした境界は、事実自然的なものであることが分る、しかし、それはまったく別な意味で自然的であつた。彼らは、人間をそのつまらぬ動物仲間近似させる非常に素朴な原理——できるだけ掠奪せよという原理——に準拠していた、しかもこの際、実力の自然的な限界が、国家の自然的境界を決定していた。このような征服者たちの理想は、常に全世界国家であつた。政府の形態も、征服者の種族も、文明の発達程度も、この点では少しも相違がない。ティムール、ルイ14世、アレクサンドロス大王、ナポレオン1世、ローマ共和国、ヴェネツィアの共和政体、北アメリカの民主政体は、まったく同じことを念頭に置いていた。もし、アメリカのわれわれの友人たちが、現在その政治綱領において新世界大陸だけに止まっているとしても、それは一時的なはにかみに他ならない、なぜなら、まず第一に、アメリカ大陸占有の綱領は、若干の後続諸世代に少なからぬ問題を残すに足るほど広汎な内容を持っており、第二に、全アメリカ大陸を領有する国家は、世界中の全部の国を不可避的に支配するであろう、したがって、それらの国々の独立は単に名目だけのものになるであろうし、最後に第三には、最初の綱領が実現された暁には、第二のより広汎な綱領の作成を妨げるものがないであろうから。

国家の自然的境界を決定するために現在までに提起された種々の原理の中で、特に注目し得るのは二つだけである。それは、戦略的な境界と民族別の境界である。

もし、本質的な国家関係が闘争であるとすれば、攻撃に対して最大の保証を与える国境線、すなわち、最少の費用で自国の領土を侵略者から守り得る国境線を、各国家の自然的境界と見なすのは、まったく当然である。しかし、このような国境線が目的に適うのは、国家が防備を整え、防衛の志気が旺盛で、防戦力が攻撃側の軍事力にさして劣っていない場合だけである。換言すれば、戦略的国境線が効果的であるのは、それがなくても国家の防衛が非常に強力であり得る場合だけである。もし、国家に上述の諸条件が存在していなければ、戦略的境界は何の役にも立たない。広い河や海といえども、山脈・万里の長城・評判倒れの要塞の四面堡と同じように、老練で精力的な司令官たちをほとんど阻止できなかった。物質的・精神的に強力な国家にとっては、どんな場所でも立派な戦略的境界線になる、だが政治的に弱体化した時には、このような境界はただ地図の上ののっているにすぎない。

最近、民族の原理が、歴史的諸事件の歩みに対してますます大きな影響力を持ってきた。私は、第一の書簡の中で、この原理に対する個人の関係と、民族がどのような諸条件の下で進歩的原理になり得るかについて、語っておいた、しかし、第一の書簡では、問題を複雑化する事情、すなわち、諸民族の衝突の場合を考察するのは適当でなかった。国家の原理を考慮に入れなければ、この場合を考察することが不可能であった。なぜなら、諸民族の衝突は、諸国家の衝突という形か、あるいは、国家の統一および分離のための国内における闘争という形で発生するから。戦争が同一民族に属する諸社会の間におけると同じくらい、しばしば相異なる諸国民の間で発生するということを、歴史は一再ならず証明してきたが、最近多くの人びとは、国家の自然的境界の決定に民族の原理を適用し、この原理を未来の戦争と内乱のもっとも確実な防止手段と見なしている。この点で、民族の原理は、二重の志向を表している、すなわち、第一の——肯定的な——志向は、同一民族に属する諸個人を一つの国家に統合しようとするものであり、第二の——否定的な——志向は、諸個人と血縁関係のない他の民族によって形成されているところの統一国家から彼らを解放しようとするものである。民族的原理のこれら二つの要素を、どれだけ進歩的なものと見なし得るかについて、考察してみよう。

前者は、次のごとき命題、すなわち、言語・慣習・生活様式によって文化的な結びつきを持つあらゆる個人に対して、同一の国家的契約が拘束力を持つのは当然かつ正当であるという命題に帰することができる。——しかし、経済的・政治的・知的諸要求をはなはだしく異にする諸個人に文化的な結びつきが存在し得ることも、まったく明らかである。同一の言語を語る人びとの二つの集団が、まったく異った環境を持つ場合もある。商工業の諸中心地は、生活様式の類似した人びとにとって相異なる場合がある。民族の一部にとっては、諸隣国の侵略から生存を防衛する必要上、行政上の中央集権と政府の権限の格段の強化が必要とされる場合がある、ところが一方では、同じ民族の他の一部分は、彼らの居住地の地理的關係から外部の攻撃を受けるおそれがなく、このような中央集権化を必要としない、したがって、国家契約の強制力を最少限に止めようと努める場合もある。このような種々の集団を単一の国家的契約で統合するのは、はたして進歩的なものと見なすことができるであろうか？

所与の領土の一地方の住民によってその地方の特殊な利害と要求に基いて造り出された政治的諸条件が、同一の言語とその他若干の文化的特質だけで結ばれているところの同一領土内の他地方の住民を拘束することは、はたして進歩と見なすことができるであろうか？ 共通するものをほとんど持たない人びとを、一つの強制的な契約で人為的に統合しても、個々人の真の欲求も、もっとも正しい人間関係の理解も、かちとることはできない。社会的諸形態の中に正義をもたらすことは、このような統合においては、まず見出しがたい。この統合は、ただ相互の腹立たしい感情、すなわちすでに述べたように、国家の分裂そのものよりも危険な分離主義的志向の源泉を、国内の住民にもたすただけである。それは、国家をますます抽象的な全一体に変えてはゆくが、生き生きした統一体に変えてはゆかない。しかもその統合の下で、ますます大きく前面に現われてくるのは、住民の利害・文化的習慣・思想面における問題の共通性ではなくて、行政機関と武力によって支えられるところの契約の強制力である。それゆえに、一つの民族に属する諸社会を単一の国家に統合することは、社会の進歩を促進する点では何の保証にもならない、そして、所与の民族の発展が顕著であればあるほど、——したがって、その民族の構成する国家の領土が大きくなればなるほど、——住民に対する国家的契約の圧力が強まり、それが社会的進歩の大きな障害になることはますます確実である。

しかし、民族の国家的統合が、社会の進歩を促進するよりは、むしろ阻害する場合があることを想定する理由がさらにある。私は、これまでの書簡の中で、何らかの原理の理想化に基いて、所与の社会の内部にこの理想化の恩恵に浴する少数者が形成されてくること、および、社会を強固にするために、この少数者が、これらの恩恵を多数者におし広める義務を負わされていることについて、語っておいた。これは、道徳的義務でもあったし、少数者自身の利益の要求を含んでもいたが、このような課題の実現は、歴史によって明らかのように、非常に狭い範囲に限られていた。それどころか、所与の文明の福祉を享受した少数者は、大部分が——計算づくのエゴイズムから——文明の重荷だけを多数者の分け前として残し、その利益を自分たちで独占しようと欲していた。通常、このような志向の最良の手段であったし、かつ手段となり得たのは、国家機関であった。文明の独占者たる少数者は、国家機関の助けをかりて、文明の利益を確保し、社会における既成秩序の変革、すなわち、より正しい人間関係を社会にもたすことを目的とする変革のための一切の企図を押し潰そうと努めてきた。それにもかかわらず、社会的苦悩の所産であるこのような企図は、諸個人によって実行された。存在意義を喪失した法律と統治形態に敵対する人びとが現われた。漸進的改革主義者たちの宣伝が行われた。現存の機構に反対する多少とも精力的な諸党派が形成された。それは、すでにわれわれが考察したように、社会にとって進歩的発達の唯一の道であった。したがって、社会の進歩は、現存の社会機構に批判的態度をとったり、自分の理念を広めたり、同志を周囲に集めたり、社会的課題のより真実な理解とより正しい実現のために闘うところの党派を作ったりする企図が、一人一人の個人にとって可能であることを、必要とした。そうでない時には、合法的改革の要求は、革命の準備に転じた。反対派は、叛徒となり、有利な状況の下では——革命家になった。もちろん、社会の進歩のためのこの

ような諸個人の闘争は、その社会の言語による——口頭か文書の——宣伝または煽動を、重要な武器とし、この言語によって、彼らの批判がその社会機構に向けられ、改革的または革命的目的のための働きかけが行われなければならなかった。しかし、文明の利益の独占者たる少数者の擁護を念頭に置く国家機関の攻撃が、特にこれらの個人に加えられてきたということも、やはり避けがたいことであった。それゆえに、所与の言語を語るすべての個人が、単一の国土内に住んでいた場合は、領土内の住民に対する諸個人の働きかけは非常に困難であった。批判的思考は弱まった。改革的ないしは革命的諸党派の形成は、大きな障害にぶつかった。社会をより進歩的な道へ導き出そうと努めた諸個人は、大部分が闘争の中でたおれ、社会の進歩は停滞した。反対に、若干の独立諸国家がまったく同一の言語を用いていた場合は、政治勢力の面ばかりでなく、一般に思考の領域でも、それらの間ですぐさま競走が始まった。批判的思考がある国家で迫害されたり、迫害されるおそれがあった場合は、これらの批判的個人は、他の国家に避難所を見出した。彼らの思考は自由に伸び育った。二つの国家に共通な文化的諸条件があるので、どんな障害があろうとも、一つの国家から他の国家へ容易に言葉と思想を伝えることができた。進歩の党派は強力になり、社会における進歩的改革の可能性がますます現実になった。

歴史は、この命題を裏づける多くの実例を示している。独立諸中心地別のギリシヤ世界の分立は、自由な共和国の時代ばかりでなく、専制的なディアドコイたちの時代にも、ギリシヤ思想の発達を助長した。ローマ国家の統一は、批判的思考の発達を押し潰した。ヨーロッパの封建世界は、その文明が粗野で、文化がきわめて貧困であったにもかかわらず、諷刺的・論争的文学を発生させた、しかもこの文学の大胆さは、異端審問の恐怖時代や個人の生命と自由をまったく無視した専断きわまる支配者たちの時代には、とうてい想像もできないほどのものであった。旧フランスの批判が、ブルボン王朝時代に可能になり、勢力を持つようになったのは、ルイ 14 世も、ルイ 15 世も、フランス語を語る国外の住民間におけるフランス文学の存在を妨げ得なかったからである。もし、ドイツの諸大学が、絶対主義的な思想傾向を有していたにもかかわらず、古代のディアドコイたちのように思想の領域で互に競い合ったところの独立諸国家内に散在していなかったとすれば、ドイツの哲学思想は、あのような輝かしい発達とその研究対象に対するあのような独立的態度を獲得できなかったであろう。古代ルーシについてさえも、南ルーシに対する北ルーシの優越、それに続くルーシに対するモスクワの優越が、独立の共和国の没落とともに、思考活動の弱体化と平行して進行していったことを指摘することができる。モスクワ・ルーシにおいては、批判は、ステンカ・ラージンと正教分離の形で出現しただけである。

これらすべてのことから、ある言語を語る民族全体を単一国家の法律の下に統合するよりも、諸民族を独立諸国家に細分する方が、所与の民族に包含される諸社会の進歩を遙かによく促進するという結論が出てくる。進歩的諸党派は、このことを念頭に置いて、政治的祖国の外部に位置するが共通の言語を有する諸領土を、単一の国家に統合することよりも、それらを独立させることに一そう尽力しなければならない。もちろん、

第二帝政時代の分別あるフランスの進歩主義者たちは、ベルギーとジュネーヴがナポレオン党の主権下に入るよりも、独立していた方が彼らにとって有利であることを、理解したに違いない。このような独立的諸領土がないところでは、進歩的党派は、全力をあげてそれらの形成に意を用いなければならない、なぜなら、それらは、諸個人の自由な批判・自主的な思想の普及・進歩的党派の強化に資するところが多大であるから。一般的に言い得ることだが、領土の分割という点では、民族的原理の肯定的な面は進歩的なものと見なしてはならないし、また所与の言語を語るすべての人を統合しようとする意味で、自然的国境の獲得に努める民族は、もしこの志向を進歩と見なすならば、それは大きな間違いである。

民族的原理の否定的な面は、より大きな意義を持っている。言語と文化的習慣の相違は、多くの場合、経済的・政治的・知的諸要求にかなりの差を生ぜしめる原因になる。したがって、このような諸条件の下では、国家的統一は非常に困難になる。大ていは、種々の民族を単一の国家に統合する時、それらを結びつける契約は、ある民族には有利であるが、他の民族には束縛的であり、それらの間に不和反目を生ぜしめる。衝突の結果は、あるいは、きわめて強い民族がきわめて弱い民族を蚕食して、その特質を徐々に押し潰してゆくか、あるいは、国家的統一が個々の諸国家からなる連邦体にますます変貌してゆくかのいずれかである。その際、弱い民族が全力をあげてその存在を守り、別個の国家を作ろうと努めるのは、まったく当然である、なぜなら、そうしなければ滅亡の危険にさらされるから。自己の生存のための闘争は、まったく正当な闘争であり、国家的独立の志向もこの場合まったく正当である。しかし、私が前の書簡で述べたように、国家的全一体の統一を維持しようとする国家権力の志向も、強大な諸国家間の闘争を考慮に入れるならば、これまた同様に当然である。この場合、二つの当然な志向が衝突することになるが、正義と進歩に関する問題は、どちらの志向とも少しも密接な関係を持っていない。民族の原理に立脚する分離主義的志向と国家的統一を維持しようとする志向は、社会的諸党派のその他すべての旗印と同じように、ある場合には進歩的現象であり得るし、他の場合には反動的現象であり得る。問題の解決は、状況全体によって決定されるのであって、それらの中から別々に取り出されたある一つの状況によって決定されるのではない。

それぞれの民族は、その歴史の所与の時代に、真理と正義に対する志向をどれだけその文明の諸形態の中に実現させたかに応じて、その分だけ思想家の共感を得る権利を持っている。国家の統一ないしは分離の問題で諸民族が衝突する場合、どの民族に進歩のための勝利が願わしいかといえ、それは、思想面の諸問題により批判的な態度をとり、より正しいものの真の実現に向かって一そう潑刺と努力するところの民族である。自分たちの要求を通すための多数の暴力・科学的批判に無縁な慣習・とうに過ぎ去った歴史上の諸時代・かつて掠奪者の権利を契約の形で擁護した国際条約などに依拠する民族は、——諸民族の歴史的衝突の過程において、自分で自分の判決文に署名しているようなものである。歴史がその他の自然の過程と異っているのは、歴史の中では諸現象が繰返されることがなく、過去は歴史にとって単なる思い出に過ぎないという点にある。も

し、過去の名において現在を変更できるとすれば、このような変更には際限がないであろう。なぜなら、過去半世紀の彼方に過去の1世紀が立ち現われ、そのまた向うに過去の2世紀が立ち現われるであろう、しかもこれが無限であり、そのおのおのがそれぞれの伝説的な衝突と願望・それぞれの英雄と悪人を擁しているから、過去は過ぎ去ったのであって、現在の審判者ではあり得ない。現在の審判者は、真理と正義の諸理想の中に、それらが現在の思想家達の脳裡に存在しているような形でひそんでいるところのまだ実現されない未来である。

思想家の前には、最高の真理・善・正義に対するいかなる志向も侵し得ない自然の不変的法則が、あらゆるものの根底に横たわっている。思想家の前には、現在における物質的・知的・道徳的諸勢力の事実上の分布、すなわち、過去の歴史によって条件づけられ、かつ、既成事実であるがゆえに新しい諸理想の見地から否認してしまうわけにゆかないところの勢力分布が存在している。思想家の前には、歴史そのものによって彼の周囲と彼の内部にはぐくまれた真理と正義の諸理想がある。これらの理想の中に、未来の原動力——それらの作用は、自然の不変的法則と歴史的事実の所与の基盤によって制約されている——が蔵されている。これらの理想の名において、正にこれらの名においてのみ、現在の勢力分布を正当なものと言明することができる。これ以外のどのような論拠も、進行途上にある歴史の審判の前では、承認され得ない。不利な情勢の下で生存競争に耐え抜こうと欲する民族は、二度とかえらぬ過去に依拠せず、未来のより良き諸要求の代表者であることを示さなければならない。他の諸民族をリードしようとする民族は、存在意義のなくなった諸原理で国民の生活を束縛するところのあらゆるものを棄て去り、思想面ではできるだけ厳しく批判を行い、生活面ではできるだけ完全に正義を実現しなければならない。このような方法以外には、諸民族の国家的発展のための強固な基盤は存在しない。もし、諸民族が過去の幻影をその旗印に掲げるならば、たとえ諸個人が英雄的な精神を発揮しようとも、またたとえ強者との絶望的な闘争で弱者の示す勇敢さが、これを観る者の心に常に同情の念を喚起しようとも、これらの民族の生存は、常に脆く儂ないものであろう。もし、民族がミイラのように生命のない諸原理で自からを束縛するならば、たとえ領土がいかに広大であろうとも、天然資源がいかに強大であろうとも、諸民族の中にあつて強固な支配を維持してゆけないであろう、民族の思想は実を結ぶことなく、その最良の志向も無気力のために打ち碎かれるであろう、そしてついには、自分より遙かに弱い諸民族に知的・道徳的に屈服しなければならなくなるであろう。諸民族の力はただ真理と正義の中にだけ存在している。

それゆえに、国家の統一ないしは分離のための闘争においても、これら二つの要素の中でどちらが正当性を持っているかといえ、それは、過去の幻影を完全に否認し、思想面に批判を、生活面に正義をもたらすところの民族の旗印に掲げられるものの方である。国家は抽象的な概念である、したがって、もしこの概念が現実的な内容を持っていないければ、国家は、無意味にしかも不道徳に血まみれの犠牲を供すべき偶像になる。この概念に現実的な内容を付与するのは、発達した個人だけである。個人は、国家という概念の中に真理と正義の要求をもたらして、偏見にとらわれたこの偶像を最高の社会的

理想の不可分の要素に変える、しかもこの理想のためならば、いかなる犠牲も合理的で正当である。民族の分離独立化は、国家が遠くからではあるが理想的な諸要求に接近しつつあるところでは、第二義的な問題として脇の方に押しやられている。これを証明するものに北アメリカ合衆国の例がある、そこでは、時には第一の世代もあるが、すでに第二の世代に入った全世界の移住者たちが、まったくのアメリカ人になりつつある。南部諸州の分離主義は、史上最良の憲法と奴隷制擁護に対抗させねばならなかった人種同権の確立との前では、その主張を表明する権利を持っていなかった。一方ヨーロッパと南アメリカにおける多くの分離主義的志向は、きわめてしばしばその正当性を主張する根拠を持っていた、なぜなら、分離主義者たちが武装して統一反対のために立上がった諸国家は、思想面で自由な批判を少しも認容しようとせず、社会的諸形態の中に少しも正義を実現しようとしなかったから。ここでは、分離主義者たちの希求した国家的理想が進歩的であればあるほど、彼らの正当性はますます増大した。国家の統一の擁護者と分離主義者が、それぞれの見解や過去の幻影のために論争し、自分たちの要求の中に現代の諸理想をほとんど織り込まないところでは、闘争は、進歩のために行われているのでもなければ、人間的志向のために行われているのでもない。そこでは、思想家は、力と血潮の喪失を傷み悲しむだけで、真実から目をそらしている。そこでは、歴史のメロドラマの愛好者だけが、古代ローマの剣闘士たちの流血の闘争や、さまざまな題銘の楯をかざした過去の騎士たちの熱狂的な自己犠牲を、貪るように視まもっている。ホーマーの後裔たちは、アキレウスやヘクトルのような人びとを永久に賞め讃えるであろう、しかし、美しきヘレネのための闘争は、アリストテレスにとっていかなる意義を持つているであろうか？

民族が真理と正義を切に熱望し、過去と絶縁して進歩のために尽そうと決意した時、この民族は、その希求を抑圧する統一国家からの分離独立を主張する権利を持っている。あるいはまた、この民族が国家の支配権を握ったならば、それは、より低い文明段階にある隣接諸民族を国内に擁しているのだから、その政治機構の強固さと物質的力を擁護するために、もっとも強力な手段をとる権利を持っている。進歩的な民族は、より進歩的でない国家から分離独立する権利を持っている。進歩的な民族は、国家的契約によって歴史的にこの民族と合体しているところのより進歩的でない諸民族の分離主義的志向を、抑圧する権利を持っている。しかし、この最後の抽象的権利は、決して実地に適用すべきではない、なぜなら、進歩的な民族は、領土の一部住民全体の分離主義と闘うべきではなくて、この一部住民中のある階級だけと闘うべきだから。例えば、アメリカの北部諸州は、南部諸州の住民全部に対して闘ったのではなくて、多数者に対する支配権を維持しようとした少数者に対して闘ったのである。このような状況の下における闘争は、国家の統一を擁護する民族が、真に被抑圧大衆の地位改善を念頭に置き、分離を望む民族よりも真に高い社会的諸原理を多数者にもたらし得る場合にだけ、正当である。アメリカでは、まったくこのとおりであった。

ここで、前にすでに考察した問題——もし、国家的原理がその進歩的発達の過程において最低の線に到達するに違いないとすれば、進歩的党派は、国際間の政治問題から完

全に遠ざかり、社会活動の他の諸方面に専心すべきではないか？ という問題——が、新しい形で現われてくる。先にも述べたように、あらゆる活動の可能性の基礎をなすものは、歴史的諸条件である、したがって、問題の解決もそれらの中に求めなければならない。もっとも進歩的な諸党派がまだ人類の一小部分にすぎず、もっとも進歩的な諸民族が隣接諸民族の掠奪的暴力の危険にさらされているから、進歩的な党派と民族は、常に闘争態勢を整えておかねばならず、進歩により多くの物質的力を付与するためにも、この進歩を擁護しなければならない。それゆえに、進歩的党派は、批判によってその諸理念を擁護し、信念によってそれらを具体化するだけでなく、他の諸国家の指導的な敵対的党派と闘うために現存の国家機構を活用する暫定的義務を持つている。

もちろん、これは——国際関係を支配している掠奪主義と政治的戦争の危険とによって余儀なくされたまったく暫定的な義務である。すでに考察したように、政治的進歩は、社会における国家的要素を最低の線まで引き下げること、すなわち、政治的契約の一切の強制力をそれに同意しない諸個人におよぼないようにすることにある。この進歩は、分離主義的志向を双葉の中に摘みとるから、諸民族間の闘争の原因、国家の統一に名をかりたある諸民族に対する他の諸民族の圧迫の原因も、同時に消滅する。それと同時に、国家の自然的境界に関する問題も、その意味がなくなる。暫定的な経済的・文化的ないしは科学的利害関係が、諸社会を接近させ、かつ、一定の目的を有する連邦体内部の暫定的領土を決定するに相違ない。この目的が、連邦体内部の境界が常にあくまでも自然的であるように、それらを変更し、拡大し、縮小する。高次の統一に関していえば、それは、われわれが前の書簡で考察したように、どんな地図の上にも自然的境界線を引くことを許さない全人類的科学によって裏打ちされなければならない。

可能な希求すべき未来がこのようなものであることに、読者が私に同意するかしないかはさておき、もちろん、読者は、事実がそうでなかったことを非常によく知っている。国家の内部では強制の原理が、諸国家の間では掠奪的關係が、支配的であった。このような事態が、知力と意志力において一般大衆より抜きん出た少数者にとって、何よりも重苦しかったのはまったく当然である。それゆえに、無論、過去の進歩的諸個人の知力と意志力は、もっとも頻繁かつ顕著に政治的諸問題に集中された。強制的権力が、強制的の因をなす諸問題自体に利害関係のある人びとに握られた場合は、権力の悪用が予想されるのは理の当然であった。このような悪用は、今度は逆に、まず間違いなく反抗・諸党派の形成・実力闘争を惹き起した。それゆえに、歴史のもっとも顕著な側面は、国家闘争の歴史であった。実際に国家的契約を定める権利は誰のものであろうか？ 個々の個人と社会は、この契約の作成にどれだけ影響を与え、その欠陥にどれだけ抵抗し、その変更をどれだけ要求できるのか？ 国家的契約の審議にあずからない者が、それにしたがわなければならないのか？ このような諸問題から生ずる論議は、次のごとき闘争——王冠・宰相の位・責任大臣の職をめぐる諸個人の闘争、新聞雑誌・議会・広場・戦場における政治的諸党派の闘争、独立ないしは征服のための諸民族の闘争、指導権の獲得をめぐる諸国家の闘争、最良の人びとの政治的進歩のための闘争——のもっとも直接的なかくれた本質のすべてをなしている。

しかし、それは——歴史のもっとも目につきやすい面、ドラマチックな外観、華麗な衣裳である。思索する歴史家の関心は、この外観にかくされたより本質的な諸原理の探求に向けられている。もっともドラマチックな時代は、取るに足らぬ諸問題に力が浪費されたことだけを、往々にして証明している。もっとも天分豊かな諸個人も、時には自分の知力と精力を非常につまらない目的のために費した。事業の成功と輝かしさは、個人よりも一そう高い人間的意義を証明していない。歴史における諸事実の展開は、人類の進歩のために、このような諸事実の意義に合致しなければならない。進歩のために拡大することがもっとも重要な要素は、ほとんど目につかないほどわずかしか現われなくとも、意義を持ち得る。社会の進歩につれて意義を失わねばならない要素は、ほとんど歴史家の注意をひく権利がない。

社会の進歩的発達にともなって、社会における国家的要素は最低の線に到達する。したがって、政治史は、人類の歴史の中に何らかの意義を見出さそうと欲する人にとっては、もっとも興味のないものである。諸国家の外的衝突や内的動乱が起こるたびごとに歴史家は、——どのような国家以外の要素が、この衝突や動乱に与って力があつたか？を、まず第一に自問しなければならない。社会に対する国家的要素の力を減ずるために、どんなことをしたか？ 国家以外の要素の進歩に、どれだけ協力ないしは抵抗したか？ について、有力な活動家の一人一人に説明を要求しなければならない。諸国家の発展と崩壊、大規模な征服事業、流血の大会戦、老獪な外交のかけひき、行政管理は、この見地からすれば、以前の歴史家たちが考えていたものとはまったく違った意味を帯びてくる。これらの現象それ自体は、少しも重要性を持っていない。それは、——歴史の気象学的過程である。強烈な台風、地震、疫病、特に美しい北極光、双生児や畸形児の異常分娩は、上述の諸過程とまったく同様の意義を持つ諸事実である。どちらの場合にも、事実が学者にとって重要なのは、事実そのものではなくて、その結果ないしは原因によるのである。事実が人びとの注意を惹き、かつ綿密に研究されるのは、主要な物理的・心理的諸現象の新しい一般法則を探求したり、あるいは、将来における諸事実の有益な配分を可能にし、有害なそれを除去したりするためである。いかなる欲求と思考が、あれこれの政治的現象をひき起したか？ この現象は、新しい諸欲求の発生と古いそれらの変革をどれだけ促進したか？ それは、以前の文化をどれだけぐらつかせたか、あるいは、どれだけ強固にしたか？ それは思考の新たな発達にどれだけ刺戟を与えたか？ 正にこのような問題こそ、政治的現象の一つ一つに関する歴史の本質的諸問題である。これらの問題の背後に、次のごとき別な問題が出てくる、——この現象の中に、個人の心理的作用、思考の弾力性、個人的発達と正義に対する布求を、どれだけ探求することができるか？ この現象の中に、個人の心理的生活に対する社会的文化の影響を、どれだけ探求することができるか？ 第一の諸問題の解決は、政治的諸事件の真に歴史的な意義を示し、第二の諸問題の解決は、個人心理学と社会学の資料として、これらの諸事件の重要性を明らかにする。どちらの場合にも、政治史に意義を与えるのは、高度の自然科学諸部門の課題ないしは文明史の課題である。

書簡其の一五

批判と信仰

私は、これまでの一連の書簡の中で、常に社会的諸党派の旗印に掲げられるもっとも重要なスローガンを考察した。そして、前に述べた一般的命題——これらのスローガンの中でそれ自体が進歩の表現であるものは一つとして存在しない、それは、状況次第で反動的にもなれば進歩的にもなるし、現実的な意義を獲得することもあれば、空疎な言葉となることもある、という命題——は、これらのスローガン全部に間違いなく当てはまった。虚偽の理想化は、絶えずこのようなスローガン作りに努力し、それらのスローガンによって、それとはおよそ縁のないまったく没理想的な欲望を掩いかくし、真の人間の理想化を可能にするところの自然的欲求をなおざりにしている。かくして歴史の原動力である偉大な諸理念は、一定の状況の下における一定の諸個人の旗印として具体的な意味を持つ場合だけ、真に偉大な諸理念となる。それらの歴史的な具体的内容の絶えざる批判だけが、響き高い言葉の掲げられた旗印の下に立つ以上は、個人は幻想を追わず、打算的で利己的な陰謀家共の手先にならないという確信を、彼に持たせることができる。

しかし、読者は始終この書簡で批判という言葉にぶつかるので、当然次のような質問を私に向ける権利がある、——もし、個人が、批判を、しかも批判だけを常に念頭に置くとするれば、彼自身がその行動力を自分から奪い取ることにならないか？ と。批判するためには、疑惑・ためらい・賛否の論拠を確かめるための十分な時間がなければならない。しかし、生活は時間的余裕を常に与えてくれるであろうか？ 誰かがわれわれの眼の前で破滅しかけている時に、彼を救うことがどれだけ有益であるかとか、どれだけ有害であるかとかを、考えている余裕があるだろうか？ 何かのふとした原因から、政治的動乱が社会に混乱をまき起す時、指導者を持たぬ大衆が、間違った方向に突進し、味方を敵と、敵を味方と取違え、あるいは躊躇逡巡して自分たちの力と熱意の一切の効果を無にすることもある、このような時に、事態をよくわきまえた真の市民は、果してためらったり、チャンスを逃したりする権利があるだろうか？ 書斎では素晴らしいことも、広場では役に立たないことがある。学者にとって欠くべからざることも、社会活動家にとっては有害なことがある。

この論議は、まことにもっともである。しかし、他でもないが、批判は、人間の生涯の責務、すなわち、発達した人間という名に値する権利を得るために、人間が獲得し身につけなければならぬ習慣なのである。破滅に瀕している人間に出会う前に、そのような諸条件の下で破滅しかかっている人間を救うべきであろうか？ について、考えもしなければ、確たる信念も持たなかった者は、劣等な人間である。歴史の動向にあまりにも無知で、大衆運動の勃発に不意を打たれ、しかもその時になって、何をいうべきか？ 何をなすべきか？ どこへ行くべきか？ どこに真実があるか？ 現下の旗印はどのよ

うなものか？　と思ひまどうような市民は、社会活動家と称する資格がない。人間を決然たる行動へ駆りたてる時期はめったにない、したがって、人間の生涯はすべてその時のための準備である。個人的ないしは社会的な四囲の情勢が、いかめしい言葉で——行け、そして己の責任をはたせ——と呼びかける時がいつ来るかは、誰も予言できない。それゆえに、各人は絶えず準備をしていなければならない。一人の人間が、人格を陶冶しながら、あらゆる生活上の諸問題に対処している。彼は、錯雑した歴史の波動を熟視しながら、彼が必要とされるであろう時の闘争のために鍛錬を積む。批判が彼に必要なものは、責任の到来の時ではなくて、この責任のためなのである。

来るべき時が来た。同志の声は、広場へと彼を呼び招く。社会は、長い惰眠から憤然として目覚めた。敵意に燃える諸党派の旗印が、ここかしこに翻えった。批判は、その責任をなし終えた。彼は、自分の体力・知力・精神力の全資本を一括して、それを事業の中に投ずる。彼の批判が、より厳しく、注意深く、冷静で、広汎であればあるほど、彼の信仰は今やますます強力かつ熾烈である。

実に、信仰は山をも動かす、——しかも、それができるのは信仰だけである。行動する時に、人間は確乎たる信仰に満ち溢れていなければならない、——さもなければ、自己の全力を傾倒しなければならぬ大事な瞬間に、彼は無力を暴露するであろう。闘う諸党派にとって危険なのは、敵ではない。それらにとって何よりも危険なのは、同じ陣営に属し、同じ党派の旗印の下に立ち、往々そのスローガンをもっとも忠実な指導者たちよりも声高らかに叫ぶところの信仰なき者・無関心主義者たちである。それらにとって危険なのは、まだ批判する余裕のある時に、これらのスローガンの批判を拒否し、時節が到来して行動しなければならぬ大事な時に、批判を始め、躊躇逡巡して、戦闘の開始とともにすぐさま戦線を放棄するような輩である。

通常、もっとも権威のある言葉は、きわめてさまざまな解釈を生む可能性があった、しかし、信仰という言葉は、正に誤解から、最大の論議をかもし出した言葉の一つといえよう、なぜなら、論議する人々が、同じこの言葉を使いながら、まったく違うことがらについて語っていたから。

さまざまな宗教上の礼拝・伝説・教義ないしは哲学的世界観についての観念を、信仰という言葉に結びつける必要は少しもない。人びとは、自分の信仰故に宗教的伝説や教義を擁護・伝道し、さまざまな礼拝の儀式を行ってきた、しかし、それは単に信仰のお添え物の一つにすぎなかった。まったく同じように、信仰という用語を超自然的なものの観念と結びつける必要もさらさらない。絶えず変転する日々の生活・自然および歴史は、信仰を促がす素材をきわめて豊富に提供している、観察界に類似したものがない一切に対して懐疑的態度でのぞむ習慣を身につけた人でさえ、大いに信仰に傾倒することがある。

信仰とは、自覚はあるが批判のない精神的ないしは外面的な活動である。私がもはや検討しない観念、しかし、その他の観念や概念の検討に当ってそれらの基本になるところの観念が、完全に私の心を捉え尽した時は、私はこの観念を信じている。私が他人の言葉によって行動し、いかにしてこの言葉を実現すべきかを思案して、それを実現すべ

歴史書簡

きかどうかについてもはや思案しない時は、私はこの人を信じている。私が目的を立て、その達成方法だけを批判して、目的そのものを批判しない時は、私は私の目的を信じている。

したがって、信仰と批判は対立するといつてよい、しかし、それは限られた意味の枠内に止まる。人間は、彼が信じていることをもはや批判しない。しかし、それは、今日の信仰の対象が昨日批判に付されたという場合を、なんら例外としない。それどころか、もっとも堅固な信仰・ただ一つ合理的でただ一つ強固な信仰は、このようなものである。ともかくも行動すべき動機が存在する時は、行動が信仰の検証となる、しかし、もし私の信仰が批判の結果でないならば、すなわち、反対意見に照らしてみる機会がなかったとすれば、この信仰に反して私を行動させる動機が、行為の際にこの信仰をぐらつかせないという保証を、一たい誰が私にしてくれるであろうか？

批判だけが、強固な信念をはぐくむ。強固な信念をつちかった者だけが、この信念の中に潑刺たる行動のための豊かな信仰の力を見出す。この意味では、信仰と批判の対立は、本質的なものではなくて、時間的なもの、すなわち、思考の発展の相異なる二つのモメントである。批判は活動を準備し、信仰は行動を起こさせる。

芸術家の想像の中で形象が統一された。芸術家は、この形象に詳細にわたって厳密な科学的・美学的批判を加えた。この批判は、仕上げの際の芸術的構成をますますはっきりさせた。ここではじめて、渾然たる生き生きした形象が、芸術家の脳裡に生まれ出た。彼は筆または鑿を手にして、自分の理想を具象化する、なぜなら、彼はその絶対的重大性とその美を信じているから。さもなければ、彼の活動は、決断と靈感に欠けたものとなる。絵画ないしは彫刻が具象化された時、それに対して新しい批判の作用が始まる。自分の作品に満足しない芸術家は、それをぶちこわしてしまうかもしれない。しかし、批判は、芸術の創造過程には参与しない、これに参与するのは、形象の絶対的重大性に対する信仰である。

学者が、綿密に諸事実を算定し、考量した。それらは、はからずも、彼の思考の中で、多少とも仮説的な一つの法則に系統化された。既知の他の諸事実が、この発見された科学的類似を裏づけ、補足し、敷衍するものとして、自然に彼の脳裡に浮かんでくる。彼は、繰返し繰返し点検し直す。批判は、その責任をなし終えた。彼は、把握した真理を確信する。そこで、彼は、科学のこの新しい達成を学生たちに公開するために講壇に立つ。彼は、自分の試験を要約し、反論の余地を残さず、類似をはっきり提示し、確実性の高い新たな発見を指し示す。この時には、彼はもはや批判しないし、動揺しない。なぜなら、彼は自分の批判の力と完全さを信じ、新しい真理を説いているから。彼は信ずるまではそれを公開しない、なぜなら、彼は批判を何よりも重んじているから。

ある人が他の人と親しくなり、彼の長所と欠点を知る。彼は、その友人がさまざまな事からどれだけ夢中になり、どれだけ理性的に対処し得るかを理解する。現に今、この友人の言葉に基いて、ともかくも行動しなければならない。友人に対するかねてからの批判の作用が、これに結論を与える。彼は、自分の友人を信じているか、さもなければ信じていない。彼は自分の信仰に基いて、決心しかつ行動する。

生活と社会の歴史は、同様の問題を人間に提出する。人間は、真理と正義の理想を作り出し、これらの理想の影響によって発達し、蓄積された生活経験と思考の批判的作用の影響によって、これらの理想を発達させた。人間は、彼を取囲む社会の文化・彼の内部で行われる思考の作用・同時代の諸党派のさまざまなスローガンの具体的意義を研究した。彼は、理想的に完全ではないが、歴史的にこちらがすぐれていて、あちらが劣っていることを確かめた。彼は、こちらにも完全な真理と正義がなく、あちらにも絶対的な悪と虚偽がないことを知っている。しかし、彼は、目下の歴史的諸条件の下における闘争が、これらの党派との同盟なしには成功の望みがなく、それだけが互いに勝利を競い得ることを、理解した。この中の一つが、他の諸党派よりすぐれており、目下の進歩はその勝利によってのみ可能である。この党派の中に、最大の真理と最大の正義が存在している。もちろん、思索する誠実な人間は、この党派の欠陥を理解して、自分の影響力によってこれらの欠陥を弱めかつ除去しようと努力し、この同時代最良の党派の志向に含まれる真理と正義の割合を高めようと努めなければならない。もし、この党派が強大であれば、彼は意見の相違を表明し、その指導者たちに反対し、自分の旗印を別個に掲げることできる。しかし、闘争の歴史的瞬間が到来した。進歩ないしは反動のための闘争に、すべての社会的勢力が参加を要請される。傍観することは、最良の諸党派の弱体化を意味する。彼は、これらの党派が最良のものであると信じ、この信仰のためにこれらの党派に馳せ加わる。批判の時期・分離の時期は、過ぎ去った。すべての最良の人びとは、実現可能な進歩のための闘争に結集しなければならない。すべての人びとが、最良の未来を約束する党派に加わらなければならない。個人が、種々の党派の長所と欠陥をより厳しく批判的に研究し、自分の批判に基いて、こちらがすぐれていることをより正確に確信すればするほど、彼はますます絶対的な信仰に燃え、自分の活動をその党派のために捧げ、その敵と闘い、その勝利を喜び、その敗北を傷み悲しむ。思考の批判は弱まったのではない。ただその時期が遠のいただけで、批判にとって好ましい時が来れば、すぐにもまたその時期はやって来る。

個人を行動に駆りたてる信仰の作用は、譲歩してならない時、新しい旗印を翻えして新しい言葉を人類に投げかけなければならない時は、ますます熾烈かつ徹底的に展開される。社会の苦悩と批判的思考は、個人の内部に信念を発達させた。彼は孤独であるか、それともほとんど共鳴者を持っていない。恐らくは、つい先頃、歴史の波が、彼が真理と正義と認めたもののために闘ったところの人びとを、きれいに一掃してしまったのかもしれない。古くからの文化的習慣と慣例が、四方から圧迫を加えてくる。憎むべき諸党派の思想は、有利な地位にある強力で練達の代表者たちを擁している。それなのに、個人が意気沮喪しないなどということが、一たいどうして生ずるのか？ 自分の非力を知っておりながら、なぜ彼は無鉄砲な企図を捨てないのだろうか？ 多くの障害・大半の人びとの無関心・ある人びとの臆病・他の人びとの卑劣・敵の嘲笑にもかかわらず、何が彼を闘争に駆りたてるのか？ それは、信仰のなせるわざである。批判は、彼にとって明白な真理と正義が、他の人びとにも明白になるであろうという確信を、彼に抱かせた。彼は、彼を行動に駆りたてる思想が、周囲の無関心と敵意に打克つであろうことを

信じている。度かさなる失敗も彼を困憊させない、なぜなら、彼は明日を信じているから。彼は、古くからの慣習に自分の個人的思考を対立させる、なぜなら、歴史の教えるところによれば、非常に根強い社会的慣習も、少数の人びとの信ずる真理の前に崩れ去るから。彼は、国家が全力を尽して擁護する法律に自分の個人的信念を対立させる、なぜなら、法典も国家権力も、彼が真理と正義として信じているものを、虚偽と不正に変えることができないから。彼は、敵の攻撃または四囲の情勢の重圧の下に死んでゆく時、もし何のために死んでゆくのかを信じていさえするならば、彼と同じように闘って死ぬことを、同志たちへの遺言にする。

そのためには、超自然的要素はまったく必要がない。多彩な宗教伝説、難解な教義、荘厳な礼拝の儀式は、信ずるもののために生死を賭するこのような決意に、それ以上の勇気や不屈の精神を少しも付与しない。確かに、人類の過去の歴史は、宗教や形而上学の幻影のために闘って死んだ人々に関する伝説を、何ら幻想的なものを持たずに信念のために闘って死んだ人びとに関する伝説よりも、はるかに多く残している。幻影の信仰は、進歩的理念の信仰と同じくらい可能である。思考力に乏しく、生活の面でほとんど批判を行わない人びとは、宗教的信仰の作用によって、はじめて英雄的精神を獲得することができる。彼らにとって唯一の特徴であるこの作用は、もちろん、宗教的信仰の英雄として、彼らの名を歴史に残すであろう。思索し批判する人びとは、その知的活動と市民活動を、きわめて多方面にわたって伝記作家に提供しているので、伝記作家は、彼らの信仰のヒロイズム——批判によってつちかわれ、多くの困難な絶えざる闘争を行わせ、多くの幸福を、時には生命さえも投げうたせたところの信仰のヒロイズム——を、時々うかつにも見落している。ジョルダノ・ブルーノの焚刑は、聖ラウレンティウスやヤン・フスの焚刑に劣らなかった。スピノーザ、フォイエルバッハ、シュトラウスのような人びとは、古今の宗教的幻視者たちに劣らないくらい、貧困と排斥を耐え忍ぶことができた。王政主義者たちが、国民公会の断頭台で毅然として死んでいったように、共和主義者たちも、同じくらい毅然として、王政主義者たちの弾丸と刀剣の下に死んでいった。われわれが真理であり正義であると認めているもののために、時間も、生活の諸便宜も、恩愛の絆も、生命さえも、ためらわずに犠牲にする覚悟を生み出すところの信仰は、それ以外には何の取りえもない人びとをも、奮い立たせた。この信仰は、押し止め得なかった歴史の流れを停止させるために、血潮の河を流して全力を傾倒した反動的活動家たちをも、奮い立たせた。思想の殉教者、進歩の英雄たちもこの信仰に満ち満ちている。

それゆえに、信仰は、進歩と反動のいずれをも問わぬ原動力である。信仰がなければ進歩は不可能である。なぜなら、いかなる精力的な献身的活動も、それなくしては不可能だから。しかし、信仰は、進歩的社會運動の十分な条件ではない。われわれが英雄的精神と自己犠牲を目にするところでは、われわれはまだ進歩的志向の存在について結論する権利を持っていない。進歩をもたらし得るのは、厳しい批判に立脚する信仰だけである。

思索する人々は、有益なもの、真実なもの、正しいものについての観念を培ってきた。信仰する人びとは、彼らにとって有益かつなすべきこととして信じたもののために闘

ってきた。彼らの中の最良の人びとは、彼らが真実であり正義であると考えたところのもののために闘ってきた。こうした人びとの信仰が熱烈であればあるほど、闘争はますます苛烈であった。思考が薄弱で、批判が不徹底であればあるほど、有益なものとなすべきこと・真実と正義の観念はますます多様化し、諸党派の分裂はますます激しく、人類の力は無益な闘争のためにますます失われた。幻想の多様性には際限がない、それらは現実から遊離すればするほど、ますます多様化するおそれがある。私が第四の書簡で語った進歩のおそるべき代償は、主として徹底的な批判に欠けた幻想的観念によって増大したのである。人々が、自他の利益は相容れがたいものであると堅く信ずれば信ずるほど、搾取者たちの公然たる闘争、互いに悪意と不信を抱き合う人々の暗闘の中で、ますます莫大な力が浪費された。人びとが、為すべき義務は魔術的な宗教上の儀式・その幻想的な教義と伝説・カストや身分を区別する儀礼に存していると、堅く信ずれば信ずるほど、彼らは真の発達と悦楽のためにさして時間を割かず、ただでさえ短い人生をますます短くしてしまった。彼らの真理の中に虚偽が多ければ多いほど、彼らの正義が不道徳であればあるほど、思考活動はますます乏しく、生活はますます重苦しかった。堅固な信仰・自己犠牲の英雄的精神は、不完全な批判に立脚していたために、大部分が無駄になった。

思考活動の影響力によって幻想が消え失せ、それが現実接近するにしたがって、闘争と力の損失を少なくすることがはじめて可能になった、なぜなら、より良い批判に立脚する新しい信仰が、敵意ではなくて、和解をもたらしたから。唯一の科学的真理に対する信仰は、その中から幻想の所産を分離しながら、思考の領域から敵意を取り除いた。唯一の正義としての人格の平等に対する信仰は、多種多様なもろもろの民族的・法律的・階級的・経済的正義の衝突とこれらの偶像のためのあらゆる闘争とを取り除いた。唯一の義務としての個人的発達と正義に対する信仰は、真理と正義の拡大を目指す全体の努力によって、すべての個人的志向を和解させ、幻想的義務のための力の損失を取り除いた。発達した各人の最大の利益が最大多数の人間の利益に一致するという信仰は、進歩の途上における人類の力の損失を最少限に食い止めるための基礎に他ならない。このような信仰の有効な力は、それらが非宗教的な思索によって培われ、超自然的なものを少しも含まず、伝説も神秘も必要としないということから、生じてくる。それらは、厳しい批判・自然と歴史における現実的な人間の研究に立脚し、個人が行動に立ち上がる時はじめて信念となる。それらの根本教義は——人間である。それらの崇拜対象は——生活である。しかし、それらは、宗教的信仰と同様に、個人を鼓舞して献身的な行動に駆りたて、自分の神聖な祭壇にさまざまな人生の幸福と生命さえも犠牲に捧げさせる力を持っている。

読者は、これらの信仰が決して一般的ではなく、しかもごくわずかな人のものにすぎないのではないかと、私に反駁されるであろう。いかにもそのとおりである。それゆえに、人類における進歩はまことにわずかで、その代償はきわめて大きい。しかし、歴史は今日終わるのでもなければ、明日終わるのでもない、進歩の未来は、何と言おうと批判に立脚する信仰のものである。

しかし、進歩の未来は可能であろうか？ 現実の歴史的進歩は、ここで進歩という言葉に付与された意味において可能であろうか？ 歴史の上でこれを予言することは、今のところまったく不可能である。発達しつつある個人の信念は、まだいたって単純で、基本的要素を欠いてはいるが、一方気象学にしても、1872年11月のヨーロッパの気象状況をいくらかでも確実に予報できないし、植民の影響による諸大陸の一般的な気象上の変化や植物の量的変化等々を予言しようとする試みさえも、多くは幻想の領域に属している。諸個人間の個人的信念の整理分類——もっとも重要な基本的要素——が現在まで統計学にも手の届かなかったところの歴史においては、進歩の疑いなき発展の確実性を裏づけることは、それだけに困難であり、予言も一そう不可能である。いつか非常に遠い将来に、科学が長足の進歩を遂げ、数10億世紀後の星群の分布状態における変化とか、数10万年後に観察される有機体の系統様式について、予言が可能になるかもしれない。その時は、あるいはそれより幾らか早いかもしれないが、恐らく、現実の歴史の流れをかなり確実に予言し得るであろう、したがって進歩の理論とその実現の可能性の条件を点検し得るであろう。しかし、現在では、このような課題は、まだ幻想である。進歩について語る場合、何人も、諸事件の流れは実際にいかにして進展してゆくのか？ 歴史の自然的法則はいかなるものか？ という問題に立ち向かっているのだなどと考えるはならない。進歩の理論は、社会学の諸課題がそれらの歴史的展開の中から生じてくる時、道徳的発達の自然的諸法則をこれらの課題に適用することである。進歩の理論は、すでに終わった歴史の諸事件に道徳的評価を与え、かつ、批判的に思索する個人がもし進歩的活動家でありたいと望むならば当然目指さなければならないところの道徳的目的を指示する。個人の道徳的発達は、ただ一つの方法によってのみ可能である。個人の道徳的な進歩的活動は、一定の方向を取る場合だけ可能である。個人が最終的な諸課題に取り組んだ時、進歩が実現されるかどうかは彼には不明である。それは、バックルが自分の歴史を完成できるかどうか彼に分らなかったし、コントがその実証哲学講義を完成できるかどうか彼に分らなかったのと同様である。前者は仕事の始めに死に、後者は自分の労作の完成はおろか、実証的宗教の段階にさえ達せず世を去った。これは、——自分の仕事に取りかかる思想家にとっては、まったく意味のない可能的・偶然的なことがらである。彼は、この仕事が完成されるに違いないし、決してこれを放棄してはならないと考えて、仕事に着手する。進歩の理論に対する批判的諸個人の態度は、丁度このようなものである。個人が道徳的に発達した、彼は、現存の文化的諸形態と人類における福祉の配分に、自分の道徳的諸要求を適用した。彼は、これらの要求がこの方法によってのみ実現され得る、これが今日宣伝し得る諸理念である、これが今日闘わなければならぬ敵である、これが明日のために準備しなければならぬ闘争である、これが今日も明日も達成されないであろうがともかくも目的でなければならぬところの究極目的である、と自分にいい切った。方法がきまるや否や、彼はそれにしたがって進まなければならない。私は、この方法の若干の論点を指摘しようとして試みただけである。道徳的進歩をもたらす自然の法則が存在するかしないかは、いずれにせよ現にこれを知ることのできない個人には、関係のないことである。個人の意志とかかわりなしに生ずるこ

とはすべて、彼にとっては単に客観的知識の手段・媒体・対象であって、個人の道徳的志向に影響を与えるべきものではない。彼は、堂々たる闘士たちが彼の志向に手をかすことを期待したり、あるいは、彼の自主的活動をねたましげに眺めることを怖れたりする必要はない。彼は、信念の具体化が問題である時には、神意説の意識的闘士たちないしは宿命論の無意識的闘士たちを顧慮する必要もない。信念を涵養し、これを具体化せよ、——これこそ、心得べきすべてである。進歩は、必然的で連続的な発展ではない。必然的なものは、究極目的としての進歩の見地に立った歴史的発展の評価だけである。この見地からすれば、現実の歴史は、進歩的および退歩的な発達諸段階をなしている。批判的に思索する個人は、これをはっきり認識して、進歩的な発達段階に力をかしつつ、退歩的な発達段階を短縮するために活動しなければならない。彼は、自分の信念・自分の信仰の奥底に、そのための手段を求めなければならない。

書簡其の一六

進歩の理論と実践 ※

1. 進歩に関する問題の二つの面

人類における思考の発達は、進歩に関する現実的観念を作り出した、しかもこの観念は人類を取巻く幻想から切離さなければならないものである。この観念について前述の諸結果を検討してみよう。

思想家達が歴史的諸問題に関心を寄せるようになってからこの方、彼らは、人間研究のもっとも複雑でもっとも重要な対象の一つとして、進歩に関する概念の闡明とこの概念に含まれる作用の分析を、理論的に研究し続けてきた。人びとが父祖達の遺した社会秩序の不可侵性を信じなくなつてからこの方、また、個人的利益を追求するだけではいけないと考える諸個人が人びとの間に現われ、現存の社会的諸形態と諸条件の力によって、皆がより良い生活のできるような共同生活体を見出しかつ実現しようという目標を立ててからこの方、——それ以来、進歩のための闘士達は地上に後を絶たなかった。

思想家と実践的闘士の大部分は、同時に誤ちを犯していた。彼らの理論的概念の解釈の中には、自分の個人的利益と身近な人々のそれを支持しようとす願望——はっきり表明されてはいないが、時にはまったく無意識的なそのような願望——が紛れ込んでいた

※ この書簡は、雑誌《ニェヂェーリ》においても、初版本においても《歴史書簡》の中に入っていない。これは、1881年に合法的なロシアの雑誌の一つ（《スローヴォ》，第四号）に、ペー・シチューキンというペンネームで、ごく僅かな訂正削除の下に掲載された。私は60年代の終わりに書いた諸書簡に今度これを付け加えることにした。その理由は、この書簡が若干異なった見地から同一の諸問題を考察しているからであり、さらには、もし私が60年代の終わりではなく80年代の始めにこれらの問題に取りかかるとしたら《歴史書簡》全体をどのような方向で再構成するであろうかを、いささか読者に知って貰えるからである。僅かな重複は避けられなかった。しかし、それもごく僅かなので、私はそれらを削除するほどのこともないと考えた。思うに、読者は前に論じたことがらとの矛盾をこの中に見出さないであろう、しかし、前の著作では私の物の見方の幾つかの点が、十分明瞭でなかったかもしれない。この書簡では、それらの点が読者にもっと明瞭になるであろう（1891年）。

り、旧慣墨守的観念に対する伝統的な偶像崇拜主義が紛れ込んでいた。思想家がこの問題に批判的態度を取ろうと心から切望した場合でさえも、彼の進歩に関する概念は、社会学的事実の面における観察と経験が不十分であったために、非常にしばしば損われた。進歩のための実践的闘士達が犯した誤ちは、一そう頻繁にあらわれ、一そう悲しむべきものであった。ある人びとは、身近に存在する社会機構の欠陥に激怒するのあまり、この機構の實現可能な改善の諸条件を熟慮し理解する余裕も持たずに、闘争に突進した。彼らは、自分達の力はおろか、敵の力も計算に入れずに、われとわれが身を亡ぼし、進歩に対する熱狂的衝動を触発したものを無にし、死後歴史の中に英雄的行為の栄光だけを残した。この栄光は、非常にしばしば、ある人びとを幻惑し、他の人びとを震え上がらせて、歴史的進歩の諸条件に関する新たな幻想の誘因となり、将来における新たな破局を招来した。またある人びとは、複雑な過程のあらゆる条件をことごとく理解しようと努め、自分の活動によって必要以上に多くの苦悩を招きはせぬかと危惧し、陳腐な慣習に断乎たる態度を取らず、不確かな未来に疑問を抱いて動揺し、かくして、然るべき手段による自分と仲間たちの進歩のための闘争を阻害し、自分の味方の熱情に水をさし、誠実さと理解力のより劣る人びとに先んじられ、打算的な敵共におくれをとった。そして、彼らの尽力によって沸き立った歴史の波濤が、彼らの意図した方向——彼らがそのために活動し、自分の生命と自分の個人的幸福を献身的に投げうとうと決意したところの方向——とまったく違う方向をとっているのに気づいた時、意気消沈して失望落胆しなければならなかった。

これらの理論的・実践的誤謬の諸結果は、悲しむべきものであった。進歩のための闘士たちは、あまりにもしばしば社会的不幸の発頭人であり、まったくの反動的活動家であった。そして、より良き未来へ人類社会を導くことのできた進歩の道に立ちふさがった。最良かつ最適の社会機構に関するきわめて多数の著作は、この《最良かつ最適なるもの》の真の意義について、新しい世代に父祖たちと同様のとまどいを感じさせた。進歩のための闘争は、進歩と呼ぶにふさわしいものと似ても似つかぬ諸結果をもたらした。最後に、子孫たちにとって《最良かつ最適なるもの》が、父祖たちの世代の《進歩的》識者の大部分が思いもつかなかった方向——最良の社会機構のために闘った古い世代のもっとも誠実な闘士たちに嫌悪を催させ、猛烈な抵抗を起こさせたところの方向——にたまたま現われた。往昔の賢人たちは、社会の唯一の救いが古い習慣の神聖さの維持にあることを証明した。しかし、彼らの子孫たちは、このような習慣の維持を最大の社会的悪と認め、たえず増大する合理的な人間の諸欲求によって社会的諸形態を改造することが、唯一の健全な歴史の発展過程であることを明らかにした。内的結合の強固な諸民族の分立は、古代世界の理想であり、この理想のための戦いで、これらの民族自体が滅亡し、人類史のこの時代における著名な代表的諸民族が他の諸民族を滅亡させた。しかし、数世紀が過ぎ去った。そして、これらの民族そのものの中に、つぎのような確信——諸民族の分立というこの理想の中に、人類の進歩にとってもっとも有害な要因が含まれており、発達しかつ発達しつつある全人類の経済的・政治的・知的・道徳的団結が唯一の可能な進歩の目標であるという確信——が育成された。宗教的信仰は、最良の識

者たちにとって、長い間、社会生活の基礎であり、社会の精神的紐帯であり、さらにはまた、文学・芸術・哲学——それらは、所与の時代における人類の思考を最高度に発揮するための単なる装飾ないしは支柱であった——の神経系統に相当するものであった。しかし、別な時代、世俗的文明の時代が到来した。この時代には、理論家と実践家たちは、思考と生活の全領域から宗教的要素をできるだけ除去した、そして、人間の獲得し得る唯一の真理は宗教の領域の外にあり、人間の価値と一致し得る唯一の道徳は、人間の自然的欲求・論理的批判・合理的確信だけに立脚する道徳である、と断定した。17世紀と、18世紀の大政治家たちが追求した政治的諸目的は、19世紀の世代にとっては、経済的現実の単なる幻影にすぎないことが判明した。その後提起された富国の経済的目的は、現在は不明瞭で一面的な目的であることが判明している、今のところでは、国家の富の合理的な配分に関する問題がまだ解決されておらず、国家の富裕化と並行して、悪化し反抗するプロレタリアートの潰瘍がますますその傷口を広げている。最後に、最近数世紀の孤立せる経験論的科学——生活と焦眉の諸問題から遠ざかり、冷然と無機界と有機界の巨大な征服を行ってきたところの科学——でさえ、現代の先駆的な識者たちにとっては、科学的思考の単なる初歩的練習にすぎず、より発達した人類がやがて経験するであろうしかつ経験しなければならぬところの知的時代のレッスンにすぎないことが判明している。人類は、社会科学を現代知識の精髓として、自己の課題としている。この科学は、生活とその焦眉の諸問題から孤立しないことを学者に要求しているだけでなく、それ自体が生活に息づいており、焦眉の諸問題に満ち満ちた生活そのものである、しかも、この科学は、その本質そのものからして、——われを理解せよ！——という課題だけでなく、——われを生活の中に具体化するためにわれを理解せよ！ わが要求を現実に実現せよ、さもなくば、汝はわれを理解しなかったのだ！——というより広汎な諸要求を、その信奉者たちに提起している。

もし、進歩の概念の解明の歴史と進歩のための闘争の歴史が、人間の誤解と自我妄想と血まみれの誤謬の歴史であるならば、これらの誤解と自我妄想の除去・これらの誤謬の予防に一そう力を入れなければならない。もし、社会生活と社会的発達のためにわれわれの父祖たちの提起した諸目的が、その子孫たちにとって常に不十分であることが判明したならば、現在の世代は、この生活とこの発達の固定化した様式や伝承的課題にますます安んじていられない。現在の世代は、再三再四つぎのように自問しなければならない、——われわれは、過去のあらゆる思考の成果と誤謬に基いて、進歩の理論的課題をいかに理解すべきであろうか？ われわれの父祖たちの博した一切の勝利と彼らの蒙った一切の敗北に基いて、われわれが理解しているような形の進歩のために、いかにしてより合目的に闘うべきであろうか？ と。われわれも、進歩の理解に誤ちを犯すであろう——しかもそれは大いに有り得る。しかし、老人たちの誤ちを注意深く研究して、われわれの誤ちをできるだけ少くするように努めよう。われわれも、敗北を喫するかもしれない、当然それは起こり得ることである。しかし、そのような場合でさえ、勝利を得るために、あるいは、敗北するにしても可能な勝利の諸条件を後継者たちに示すために、われわれのなし得る最善を尽すように努めよう。

この際まず第一に銘記すべきことは、進歩の課題が不可避的に二つの——理論的および実践的——課題を有していることである。進歩の課題をできるだけ明瞭に理解し、その理解を最高度に身につけようと努めないならば、また、現にわれわれの有する力とわれわれの周囲に存在する手段によって進歩のために闘わないならば、進歩のための闘争は不可能である。より良きものを批判的に理解しようと努めずに、このより良きものための闘争に本能的に身を投ずるならば、われわれは過ぎし時代の多数の誤ちを常に繰返すおそれがあり、また、われわれが進歩のために闘っているつもりでも、反動ないしは停滞の勝利のために尽力するおそれがないわけではない。歴史の示すところによれば、このような例はあまりにも多い。理論的な理解だけに止まって、進歩のための現実的闘争を放棄するならば、われわれは進歩の過程の本質を理解しなかったか、それとも、われわれ自身がより良きものと認めるところのものに背いて意識的に行動しているかのいずれかである。進歩の理解の中には、つぎにあげるような自覚が本質的要素として含まれている、すなわち、進歩は決してひとりでの無意識的に実現されなかったし、かつ実現され得なかった。諸個人がより良きものを理解し実現しようと努力しないところでは、過去の繰返しだけが行なわれ、旧慣墨守と慣習だけが幅をきかせ、完全な停滞に陥るだけであった。個人の精力的な思考活動だけが、社会的世界観——これをそのまま放置しておけば、自然に型にはまった慣習に変わる——の中に、繰返し繰返し批判をもたらすことができた、たとえ成果が僅かであったにしても、確固たる信念を持った諸個人の不断の努力だけが、進歩のための闘士たちを組織的な社会的勢力——他の社会的諸勢力との闘争でその旗印を護持し、それらを打倒し、たとえごく僅かであろうとも将来の進歩のための地盤を停滞と無関心主義から闘い取ることでできる社会的勢力——として彼らの周囲に結集することができた、という自覚がこれである。もしそうであるとすれば、もし歴史の中で進歩を闘い取る過程の本質を理解したすべての人が、当然それを理解すべきであるとすれば、彼らは、真の進歩の理解の相違のために、あるいはまた、いかなるものであるにせよ停滞と旧慣墨守に反対する進歩のために、人びとの間で行われているところの不断の闘争を、われわれが拱手傍観するならば、われわれは味方の力を弱めるばかりでなく、停滞と旧慣墨守の支持者たちに直接加担することになる、という認識を持たなければならない。なぜならば、あらゆる実在するものの自然的情性は、力学における場合と同じように、社会学においても、この情性に反作用をおよぼす力が存在する場合だけ、運動全体の実現を可能にするか、あるいは、その性質の変化——既存の運動に対する——を可能にするから。社会的な生活においては、このような力——社会的運動の存在しないところではそれを創造し、社会的運動が緩慢なところではそれを促進し、人類革新の時代が到来する時には別な啓蒙の性質をそれに付与する力——は、所与の時代の諸欲求と過去全体の思考活動の成果を体現しているところの個人的思考・個人的活動力に他ならないし、それ以外の何物でもあり得ない。全力をあげて進歩の実現のために努力しない者はすべて、その理解の仕方からして、進歩に逆って闘っているのである。

かくして、進歩のための闘争に是が非でも参加することが、この概念の意味を自覚し

た個人の道徳的義務となる。しかし、いかにこの闘争に参加すべきか？ われわれの進歩の理解に応じて、いかに合目的に進歩の実現のために努力すべきか？——進歩的活動家の道徳的義務は、それを注意深く吟味すれば、自然に明らかになってくる。まず第一に、彼は自分の信念——もしそれが衷心からのものであるならば——のために、自分の体得した進歩の理解を他の人々に明らかにし、その支持者を獲得するように努めなければならない。しかし、もし彼が《戦場の一人は戦士でない》（一人では何もできない）という状態にあるならば、ばらばらに孤立しているすべての人は、彼らの信念がいかに強固で誠実であろうとも、やはりまったく無力である。歴史的意義を持ち得るのは、集団的な力だけである。それゆえに、進歩のための闘士にとっては、同志との結合を強化し、かつ、一定の方向に沿って言行を共にする人々の組織的集団の一員となる義務が生ずる。これとならんで、別の道徳的に当然義務とすべき活動分野があらわれる。進歩のための闘士が、一定の方向における進歩の必要性を、従ってまた——社会機構ないしは社会思想における一定の変革の必要性を自覚した。彼は、何らかの好条件——彼がこれまで生育しかつ現に生活しているところの環境の欠陥に、批判的・理性的態度でのぞむことを可能にした諸条件——のお陰で、はじめてこの自覚に達した。しかし、この自覚に達したことによって、彼が周囲の環境から一挙に抜け出たのだという幻想で、自分を欺いてはならない。否、彼は、生活と思考の無数の習慣によって環境に縛られており、しかもこれらすべての習慣は、彼が進歩のために除去しようと切望しているところの社会機構ないしは社会思想の欠陥そのものと癒着している。かくして、彼は、一般に進歩的活動家として闘わなければならない諸要素そのものが、自分自身の中にあることに気づく。さまざまな社会的なあらわれを見せるこれらの要素を克服するためには、自分自身の中にあるそれらと闘い、かつ、自分の思考と生活習慣の面で自己を再教育し改造してゆかなければならない。思考の領域における進歩の理解の普及者・集団的組織の一員・社会の進歩を推進する闘争のための社会的勢力の組織者、このような進歩のための闘士は、ある程度までではあるが、自分自身の個人的思考と自分自身の個人的生活の面で、実践的手本——一定の方向における進歩が、どのようにして諸個人一般の思考と生活に影響をおよぼさなければならないかということの実践的手本——でなければならない。

従って、個人の信念の不可分の要素になった進歩の理想にふさわしい個人生活の確固たるプランが絶対に必要であり、さらには、周囲の状況が許す限り、旧習と旧慣で四方から個人を圧迫する環境が許す限り、人間が奉仕の義務を負った進歩、しかも自分の理解・自分の信念に背くまいと努めつつ闘い取るべき進歩が、再耕し改良しなければならぬところの土壌そのものの上で、生長を遂げた自分の弱点と自分の欲望の許す限り、このプランを実践的に実現しようとする決意が、絶対に必要である。

従ってまた、組織化された社会的勢力の確固たる活動プランが、絶対に必要である、このような社会的勢力がなければ将来の進歩は望むべくもない、さらにまた、この進歩の実現の際に遭遇するはずの障害とその実現に好都合な条件をはっきり理解し、闘わねばならぬ敵の力と手段および闘うために用いなければならぬ自分たちの手段を理解し、

かつ、直面している進歩のための闘争の真の同志と支持者および可能性ある同志と支持者の社会における勢力分布を理解することが、絶対に必要である。それと共に、一たん確立されたプランを実現し、進歩の障害を除去し、進歩の敵を圧倒し、そのために必要な一切の手段——それらがどのようなものであろうとも、それらがわれわれの希求する進歩の理想に反しない限り——を現実に行使し、かつ、組織化された社会的勢力が形成された後、最後の勝利を目指す進歩の闘を組織してゆくために、組織化された集団の力をもっとも合目的的に使用せんとする固い決意が、絶対に必要である。

従って、進歩の意義についてのわれわれの信念が、われわれに耳をかす人びとの信念となるためには、合理的に熟考した論証の体系が必要である。われわれは、批判的思考以外の何ものにも妥協しない少数者に対しては、論理に適った論証を持たなければならない。われわれは、一般化の能力に欠けてはいるが具体的・経験的な論証を必要としている人びとに対しては、分りやすくしかも想像力に訴える諸事実を持たなければならない。われわれは、感情的な人びとに対しては、情緒面の論証を持たなければならない。最後に、われわれは、身近な現実的利益だけに左右される膨大な多数者に対しては、緊要かつ切実で誰にでも分る利害の面に、もっとも幅の広い実用的論拠を持たなければならない。科学の方法・想像力に訴える情緒・個人的利害の考慮に同等の力で立脚する進歩だけが、信頼できる多数の味方を獲得することができる。

進歩の実践の諸条件はこのようなものであり、進歩を実現し得るのはこの実践だけである。

しかし、これらすべての諸条件は、おのずから理論的な裏づけを必要とする。種々の社会階層の中で諸理念を広めるためにも、進歩のための活動に備えて、従って、その勝利に備えて社会的勢力を組織するためにも、さらには、確立した進歩の理想にふさわしい方向に沿って自己の人格を合目的に改造するためにも、——多くの依拠すべき理論的知識を持つ必要がある。出生とか教育とかの四囲の状況によって進歩のための活動家が置かれているところの環境、ならびに、一方ではこの環境を作り出し、他方では思考——この環境に批判的態度をとり、かつ、これを改造すべき進歩の課題そのものを明らかにするところの思考——の可能性を準備した歴史的過程を、理解する必要がある。この環境と歴史的過程は、社会組織における自然的過程——それは、複雑で移ろいやすい歴史の展開絵図がいかにも多彩混沌としたものに見えようとも、一定の諸条件の下で、一定の諸法則に従い、一定の諸力に動かされて進行してゆく——としての進歩の理解の基礎でなければならない。

かくして、進歩の実践の裏づけとなるものは、自然的過程としての、すなわち、現実的な歴史的現象としての進歩の理論であり、さらには、進歩の活動家を実践活動に駆りたてる社会組織・社会環境にこの理論を適用することである。

2. 諸学派の論争

進歩の理解に関する結論は、現在どのような状態にあるだろうか？ 現代の社会生活の諸事実と進歩の課題との関係は、どのような状態にあるだろうか？

われわれの前には、まったく矛盾した多くの見解、しかも進歩の課題に恐らくそぐわ

ないような多くの見解がある。それらを注意深く観察する時、われわれがそれらの中に見出す一致点は、僅かにつきの一事にすぎない、すなわち、現にわれわれの生活している時代は、一切の強固な社会的結合が崩壊してゆくきわめて悲しむべき情景・ますます熾烈化する階級間の反目と諸個人相互の闘争の情景を展開しているということがこれである。ほとんど万人の万人に対するこの闘争の帰結と万人の認めている社会的疾病の治療法については、極端に意見が分かれている。

神意説の信奉者は論外に置くことにしよう。また、あまりにもなまなましい現在の社会悪とそれに劣らざるなまなましい人類大衆の殉難の歴史—歴史的諸事件の年代記と呼ばれる殉難の歴史—を説明するために、公然と宗教的原理に依拠する人びとも、一人残らず問題にしないことにしよう。彼らの説は、現代の科学に無縁な思想体系に属している。

われわれにとっては、現実の基盤に立脚しているか、あるいは、立脚していると考えているところの社会的過程の解釈者たちだけでまったく十分である。

先ず第一に、悲観論者から始めよう。彼らの語るところによれば、—歴史で進歩と呼んでいるものは、人類の不幸の増大に対する宿命の志向である。すべての道はこの結果に通じている。もし、われわれがすべての実在するものをもっと良く理解し得るとすれば、われわれは、それらを不幸の源泉として理解し得るだけであり、理解を深めるにつれてますます不幸の宿命の増大を確信し得るだけである。

彼らとならんで、楽観論者がのんびりと慰めの言葉を吐いている、—進歩は、宿命のである。あらゆる点での人間の生存とあらゆる形の人間の共同生活の向上改善は、宿命のである。一初不幸、一切の不和反目は—仮の幻である。人間の混迷と苦悩、反動や進歩からの逸脱と思われることは、古い《時の河》の水面にそよぐ小波に過ぎない。この小波は、絶えず吹く方向の変わる風によって生ずる。しかし、この巨大な河の流れ全体は、いかなる風もこれを押し止めることはできない。人間の思考の力は、真理をつぎからつぎへとあばき出し、進歩にいたる未知の道程を解明しながら、増大してゆく。常に現代文明の継子として扱われている諸階級の福祉さえも、増大してゆく。それと共に、人間協奏曲をかなでるさまざまな楽器は、やがて一つの快よいハーモニーに溶けあうために、ひとりで調子を合わせてゆく。

これら二つのまったく相反する世界観は、歴史における自然主義者と呼び得る人びとからは、まったく問題にされていない。彼らの語るところによれば、—進歩とは、人類の生活過程を構成する諸事件の宿命のな転変の中で、つぎからつぎへと人類を喜ばせる多数の幻影の一つである。一切の《より良きもの》、一切の《より高きもの》、一切の個人的ないしは社会的理想は、—幻想また幻想である。現実的なものは、物理・化学的諸現象の過程だけである。それは、永遠に反覆する多種多様な発展諸段階の中で、有機的生命のいとなみ・意識のいとなみを世界のここかしこに生ぜしめる。有機的生命の現われるところでは、死そのものによって始めて終結するところの生存競走が開始される。意識が形成されるところでは、真理・美・道徳的義務・社会的連帯のさまざまな幻影—漂いわたるそれらの霧をすかして、痛ましくはあるが健全な真理がごくまれにほの

見える——が増大してゆく。ある人びとの幸福と他の人びとの苦悩は、煮えたぎる液体の表面に沸き上がる泡粒と同じように、過程全体から見れば、ほとんど意味のない偶然に支配されている。自然においては、改悪もなければ改善もない、低下もなければ向上もない。あるのはただ諸現象の交替だけである。しかもこれらの現象は、すべてが同一の価値を持ち、まったく何らの道徳的評価を適用し得ない。歴史の過程で唯一の現実的なものは、生存競走、現存の諸勢力間の闘争である。この過程の表面に現われる一切の理念・一切の理想は、単なる自我妄想に過ぎない。それは、進行する現実の過程の千篇一律性を度外視して、妄想を永続させようとする意識の作用によって起こされる。

学派を異にするこれらの形而上学者たちに対して、歴史の現実主義者は、問題提起そのものをまったく変えて反駁している。彼らの語るところによれば、——われわれは事物の本質を知り得ない、従って、それについて心を煩わすのは無益である。理論的・実践的真理を志向するわれわれの知的世界全体が、生存競走の千篇一律的過程を覆う幻想の世界に他ならないとすれば、われわれはやはり事物の本質からこの覆いを剥ぎ取ることとはできない、それでもわれわれは、现实生活の中で目的を立て、その達成手段を探し求めるであろう。《全体》のためのわれわれの苦痛と歓喜が、あるいはどんなに無意味であるかもしれないとしても、われわれは苦しみかつ喜ぶことであろう。われわれは、真理ないしはわれわれにとって真理と思われるものを探し求めるであろう。われわれは、不正ないしはわれわれにとって不正なものに憤激するであろう。従って《より良きもの》と進歩に関する問題は、事物の本質がいかなるものであろうとも、われわれにとって常に重大な意義を持つであろう。われわれは、われわれの科学・われわれの道徳・われわれの哲学を構成する知的世界のために、この問題を提起している。この見地からすれば、悲観論者ないしは楽観論者の見解は、われわれにとってはまったく空疎なものである。歴史の中で自然に生起することがらは、宿命的にわれわれの力とわれわれの活動のおよぼないところにある。世界における悪と不幸の量は《総体》としてどんどんふえているかもしれない。あるいは、それらはどんどん減っているかもしれない。しかし、われわれの前には、われわれの時代の傷つける人類が存在している。彼らの苦悩は、過去の歴史的過程の所産であり、われわれと同じような人びとがこの過程の進展に力をかした。われわれの前には、この苦悩する人類の可能性ある未来、われわれもその建設に参加しなければならない未来がある。われわれは、われわれの見解と信念・われわれの科学的批判・われわれの行動の決意——これらのわれわれの知的・道徳的諸与件がいかなるものであろうとも——を持って、この過去とこの未来の中間に立っている。われわれは、これらの与件の名において、自からつぎのように語らないわけにはゆかない——ここに悪と虚偽がある、ここに真実と善がある。これが過去における進歩の現象で、これが退歩の事実である、なぜなら、前者はわれわれにとって——善と真実への接近であり、後者は——それらからの逸脱であったから。われわれが建設に参加しなければならぬごく近い未来の中に、最大の真実と善を約束する諸現象が実にここに存在しており、傷つける人類を楽にするためにわれわれが闘わなければならぬ理由は実にこれなのだ。悲観論者は、——人類には新たな苦痛が不可避免的に訪れるであろう、——と語っ

ている。あるいはそうかもしれない。しかし、われわれの任務は、われわれが知りかつ理解している人類の苦痛のために闘うことである。そして、われわれが何ら明確な理解を持っていない悪に対する方策は未来の世代に委ねよう。——人類の苦痛は、本質的なものでない、——と楽観論者は語っている。それも有り得べきことかもしれない。しかし、人類の現在の苦痛は、骨身に沁むばかり強烈である、そうであるからこそ、われわれは過去の中にそれらの苦痛の原因を探し求め、未来の中にそれらの治療を探し求める義務がある。われわれにとっては、進歩とは、われわれが知的考察によって把握し得る時期内における、われわれが理解しているような《より良きもの》への諸事件の歴史的な流れの可能性ある方向である。われわれにとっては、進歩のための闘争は、義務としてこの可能性ある方向に協力することである。しかし、この方向は、単に可能性あるものに過ぎず、われわれの理解する限りでは、まったく反対の方向に変わることもあり得るであろう、従って、——この方向を真に正しく理解しているすべての人の協力が必要である。悲観論者と楽観論者は、その判断全体を以てしても、われわれが実践のために必要としている進歩の理論から完全に逸脱している。

この現実の基盤に立つ時、正しい進歩の理論の確立という見地から論議に値し得るし、かつ当然値すべき主義主張を奉ずるさまざまな学派が、現に存在している。

ここでも、われわれは、現代における少数の神祕派の代表者たちを除外しよう。彼らは、人類の進歩を宗教の更新の中に求め、現代の主要な悪を宗教的信仰の欠除にあると見なし、人類の救済を新しい教義・新しい礼拝の創造の中に求めている。もし、宗教的要素が歴史の形而上学で問題にされないとすれば、歴史の現実的過程を理解する際に、ましてや社会的疾病を治療する際には、その助けをかりない方が遙かに良い。

しかし、現在の社会状態とその窮状打開の可能な解決に関する現実的な解釈も、きわめて多種多様である、従って、ここでは主要な少数の学説だけに止めざるを得ない。

ごく少数の思想家たちは、現代における悪の根源を理念の分野にだけあると考え、発達した識者間におけるより正しい世界観の確立と社会悪治療のためのあらゆる階層にわたる合理的教養の普及に期待をかけている。彼らにとっては、——理念は世界を動かす——という言葉で、進歩を定式化するだけで十分なのである。彼らにとっては、科学の発達と世界観の解明が進歩のすべてを成している、なぜなら、彼らの意見によれば、この要素が他のすべてを条件づけているから。彼らにとっては、進歩のための闘争は、自己修養ならびに科学と合理的哲学の宣伝にある、なぜなら、その他すべての人間の生存分野における悪は、彼らの考えによれば、この主導的分野の解明によって除去されるから。

大多数の人びとは、さらに歩を進めて、生活上の利害関係の領域に問題を移している。

ある人びとはつぎのように語っている、——進歩は、社会組織の中に法律の原理を持ちこむこと、すなわち、法治国家の確立にあったし、現在もそうである。それは、あらゆる形態の圧迫と不平等を除去し、弱者を保護して強者を抑え、生活に自由と平等をもたらす、集团的権力によって極端な生存競争と利益や権勢をめぐる極端な競争を除去するのである。この法治国家は、自由と平等の原理を国民のために確立して、自からこれに

服従し、同じ仲間であるその他すべての法治国家とともに、調和のとれた政治的諸単位から成る同権の一連邦を構成するであろう。このような法律崇拜者たちにとっては、過去における進歩は、法治国家への接近にあった、そして、この進歩は、穏かな改革と流血の革命によって次第に実現されつつあるが、将来においても同一の手段・同一の方法がさらに推し進められなければならない。その他のすべての現象は、この発達の諸段階に包括され得るのであって、その埒外に存在するものは有害な社会的幻想の世界だけである。進歩のための闘士は、法治国家の旗印の下に、政治的自由と政治的平等の原理の下に、結集しなければならない。発達した人びとは、このような最高の社会的原理のための闘争に、自分の力のすべてを捧げなければならない。その他のすべては、法治国家——その理念によって歴史的進歩の全理想を包んでいる法治国家——の確立の結果として、生ずるであろう。

否、そうではない、——と他の人びとは反駁している、——法律的关系と一切の政治的生活は、より本質的な社会的過程——経済的発達の過程——の外面に過ぎない。国家の進歩は、その外面的価値と文化の内的発達を条件づけるところの国家の富裕化に存している。多少とも自由主義的な憲法を持つ君主国と共和国との政治形態の相違は、全世界的な商品生産・全世界的な商品取引の巨大な過程の中で、さらには、すべての国家・すべての民族・すべての社会階級間の経済的利害の強固な結合の中で、消滅しつつある文明は富の産物であり、人類の進歩は、その産業の不断の発達・人間相互の経済関係の拡大・経済的利益を目的とするあらゆる人間集団相互のより緊密な結合に存している。富は、独立自主と力を与え、人間的価値を生み、自由と平等を確立し得る条件を作る。国家は、ただ一つ現実的な経済的進歩の目的を達成するためには、一切を犠牲にし、一切の苦悩に冷然たる態度を取ってよい、なぜなら、犠牲と苦悩はともに一時的であり、あらゆる経済的利害の緊密な結合が、それらの一致と調和の意識を社会組織にもたらす時、百倍になって報いられるから。人類における進歩のための闘争は、致富への自然的志向、すなわち、競争に存している。この競争によって、もっとも賢明で機敏な人間は、自分で富を築くとともに、正にそうすることによって、致富の最良の過程、従って——もっとも正しい進歩への道の人びとに示す。個人は、この闘争に自分の力のすべてを捧げ、人間を合理的な道から逸脱させる感情的・道徳的幻想をことごとく払いのけ、一切を経済的利害の見地から評価し、すべてのものに市場価格を定め、かくすることによって、立派に自分の個性を涵養し、自分の才能を伸ばし、もっとも理性的な進歩の闘士となり、人類の致富の過程における万人の利害の調和と一致をきわめて速やかに確立するために闘う。

より一そう率直ではあるが、この点で非常に古い学説を新しい形で提起している理論家たちが、現に存在している。彼らは、経済的利害の調和に関する空想とまったく同じように、自由と平等の理念を幻想と見なしている。彼らは、法治国家の概念そのものの中に、内的矛盾を見出している。進歩は、——と彼らは語る、——少数者による多数者の支配・前者による後者の指導によってのみ獲得されたし、かつ獲得され得る。国家とは、支配であって、法律ではない。それは、法律関係を定め、国民間の自由と平等をあ

る程度まで確立し得るが、それ自体は、国民に対してあくまでも純然たる支配者である。しかし、政治的支配は、経済的支配なしには不可能である、それゆえに、国家権力を握る政治的支配階級は、他の諸階級にかかわる財物をその手中に掌握する経済的支配階級でなければならない。財物の経済的独占は、国家権力存立の不可避的条件であり、それなしには、文明もあり得ないし、進歩もあり得ない。進歩は、国家の支配権がますます強固になり、その存立の条件——諸階級の経済的・政治的不平等——が一そう一般に認められてゆくことだけに存している。さらにこれに付け加えなければならないが、進歩は、支配権が一そう強化される結果として、支配階級が被支配階級により人道的な態度でのぞみ、より人間的な生活を後者に与えることにも存している。進歩のための闘争は、このような諸条件の下では、つぎのことに帰する、——すなわち、他の諸階級にかかわる財物と政治的権力を一階級に集中する宿命的過程に協力すること、世界の主権者たちに対して被支配大衆に人間的価値と福祉の一部を残すようにという道徳的宣伝を行うことである。

上述の社会学的諸学説と反対に、社会主義的思想家と活動家のグループは、先に列挙した各学派に属する諸原理の一部を受け入れてはいるが、まったく異った構想の下にそれらを受け入れ、まったく異った結論に達している。その通りだ、——とこの派の支持者達は語っている、——人類の進歩は、社会機構の中に自由と平等をもたらし、社会生活の中に法律を真理としてもたらすことにある、しかし、このような原理を社会にもたらし得るのは国家ではない、なぜなら、国家は、その本質において権力であり、不平等であり、自由の抑圧であるから。一階級による他階級の支配が強化され確立されてゆく時には、より人間的な生活を被支配階級のために期待し得ないばかりか、彼らの物質的・知的・道徳的低下がますますはなはだしくなるに違いない。法治国家は、実現されない空想である。それゆえに、一階級による他階級の支配としての国家は、その力と歴史的意義に応じて、進歩のために最少限を志向すべき要素である。国家は、外部的な力としては、社会的発達が不十分であったがために、長期にわたって歴史的必然性を持っていた。しかし、社会的発達の進展に応じて、国家は、その諸機能をつぎからつぎと他の社会的諸要素に譲り、歴史における国家の役割は宿命的に減少してゆく。現在では、国家は、社会的発達形態を支配する経済力に完全に依存していることを自から認めている。それゆえに、われわれは、社会的真理・自由と平等の社会的実現を、個人ならびに階級間のより良い法律関係の確立の中ではなくて、より正しい経済制度の確立の中に、まず第一に求めなければならない。もし後者が正しければ、不正な政治的諸形態は長く存在することができない。

しかし、現在の経済制度は正しくない。それは、多数者に対して不平等と自由の剝奪を不可避的に惹起している。それは、一部の階級による他階級の支配を不可避的に作り出している。それは、経済的競争の中で、個人間の反目・集団間、集団内の闘争の諸要因を人類の間に生ぜしめ、強化し、正当化しつつある。それは、少数の者にだけ発達を許して、莫大な人びとの個人的発達を抑圧し、彼らをひたすら万人の万人に対する闘争に陥れることによって、その発達を歪めている。現代における進歩は、この不正な経済制

歴 史 書 簡

度を根本的に変革するとともに、各人の全面的な発達を可能にし、生活の中にできるだけ多く自由と平等をもたらすことを可能にし、かつ、社会生活の中に真理を許容するところの別な原理によって、経済制度の土台換えを行う以外に可能な道は存在しない。進歩は、過去においても、事物の現実的な相互関係や個人の人間的な発達と正しい社会機構の現実的要求を人びとに解明したところの思考の面の発達だけに存したし、かつまた存し得た。さらには、個人間、集団間の結合を緊密にし、この結合をすべての思索する人びとにまで拡大したところの社会関係の諸要素を強化することに存したし、かつまた存し得た。要するに、進歩は、ますます完成されつつある批判的思考によって真理の自覚が高まってゆくこと、人びとの間の団結——全体の発達に対する協力の中で、最後にはすべての思索する人びとにまで拡大される団結——が、社会生活に着々と実現されてゆくことに存したし、かつまた存し得た。この団結が確立され得るのは、もちろん、致富のための競争や生存競争によるのではなくて、筋肉と頭脳による生産的労働者全体の共通の利益・個人的発達手段と生産的労働手段の解放・一切の物質的・知的独占の排除・全体の利益のための集団的労働によるのである。この際、進歩に逆う要素になるのは、現存の社会関係の墨守、ならびに現に支配的な少数者に属する個人と集団の利害関係である。このような個人と集団は、ある人びとが食うや食わずの生存権確保のための競争を止め、他の人びとが莫大な利益と不要なぜい沢品を大量に収奪するための競争を止める時、その支配権を失うであろう。現に存在する多くの思想傾向も、進歩に逆う要因である、すなわち、社会機構における経済的利害関係のその他に対する優越を認めず、かつ、人間一般の強固な結合の唯一の基礎として、経済的利害関係における連帯の確立を必要と認めない人びとは、進歩の敵である。進歩の主要な武器が、個人的利害の協調ではなくて、その競争にあると考えている人びと、一階級による他階級の支配を進歩の不可避的条件と見なしている人びと、最後に、進歩ないしは退歩を形而上学的な力の作用によって生ずる宿命的な歴史的過程と見なし、しかも諸個人の個人的努力を少しも問題にしない人びとは、進歩の敵である。社会主義の学説において、進歩のための闘士に要請されていることがらは、すべての思索し労働する人間集団の団結を可能にするところの新しい諸関係を、所与の現実的な人間関係の中から作り出すこと・この再建を促進ないしは阻害する現存の諸要素を理解し、かつ他の人びとに明らかにすること・この変革に役立つものを利用し、その途上に現われる障害を除去ないしは打破し得るところの集団的力を作り出すこと・進歩のための敵との闘争に役立つだけでなく、個人や集団の結束を可能にしかつ強化し得るような社会機構の確立にも役立つところの個人的思考力と個人的活動力を、自分と思想上の同志たちの中に培うことである。

私は、以上の諸説だけに止めよう。進歩に関する種々の思想傾向をもっとも明確端的に表現している上述の諸学説とならんで、他の学説が若干あるが、それらは部分的にさして重要な意義がなく、私が挙げた諸学説の過渡的・中間的な諸段階に相当している。しかし、この書簡の目的からすれば、これらの中途半端な学説を列挙する要はない。極端にはっきり異なった進歩の諸見解を挙げるだけで十分である。これらが見解は、それぞれその支持者とその歴史を持ち、発生しかつ存在すべき理由を持っていた。これらの各

々に賛同する有力な論証は、過去にもなされてきたし、現在もなされている。したがって、——進歩について論ぜられた諸学説が相異っている時に、論争中の各学説の賛否両面にわたる論証の考察を、一体いかにして始めるべきか？ いずれかの進歩の理論の不可避の結果であるところのいずれかの進歩の実践を、一体いかにして意識的に選択すべきか？——という問題が生じてくる。私は、ここでは、この場合に解決しなければならない諸問題と合目的な解決のためにもっとも適切と思われる問題提起の順序を、決定することだけに止めよう。それらの提起は、——不可避的である、なぜなら、それらを提起するのは、個人の恣意ではなくて、歴史の宿命的な発達だから。ともかくもそれらを解決することは、——必然の義務である、なぜなら、前にも述べたように、進歩の道を探求し、力のおよぶ限り進歩のために闘おうと欲しない者は、正にそのことによって進歩に敵対する闘士となるから。

3. 問題提起の順序

人類の歴史における進歩は、何にあったか、また、何にあり得たのか？

この問題に答えるために、われわれは三つの材料を持っている。第一に、長所と欠陥・団結と反目の要素・健全な過程と病的な過程を併せ持ったあるがままの姿における社会、しかもわれわれの観察し得る社会を、われわれは持っている。第二に、われわれは、過去から現在を準備した歴史の過程を持っており、歴史的批判に基いて、この過程の実際的経過を多少とも正確によみがえらせることができる。最後に、第三には、われわれは、決して完全ではないがある場合には非常に注目し得る個人的労作を持っている。社会学およびそれと密接な関係にある心理学・生物学部門の諸問題を取扱ったこれらの労作においては、上述の記述的材料と歴史的批判によって確かめられた材料の助けをかり、かつ、他の科学的諸部門で確実な結論をわれわれに与え得るところのものに劣らないほど正確な帰納と推理の方法をかりて、さまざまな歴史的発展段階における社会機構の種々の要素が検討かつ分析されており、それら相互の依存関係が示されている。

したがって、今しがたわれわれの提起した問題は、その解決をもたらず三つの方法を可能にする。

われわれにもっとも身近で一番よく分かっているのは、われわれの周囲にある社会である。思うに、きわめて率直にいきなり社会から始めるべきである、なぜなら、まったく当然のことながら、研究の際には常に分かっているものから分からないものに進んでゆかなければならないから。したがって、われわれは、記述的材料、統計的資料、対照表を準備し、つぎのような問題の解決に努めよう、——われわれの社会に進歩の源泉を供し得るものは何か？ 退歩ないしは停滞の要因は何か？ 人類の発達の課題のために、何に協力し、何に抵抗しなければならないか？ 引力の法則に逆うのは愚かなことであるが、それと同じように、逆ってみてもどうにもならぬ宿命的必然性を構成するものは何か？ 個人的信念と個人的活動力の寄与によって作り出される成果は何か、したがってまた、信念を明らかにしかつ活動力を他に向けることによって、何が変革され得るか？

しかし、現代社会の観察だけが、果してこれらの問題の解決を可能にし得るであろうか？ われわれは、長期にわたる過程の大ざっぱな諸結果だけを眺めている、しかし、

歴史書簡

われわれは別な方法でこの過程を推察しなければならない。——ここに数々の苦悩がある。ここには、犯罪者と自殺者の分類一覧表がある。ここに、流血の戦争、流血の革命の収支報告がある。ここには、勤労者の収入計算書、彼の必要欠くべからざる支出金額にとうていおよびもつかない収入計算書がある。これらすべては——明白な悪である。われわれは、偽らざる愛情と率直な同情の名において、これらすべてを除去したいと思う。それには異議なく賛成である。しかし、いかにしてそれを実行したらよいのか？——ここには、先程の情景とならんで、まったく別な情景が展開されている、——強力な技術は、ますます諸大陸にゆきわたり、風俗習慣をまったく異にする人々相互の交流を可能にし、かつては夢にも知らなかった諸便宜で日常生活を圍繞している。科学は、獲得した成果の数で見る者を疲れさせ、つい最近までは発達した才能者だけが辛うじて理解していたことを、きわめて智能の低い者にも通俗的な解説で理解できるようにしている。全般的な利益追求闘争の中で、献身的な博愛の行為がなされている。殺し合いの流血の諸場面で、英雄的・自己犠牲的な行為がなされている。統計学が、慢性的飢餓・勝つ見込のない不断の生存競争・一片のパンゆえの競争を運命づけている人びとの間で、一致団結の行為がなされている。われわれは、これらの現代の成果を心から誇としている。われわれは、それらをおし広げ、一般化したいと思う。われわれは、ここに進歩の諸要素があるから、他の面にもそれらを発展させなければならない、と語っている。われわれは、これを認める。しかし、またも先程と同じように、いかにしてそれを実行したらよいのか？

もし、犯罪者と自殺者の一覧表が、毎年の雨天と電害の平均値と同じ程度に、社会学的变化の影響にほとんどひびかないものとしたら、一体どうしたらよいのか？ われわれが闘おうと意図している悪が、他のもっと悪い悪によらなければ変革し得ない時は、一体どうしたらよいのか？ われわれが人類の幸福と発達の諸要素を見出せると考えた輝かしい情景が、社会的不幸の忌むべき情景と密接に重なり合っているために、好ましい美の増大に伴って、これらのきわめて忌むべき不幸が、不可避免的にしかもはなはだしく増大してゆくとしたら、一体どうしたらよいのか？ 加うるに、流血の戦争と流血の革命は、科学と技術の成果・慢性的に飢えている勤労者の生計・これら勤労者たち自身の間における一致団結の行為とまったく同じように、忽然としてあらわれたのではなくて、歴史的過程の結果としてあらわれたのである。正にこの過程の今後の進展の中でのみ、これらの中のあるものは除去され、あるものは拡大され得る。これを実現するものは、この過程の中で活動しかつこれを推進する力、しかも、この過程の中で活動しかつこれを推進し得る力そのものである。

現代社会の観察が、しかるべき進歩の実践をわれわれに示し得るのは、われわれが周囲で起る諸現象を自然的ないしは歴史的範疇として理解した場合だけ——すなわち、これらの現象の中のどれとどれが、自然的原因・常に反覆する他の現象（例えば、食欲のごとき）・人間の歴史的世代全部に影響を与える過程（例えば、国土の気候的、地理的諸条件のごとき）に依存しているか、さらには、これらの現象の中のどれとどれが、生存の諸条件と論理的依存関係の諸条件相互の間で不可分に結びついているか、これらの中

のどれとどれが、歴史的過去の所産であり、一定の諸条件・一定の社会的諸力の影響によって発生したか、また、他の諸条件・他の社会的諸力の影響によって消滅ないしは変化し得るか、をわれわれが知っている場合だけである。われわれは、現代の社会機構を過去の歴史全体の所産として理解しない限り、それをいかに綿密に観察しようとも、ここから進歩の理論を引き出すことはできない。過去の歴史においては、一定の歴史的諸力が働いてきた、その中のあるものは、——自然の過程そのものによって条件づけられた恒常的な力であり、またあるものは——歴史自体によって作り出されたが、一たん作り出された後は、自然の賦与する本源的な歴史的衝動との闘争を、時には勝利をもたらす闘争を、開始し得る力である。

現代を歴史の所産として理解するためには、上述の第二の材料——歴史的材料——に頼らなければならない。われわれがここで究明しなければならないことは、つぎのことからである、——あらゆる文化的諸条件の下で反覆される現象は何か、文明の一定の諸形態とだけ関連するものは何か？ いかなる一群の社会的諸現象が、それらの要素の必然的共存の形で、常に全体的なものとして観察されるか、いかなる諸要素が種々様々の組合せで現われ得るか？ いかなる歴史的力が、個々人の個人的信念や個人的活動力と関係なしに発生したか、この信念とこの活動力は、いかなる歴史的力の中で不可分の要素になったか？ 進歩のすべての敵と同じく、進歩のためのすべての闘士が重視しなければならないところの現代の歴史の基盤になるものは、いかなる意欲であろうか？ これらの意欲は、いかなる組合せで進歩の現実的基盤になったか、何時それらは反動に活動の手掛りを与えたか？ いかなる力が、たとえそれらが強力なものであったにせよ、それらに永続性と不変性を期待できないために、進歩的活動家にとって一時的な助けにしかならないのか？

疑いもなく、歴史はこれらの問題に解答を与えることができる、しかし、それには二つの条件——その材料が十分に豊富であることとその課題の提起が十分に広汎であること——が必要である。

正しい歴史的批判は、さして遠からぬ過去に属する資料を存分に駆使している。それ以前の時代になると、社会の情景はいくらかぼやけてくる。歴史家は、これらの情景に見入りながら、より新しい時代との類推——常にいくらか危険を伴う類推——によって、古い時代をよみがえらせようとする傾向がある。さらにその先には、半歴史的時代、有史前の時代がある。この時代については、たとえその一部にしか過ぎなくとも、多くの工夫構想を手がかりとして、これを想像の中によみがえらせなければならない。しかし、この場合にも、研究者の思考と生活上の個人的性癖が、これらの工夫構想の中に多分に織り込まれやすい。このような方法による時は、所与の時代に発生すべき理由を持ち、正にそれゆえに他の時代に栄えかつ衰えるべき理由を持ったある歴史的形態が、歴史家にとって、時には社会機構の不変的・恒久的・自然的な要素と思われる。古代のギリシャ人は、奴隷制を、それなしにはいかなる社会も考えられないところの制度と見なしていた。現代の法律家の大部分は、現今の家族・社会・警察・裁判の諸形態を、変革すべからざるあるものと見なしている。ほとんどすべての現代の政治家は、国

歴史書簡

家的要素を、独立的・支配的なあるものとしてあらゆる時代の中に求めずにはいないし、さらにはまた、現代の機構の中で経済力が内政と外交を制約していること、将来何らかの社会的諸要素が国家の活動の役割をまったく些々たる最少限にまで持ってゆくであろうことを、認容できないでいる。

歴史の課題は次第に拡大されつつあるが、すべての研究者が決して同様の広さを持った課題を提起しているわけではない。伝記的歴史の時代が過ぎ去ったというのに、人類生活の全時期にわたる経済力の役割が十分に詳細かつ根本的に検討されているようないくらかでも完全な労作は、まだ一つも存在していない。現在の歴史に関する労作の中では、哲学的世界観と特に科学的成果の発展が、政治的諸事件の歩みと決して満足のゆくように結合されていない。それらの中でより一そう考慮が払われていないのは、さまざまな知的・道徳的な発達段階にあり、かつ、さまざまな形で思考活動に参加するところの少数者の若干の集団が、所与の時代に同一の社会の中に共存すること・それらとならんで、異った発達水準にある多数者が存在すること・共同の生活によって結びついたこれらの集団の相互関係・所与の時代における歴史的生活の情景全体の一要素を形成するこれら各集団のまったく異った歴史の歩みである。もちろん、これらの課題は、まだ現在の段階では、歴史の全時期についてしかるべき解決が不可能である。もちろん、この部門の現代の研究者達に、これらの困難を十分満足のゆくように究明せよと要求することもできない。これらの困難の克服は、一部は現在までまったく無視されてきた歴史的資料、また一部は検討がはなはだ不十分であったかあるいはまったく未知であった歴史的資料を特に厳密に研究することによって、はじめて可能である。しかし、とにかくも、思考の現代的課題の水準に立つに足る歴史的労作全部に必要なことは、研究者が問題のこれらの側面をことごとく考慮に入れること、歴史的生活のこれらの側面に関連する諸事実を見分ける能力とそれらの意義を理解する能力を、できるだけ兼ねそなえることである。しかし、現在、所与の事実の経済的意義を適切に評価し得るほど、経済現象の部門に精通している歴史家は、はたして大勢いるであろうか？ これらの科学的労作と文化の一般的状態の関係を考究することについては問わないにしても自主的に所与の科学的労作の役割を理解し得る人が、はたして大勢いるであろうか？ 種々の社会集団の各々におよぼす所与の事件のさまざまな影響を、想像によって再現し得るほど、これらの集団の同時的な歴史的発達を完全に把握し得る人が、はたして大勢いるであろうか？ 残念ながら、これらすべての問に対しては、否定的な答をせざるを得ない。しかし、歴史家は、生産・流通・富の分配の経済的過程を明確に理解しなければ、経済的保証の諸条件にもっぱら隷属している人民大衆の歴史家には決してなり得ない。しかし、歴史家は所与の思想の科学的意義に対して明確な見解を持たずに、所与の時代における思想の発達の真の性質を理解し得るであろうか？ しかし、自分の研究を若干の社会集団だけに止めたり、あるいは、これらの集団の可能な現実的相互関係に関する問題を提起しない時は、所与の時代における社会全体の進歩について、いくらかでも正しい観念を作り出す何らかの可能性があるだろうか？

かくして、上に述べたように、進歩の理論のための歴史的資料の検討から生ずる諸問

題に答えるためには、この資料の研究者は、社会学の諸課題を、それら相互の依存関係においてしっかり把握し、彼の持つ諸事実の資料を、それらの相対的重要性とそれらの本質的關係に対する明確な見解によって、解明しなければならない。この本質的關係は、一部は、自然的な人間の欲求の不変的法則に根ざし、また一部は、諸事件の進展そのものによって作り出され、かつ、社会生活一般のみならず、一定の文化的諸形態における社会生活によって生み出されたところの歴史的欲求の一時的法則に根ざしている。歴史的資料は、生物学・心理学・社会学の諸法則に照らしてみることによって、はじめて解明される。これらの法則は、漠たる長い時代にわたって繰返される諸要素とならんで、歴史によって創造され、かつ破壊されるきわめて多くの歴史的諸要素を含んでいる。調理技術の進歩した食物に対する習慣は、人間の營養摂取の身体的・病理学的諸条件をある程度変えざるを得なかった、それは、意識の中樞機能における神経活動の作用が、社会生活のさまざまな形態の影響によって変化せざるを得なかったのとまったく軌を一にしている。生物学的諸条件に直接依存する心理学的過程の分量は、社会的結合と社会的欲求の直接的な作用によって発達したところの心理学的過程の分量に較べれば、まことに微々たるものである。社会学に関しては、社会的生活のあらゆる機能が、歴史の流転とともに量的・質的に変化し、かつ、これらの機能を果たすためのあらゆる機能が、人間のさまざまな社会的欲求の変化・生滅に応じて歴史によって創造されるという真理は、現在では繰返すにも値しないことである。かくして、歴史的資料は、一たん確立された心理学と社会学の諸法則がその後の歴史的資料の分類と解明に役立つ時にこそ、このような諸法則を導き出すために役立つのである。もし、われわれが、人間の欲求の何らかの確実な理論を研究の出発点と見なさず、さらにはまた、人間の生活における共同生活の役割・社会的変化の過程における個人と社会の關係・あるいは宿命論的に（ある諸説によれば）人類の進歩を作り出し、あるいは（他の諸説によれば）ある場合には進歩を促進し他の場合にはそれを阻害し得るところの主要な社会的力・最後に、歴史の本質的な事実、多少とも重要な事実、ないしは第二義的な事実の意義を評価するための図式になるところの基本的な歴史の過程・に対する何らかの明確な觀念を、研究の出発点と見なさないならば、われわれは、所与の歴史的資料と進歩の理論との關係の考察に着手することさえできない。より広汎でより綿密な歴史的諸事実の研究は、出発点の修正を可能にする。そして、ここにこそ心理学と社会学の成果があり、それが今度は歴史の理解の面で新たな成果を生み出す。しかし、歴史的資料は、社会学ならびにこれと関連の深い心理学・生物学の諸部門から汲取った資料、しかも現在の知識段階でもっとも確実と思われる資料に基いてだけ、その時々評価し分類しなければならない。

進歩の理論に関して前に提起された問題は、したがって、つぎのような順序で提起すべき三つの問題に分かれる。

生物学・心理学・社会学の現在の資料を根拠にする時、人間社会における進歩は何に存在し得たか？

検討されかつ考究された歴史的資料を根拠にする時、歴史的進歩のさまざまな発展段階は何に存したか？

現代的機構の発生の歴史的過程と歴史における基本的な進歩の諸現象を考慮に入れ、われわれの周囲に観察される社会機構と種々の社会集団における現存の思考活動を根拠にする時、現代にとって可能な社会的進歩は何に存しているか？

発達した個人の絶対的義務である進歩の実践は、この進歩の理論がここに提起された諸問題に与えるところの解答いかに懸っている。

4. 進歩の理論の内容の概観

今しがた提起されたばかりの三つの新しい共通的問題は、今度はどのような個々の研究に分かれるであろうか？この点についてごく大ざっぱに検討してみることにしよう。

進歩は何に存し得たかという問題に答えるためには、まず第一に進歩の諸要素を決定し、発達という言葉に包括されるさまざまな過程の中に、われわれにとってもっとも良きものへの志向と思われるものを探求しなければならない。

ここでわれわれの脳裡に二つの過程が浮かんでくる。われわれは、見ただけでそれらを進歩的な過程と認めないわけにゆかない、しかし、それらは、対立的なものとなしなくてもよいほどまったく異っており、事実、現実の歴史の中で互に衝突し合ってきた。

われわれの前には、個人的思考の発達、その技術上の発明、その科学上の成果、その哲学上の理論、芸術上の創造、道徳的ヒロイズムとともに存在している。われわれの前には、社会の団結が、その基本的欲求——《万人は万人のために、万人は各人のために》・《生活と発達に必要な一切をすべての人に》・《各人からは、社会的利益に貢献する仕事、社会的幸福、社会的発達のためにそのすべての力を》——とともに存在している。

個人における認識作用の発達、思考の領域における個人の発達は、われわれにとって疑う余地のない進歩の現象である。人類の個人的思考の最大最高の発達を保証する諸条件は、したがって、進歩の諸条件に他ならない。

他面から見れば、社会的結合の強固さは、社会の健全な生存とその成員たる諸個人の福祉とに欠くことのできない条件である。したがって、この結合を強めるすべてのものは、われわれにとって有益な進歩の要素であり、この結合を弱めるすべてのものは、社会の内部に反目を生ぜしめ、不平等を作り出すすべてのものは、われわれにとって病的な退歩的現象である。この点では、利害と信念を互に等しくし、同一の文化的諸条件の下で生活し、相互の一切の敵対感情と社会成員間のあらゆる形の生存競争をできるだけその生活環境から除去した諸個人の社会が、われわれにとって社会の理想である。

しかし、進歩に関するこれらの二つの観念は、歴史の流れの中で衝突を惹起することがあり得るし、また惹起してもきた。

平等な諸個人の強固な社会という理想にきわめてふさわしいものは、原始的な習慣の王国である。そこでは、一切の思考活動・一切の個人的発達は、支配的な旧慣墨守に押し潰され、社会的平等が意味するものといえ、すべての人が向上的欲求を一様に欠いており、すべての人がより人間的な生存を一様に闘い取り得ないということだけである。家畜の群ともいべき人間のこの原始的で半神話的な状態が、はたして何かしら望ましいもの、何かしらより良いものといえるであろうか？ 個人的思考のより高度の発達と

いう理想に適合し得るものは、僅かな少数者の知的征服がきわめて顕著な社会機構である。しかも、それは、この少数者が、その支配に服し、かつ、その知的生活にまったく参与し得ない膨大な多数者の膏血を吸取ることによって、ますますいちぢるしくなる。なぜなら、個人的思考の力強い若枝は、大衆の奴隷化・無数の苦悩を犠牲として購われ得るから。このような諸条件の下で、わずかな個人だけに認識作用の強大な発達をもたらす社会環境が、はたして無条件で進歩的な環境といえるであろうか？

いや、そうではない、——とわれわれはいう、——蟻塚ないしは蜂房が本能に支配されているように、習慣に支配されている原始的な人間の畜群は、進歩の理想ではない。強固な社会的結合を維持し得るような諸条件の下では、社会は、その内部で意識が発達し、新たなより高い欲求が発達してゆく場合・諸個人間のできるだけ多くの平等が、もっぱら彼ら一人々々のできるだけ多くの個人的発達の基礎になる場合・旧来の機構、旧来の生活が、拡大してゆく思考の影響によって次第に改良されてゆく場合・社会の結合、その強固さの基盤が、伝統的な同一の習慣ではなくて、すべての人を活気づける同一の信念である場合に、はじめて進歩的である。

いや、そうではない、——とわれわれはさらに続ける、——多数者の奴隷化と苦悩を犠牲にして購われた個人的思考の発達は、進歩の要求に合致する過程ではない。それは——一方に偏した現象である。その明白な徴候は、このように他人の苦悩の犠牲によって形成された少数者が、すばらしい知的成果をあげているにもかかわらず、まだ道徳的にほとんど発達していないことにあらわれている。彼らは、自分たちのために現存の諸条件下における発達の可能性を許容し、彼らを作り出した諸条件に少しも怒りを感じていない。個人的思考の真に進歩的な発達が実現されるのは、より発達した個人とより発達のおくれた諸集団との間の団結の自覚・このような意味での社会関係の改造・連帯的な社会成員の発達面における不平等の減少が、この発達の根本目標である場合だけである。個人の真の発達は、社会的諸要素の相互関係が、諸個人の発達程度の差をできるだけ最少限までもってゆき、かつ、この最少限の差をさらに少くしようとする全体の志向がある時に、発達した人間集団の中にはじめて発生し得る。

健全な社会生活においては、諸個人は、他人を犠牲にして発達するのではなくて、発達途上におけるすべての人びとのきわめて積極的な協力の下で発達する。

しかし、これは不可能な理想でないだろうか？ 個人的思考の発達条件を認めない強固な連帯的社会か、それとも、諸個人と諸集団の間の不断の反目、永遠の闘争、反覆常なき内的・外的悲惨事を必須条件とするところの思考活動の強力な社会か、この二つの中のいづれかを選択すべきでないだろうか？ 多数者の奴隷化と苦悩を条件として思考を発達させる少数者か、それとも、思考の発達の欠除か、この二つの中のどちらかを選択すべきでないだろうか？ 社会の成員が信念によって結ばれている社会組織、これらの信念の名において、諸個人が全体の発達のために協力するような連帯的社会組織が、はたしていつかうちたてられるであろうか？ 個人的な利害関係は、永久に一個人を他の個人に敵対させないであろうか？ これらの利害関係は、個人を社会の搾取者ないしはその受難者にすることによって、彼を永久に社会組織に敵対させないであろうか？ 個人的欲求を社会的課題と同一視し得るであろうか？ 個人的な利害関係は、個人の思考

生活を鼓舞するだけ、それだけ社会生活を強化する力になり得るであろうか？

進歩の理解のこのような発達段階では、個人と社会の利害を比較対照し、かつ、それらがどの程度調和し得るかを考察しなければならない。

歴史の事実が示すところによれば、強固な社会的結合と社会における強力な思考活動との間には、深刻な対立は存在しない、さらにまた、個人的思考は、社会の利益に対する個人の利益の対置・個人による社会の利用の面だけでなく、発達した個人と彼の属する社会との団結の面にも、いちぢるしい影響をおよぼすことができる。この個人的思考は、同種族の人間・同国人・人間一般に対する愛を呼びさまし、彼ら相互の団結・自分と彼らとの団結を強めようという願望を呼び起こし、全体の利益のためには個人的幸福・個人的愛着・さらには生命さえも犠牲に捧げようとする献身的行為を呼び起こす。社会的習慣に対する思考の闘争とならんで、進歩的な文明社会を目指す思考活動が、歴史の中に存在している。生存、致富、快楽の独占のための利害の闘争とならんで、この闘争に逆って意識的に社会的事業に奉仕した人びとの献身的行為・人びとの団結を強化するために挺身した多くの人びとの存在を、われわれは知っている。

個人の利益は、必ずしも、大多数の他の社会成員の諸目的と対立する自分達の目的のために、社会環境を利用することだけにあるとは限らない、まったく同様に、個人が彼の属する社会関係に支持的態度をとるのは、必ずしも、支配的な習慣に対する服従のためだけとは限らない。個人は、一定の発達段階に達すれば、彼の利益がこの多数者の利益に一致することを理解し得るし、さらにはまた、社会関係がより強固である方が彼にとって有利であることを理解し得る。かくして、彼の思考活動は、社会関係の強化と社会の団結の強化に向けられる。その時には、発達してゆく個人的思考の力は、ますます結束を強めてゆく社会の力と同時に発展してゆく。前に検討した二つの要素の進歩的で調和のとれた発達は、この両者の発達現象が相互に助け合いながら実際に進歩的な現象になる場合に、可能となる。

残された問題は、個人を行動に駆り立てる動機を検討することだけである。それは——習慣の力、欲求の力、感情の激発、道徳的な信念の力である。習慣と旧慣墨守の支配は、健全な思考活動にまったく相反するものとして、絶対に退歩的な現象と認めなければならない。進歩的思考は、その発展的諸理想に応じて、絶えず伝承的習慣を改造してゆかなければならない。それは、現存の資料の研究と分類に応じて、一そう批判的な思考にならなければならない。それは、その領域の広さに応じて、一そう視野の広い・首尾一貫した・調和のある世界観を持った思考、一そう秩序整然たる・一切を包括する哲学を持った思考にならなければならない。——行動を促す自発的動機としての激情の発露は、そのあらわれ方がきわめて異常で変わり易いから、習慣の支配と同様に、ほとんど社会生活の進歩的動因と認められない。それは本来それ自体としては進歩的な欲求と信念を、より一そう鼓舞する時だけ、進歩的であり得る。それは、その他の場合にはすべて進歩の武器になり得ると同じほど容易に、停滞と退歩の武器になり得る。

残っているのは、欲求と信念だけである。欲求や信念が、同じ一個人の心の中で、た

がいに対立している時は、このような人びとは、狂信者・英雄・孤独の賢者である。しかし、それらは、いずれの場合にも、社会的な力・歴史的勢力の基盤になり得ない特殊な事実である。少数者の信念ないしは欲求が、多数者の信念ないしは欲求に対立している時は、社会に団結は存在しないし、強固な結合も存在しない。社会は破局の寸前にあり、文明のいかなる輝きも、外面的文化ないしは個人的思考のいかなる巨大な成果も、社会の体に大きく開いた傷口を覆い隠すことはできない。社会組織は、破滅ないしは抜本的な変革を免れない。

進歩の実現が可能となるのは、社会組織の強化のために、少数者の利益を多数者の利益に一致させようとする自覚が、発達した少数者の信念となった場合・自分自身の利益のために、社会を一そう団結の固い統一体にしようとする志向が、発達した諸個人の道徳的信念に昇華した場合・個人が組織されつつある社会的勢力に加わり、その構成員全体の利益を一致させるために行動し得る場合・この組織に加わった個人が、社会を結合する利益の共同性について、一そう明確な自覚を彼らに持たせ、正にこの過程を通じて、それを道徳的信念に高める場合だけである。このような場合に、進歩の課題は、はっきり確立される。社会的自覚が社会的団結の強化と拡大をもたらす限り、進歩は社会的自覚の発達に他ならない。また、社会的団結が社会の内部に発達しつつある自覚に立脚する限り、社会的自覚は社会的団結の強化と拡大に他ならない。進歩の組織者は、発達しつつある個人であり、彼の活動なしには進歩はあり得ない。彼は、自分の思考を発達させながら、社会的団結の法則・社会学の法則を明らかにし、周囲の現実これらの法則を適用する。彼は、自分の活動力を涵養しながら、実践活動の方法、すなわち、自分の信ずる理想と自分の知的能力に応じた現実改造の方法を見出す。

もし、思考の利害と社会生活の団結の利害、個人の利害と彼の属する社会の利害が一致し得るとすれば、またもし、進歩の真の理解と真の実践がこの方向に存しているとすれば、われわれは、個人の欲求をより注意深く研究し、かつ、それらを等級別に区分しなければならぬ。

個人は、その欲求の満足を社会生活の中に求め、社会は、それを満足させるために種々の機能に応ずる種々の機関を作り出す、したがって、これらの欲求は、歴史の発達の基本的図式である。これらの欲求は、あるいは基本的・不変的欲求であり、あるいは思考と生活の発達の過程によって生み出され、かつこの発達そのものを条件づける欲求であり、あるいは束の間の歴史的情勢によって生み出された一時的欲求であり、あるいは病的な欲求でもある。病的な欲求の存在は、歴史の歩みに病的な傾向を付与する、したがって、それらの除去は、進歩のための一闘争形態である。基本的欲求と一時的欲求の正しい等級区分の確立・それら相互の依存関係と両者の合理的関連性の解明は、進歩の正しい実践を準備するところの批判的思考の重要な一活動部門である。人間の欲求は、その個人的発達の程度に応じて、低次のものと高次のものに区別されて意識される。この高低の等級区分の中で、人間の健全な欲求をできるだけ完全に満足させるものだけが、正しい歴史的発達の目的であり得る。

人間の健全な基本的欲求と作り出された健全な欲求との相互関係の中に、歴史の本質

歴 史 書 簡

的過程があらわれる。

すべての基本的欲求は、純粹に形而下の性質の欲求であり、生活の本源的過程そのものに結びついている。歴史によって作り出された一時的欲求は、はるかに複雑である。通常、人間は、これらの一時的欲求をより高いものと見なしているが、実をいえば、あらゆる本源的欲求をもっともよく満足させようとする志向が、その下に隠されており、時とともにこの志向に付着したその他のすべては、多くは病的な腫物である。本源的欲求は、まず最初に無意識的な形で現われる、そして、ある一つの欲求を満足させようとする一面的な志向の下で、習慣の世界を作り上げてゆく。たくさんのまったく病的な腫物が、社会生活の中に一杯ひろがってゆく。これらの腫物は、個人と社会の発達への諸側面のあらわれを阻害する。進歩を希求する思考は、それらと闘わなければならない。つぎの発達段階においては、前と同じ欲求は、宗教的信仰・哲学的世界観・芸術的形象に具体化される、そして、神祕的ないしは形而上学的理念として、芸術ないしは道徳の理想として、禁欲主義ないしは至高の叡智として、自己本来の本源的欲求といわば闘争を開始する。しかし、この闘争もやはり病的な現象である。基本的欲求は満たされなければならない、したがって、人間の正しい思考活動は、きわめて完全かつ適切に、それらの満足に関する問題に向けられる。

この際、思考活動そのものが、思考の発達と不可分の新たな欲求を作り出す、したがって、それらは健全な欲求であるが、歴史的進歩の創造の欲求として、人間がその発達の過程の中で作り出したものである。それらは、進歩の推進力でもあり、人間の基本的欲求を正しく満足させるためのきわめて強力な武器でもある。批判的思惟の欲求は、習慣と一時的欲求の病的要素をあげき出し、基本的欲求の現実的内容を、その上に積み重ねられた文化的習慣と宗教的・形而上学的・芸術的な構造および様式の厚い層から解放する。科学は、人間の健全な欲求の等級区分に関する課題を、明確に提起する。哲学的思惟の欲求は、この課題を解決せんとする多種多様な個々の試みに統一をもたらし、思考体系が科学の全成果を包括し、かつ、その内容の仮說的要素ができるだけ少なくなるまで、この思考体系を漸次改造してゆく。芸術的創造の欲求は、絶えず明確になってゆく人間の基本的欲求と歴史的欲求の理解を、渾然たる感動的な形象に具体化する。精神活動の欲求は、英雄と殉教者を作り出す、彼らはこの理解を生活と行動に具体化し、基本的欲求の満足と病的欲求の除去が可能になるような社会を建設するために一つ一つ石を積み上げ、しかもそれを強化するためにしばしば自分の個人的幸福を犠牲にする。

しかし、この多様な進歩のための闘争の基盤には、やはり歴史の本質的過程、すなわち、人間のきわめて本源的な基本的欲求をもっとも適切に満足させようとする志向が、作用している。

さらに一そう綿密に考察すれば、これらの基本的欲求は、ごく少数の欲求、すなわち、食物・衣服・住居・生産用具等々に対する欲求、つまり、いわゆる経済的欲求の一群と安全の欲求に帰し得る。前者は、経済機構、すなわち、その多種多様な機能と機関を作り出し、後者は、内外両面の政治的諸関係を作り出す。この二つの範疇に入らないあらゆる基本的な人間の欲求は、社会の団結の強化ないしは弱体化に直接関係を持つ欲求で

はない。したがって——ここではそれらを究明する必要はない。その他のここに関係のある一切の欲求は、歴史の流れの中で、その過程の影響の下に作り出される、したがって、それらは、あるいは一時的欲求であり、あるいは病的な欲求であり、あるいはまた、前に述べたように、社会の健全な発達^のの所産でありかつ社会的進歩を促進する重要な武器であるところの欲求でもある。

それゆえに、まず第一に、歴史的・現代的な社会現象の複雑多様な情景の中から見つけ出さなければならないものは、礼節を旨とする慣例や人間活動の宗教的・科学的・哲学的・芸術的・道徳的所産の豪華なベールに包まれているところの個人と社会の経済的欲求ならびに安全の欲求である。なぜなら、これらの欲求は、まず第一に満たされなければならないし、それらを満足させなければ、社会は強固さと団結を維持し得ず、個人は道徳的に発達し得ないから。

しかし、われわれは、沈思熟考して、これらの基本的欲求の間に従属関係を確定しなければならない、なぜなら、進歩の諸条件の真の理解はこのことに懸っているから。政治的欲求と経済的欲求は、社会問題と社会的発達^のの面で、どちらが重きをなしているか？——国家の正しい改造によって、経済的進歩を達成し得るであろうか、それとも、政治的衝突と権力獲得闘争の背後に経済問題だけを見るべきであろうか？——法律によって美事な経済制度を確立するに相違ない古代の至賢ソロモンないしはより新しいお隣の国《ユートピヤ》を呼出す必要があるだろうか？——イギリスの上院と下院、《自由・平等・友愛》の旗印を掲げた国民公会、ワシントンの合衆国連邦議会、イワン雷帝、《いとも柔和な》アレクセイ・ミハイロヴィチ帝、《偉大なる》エカチェリーナの国民会議の中に、あらゆる社会問題を解決するに相違ないところの法律を探し求める必要があるだろうか？ 政治的・経済的進歩を勝ち取るために、普通選挙権の獲得について煽動したり、パリー・ウィーン・ベルリンでやったようにバリケードに抛って闘う必要があるだろうか？——あるいは、人類は幻影を追い求めてこの道を歩んで来たのかもしれない。いとも賢明なソロモンたちは、以前からあった経済的支配に単なる法律の衣をかぶせたに過ぎない。《ユートピヤ》は決して存在しなかった、たとえ存在したにしても、周囲の支配的な経済力の前では、それにうちかつ手段を見出さない限り、まったく無力な存在であったに違いない。時とところを問わず、一切の憲法・法典・憲章を作成したのは、実際に経済的支配権を掌握していた社会集団ではなかったか？ すべての政治的革命は、それに参加した個人がどれほど英雄的・自己犠牲的であったにしても、それが社会の富の分配を変革しなかった時は、みじめな失敗に終わりはしなかったか、また、それらの中で経済的改革を掲げたものだけが、強固な政治的革命ではなかったか？ すでに実現された生産と交換様式の変革に立脚したところの富の再分配計画だけが、実現可能なものではなかったか？ 経済的欲求の満足に関する戦闘的諸党派の要求、しかも所与の時代の経済的社会生活の実際の諸条件に即応した要求だけが、真に現実的・真に根本的なものではなかったか？

歴史における経済的欲求と政治的欲求の相互関係を考察するならば、この問題の科学的解答は、後者に対する前者の優越に重きを置いている。歴史的資料によって諸事実の

歴史書簡

眞の過程をより詳細に知り得るところではどこでも、政治闘争とその発展段階は、経済闘争を基盤にしていた・政治問題の何らかの解決は、経済力によって条件づけられていた・これらの経済力は、常に自己に都合のよい政治形態を作り出し、しかる後その理論的理想化を対応の宗教的信仰と哲学的世界観の中に、美学的理想化を対応の芸術的様式の中に、道徳的理想化を経済力の諸原理を擁護する英雄たちの讚美の中に求めた・といわざるを得ない。

しかし、経済力によって作り出されたこれらの政治形態・抽象的理念・具体的理想は、一再ならず固定化し、かつ、文化的機構の構成要素となって、独立の社会的力に転化した、そして、自己の出生を忘却ないしは拒否し、それらを作り出した経済力そのもの——それが、新しい形の経済的欲求・新しい経済力を歴史の舞台に登場させた——と主導権争いを開始した。封建的所有制度は、自己自身が自己の保全のために作り出した行政・国家制度と自己自身が中央政府の悪用防止のために提起した契約の理念とによって、いちじるしく毀損された。株式ならびに工場所有者達の財産を飢えた無産階級から守っている現代の国家的軍国主義は、一再ならずナポレオン三世やビスマルクのような人びとと彼らの模倣者達にあやつられて、有産階級の利害ととうてい一致しない目論見の道具になっている。ブルジョワジーは、平等の理想の名において、前時代の封建的有産者を制圧したが、この平等の理想は、荒れ騒ぐプロレタリアートがこの理想の中に経済的平等の要素を主張している現下の社会闘争の中では、ブルジョワジーにとって両刃の剣になっている。

かくして、経済力の闘争は、政治的諸形態と理念的課題の分野におけるこの闘争の所産——これらの所産は、歴史的な独立的存在権の名において、自己の支配権を要求している、——が、この闘争に加わることによって、非常に複雑化する。しかし、この闘争の様式が、いかに多種多様であろうとも、その過程は、本質的にはさして複雑ではない。

所与の時代の生産と交換の諸条件は、現存の政治的諸形態ならびに伝統的な文化的習慣と手を組んで、宿命的に富の分配を、したがってまた——所与の社会の労働と余暇の配分・思考活動の可能性の配分を、決定する。自己の手に大部分の富を集中し、したがってまた、社会的勢威と政治権力の大部分を独占し、かつ、不可避的に思考活動の余暇とこの活動そのものを完全に独占する支配的な少数者が形成される。彼らは、習慣・法律・信仰・哲学的・科学的思考様式・芸術的創造によって、自分たちの支配を強化しようと努める。隷属下に置かれた多数者の状態は、ますます悪化する。思考と生活上の習慣は、支配的少数者を隷属的多数者からますます遠ざけてゆく。前者の歴史は、外面的に多少とも輝かしい文化的諸形態と暇にまかせた多少とも強力な思考の成果とともに、この少数者の文明を創造するために労働するところの多数者の社会生活にとって、ますます無縁なものとなる。しかし、両者がならんで同時に存在していることだけでも、若干の病的現象の原因になる。被搾取大衆を隷属下に置く必要は、少数者の思考活動を歪める。多数者に手の届かない物質的・精神的な快樂の存在は、ますます多数者をいらだたせ、彼らを支配階級ならびに現存のあらゆる社会秩序の敵対者にする。階級闘争は、増

大し尖鋭化する。社会の団結は虚構のものとなり、社会の生存は危険にさらされる。

古代世界の到るところに絶えず存在したこのような社会的反目が急激に表面化した時、諸民族が個々別々に分立した時、破局は急速かつ決定的に到来した。貧困で野蛮な隣国人が、当該社会の少数者によって蓄積された富を手っとり早く利用する目的で、侵入してきた。多数者は、さし迫った危険にまったく無関心であった。少数者は、零落ないしは破滅した。文明は、そのすべての光耀とともに消え去った。数千年の後、考古学者たちは、パピルスや粘土の煉瓦の上に、驚くべき思考の成果に関する証跡を、讚嘆の念を以て読みとった。彼らは、この《忘却された文明》を滅亡させた破局的異変を悼み歎き、無数の多数者——この文明のかたわらで生をいとなみ、自分たちの汗と血でこれを創造し、少しもその恩恵に浴することなく、かつ、その倒壊を無関心に眺めるために、何千年も苦しみ抜いてきた無数の多数者——の運命については、悼み歎くことを常に忘れていた。

これと異なる結果も現われた。思考活動と政治的諸形態の創造は、支配的少数者のために新しい社会集団を社会生活の舞台に登場させた。これらの集団は、好機を利用し、あるいは、生産と交換の技術・政治生活の技術の宿命的発展に乗じて、経済的独立をかちとった、したがって——社会的勢力をもかちとった。完全に支配的な少数者と完全に隷属的な大衆との間に、若干の中間層が発生した。これらの中間層は、支配的要素と隷属的要素を同時に持っていたが、当然前者を増大し後者を減少しようと努力した。時には、思考活動は、ほとんど完全にこれらの中間層の手に移った。技術と交換の面の進歩は、これらの中のある諸階層を強化した。文学・科学・哲学・芸術の創造は、他の諸階層の分前となった。思考闘争の舞台では、さまざまな理想・さまざまな世界観が創造され、相争った。種々の勢力が、社会の支配権をめぐる論争を始めた。それらの中で、自己の利害を——現実的ないしは仮定的に——絶対服従の下で苦悩する一般大衆の利害に結びつけ得たものが、支配的勢力になった。なぜなら、その勢力は、現実的ないしは非現実的な《社会意識の成長》を、自己の利益になるように《社会的団結の強化》に向けることができたから。この支配的勢力は、あるいは、その敵手たちの社会組織を破壊して、あたかも自然に崩壊していったように見えるその廢墟の上に発展し（教会の組織化が、崩壊してゆくローマ帝国の上に発展していったように）、あるいは、多少とも流血を伴う革命を引き起こした、そして、被支配階級に対する経済的・法律的支配権を完全に獲得し、新しい社会的諸形態を作り出していった。この戦いにおける彼らの協力者たちは、この新たな社会機構の中で、旧態依然たる隷属的地位に止まっていた。新しい社会層の経済的支配によって本質的に条件づけられた新たな歴史時代が始まった。この新しい時代は、それに相応する新たな政治的諸形態・現存秩序を理想化するための新たな思考の成果を創造し、正にそのことによって、新たな社会的勢力に成長し得たところの新たな中間的諸階層に発展の基盤を与えた。

しかし、この反覆する基本的過程の進展に当って、この進展を支えている基盤は絶えず変化していった。それゆえに、諸現象そのものは、決して反覆しなかつたし、かつ、反覆し得なかつた。新しい経済的支配階級は、それ以前の支配階級とはまったく異った

歴史書簡

状態にあった、なぜなら、それは別種の生産と交換様式に立脚していたから。それは、社会的諸勢力の別種の組合せの中に置かれていたために、別種の理念上の思考の所産・別種の社会習慣を考慮に入れなければならなかった、したがってまた、別種の破局に脅かされていた。

これに応じて、各時代の進歩のための闘士は、自分の進歩の理解を広める可能性に関しても、さらにはまた、新しい進歩の理解にふさわしい新しい思考と生活の習慣を自分自身と自分の周囲に作り出すことに関しても、別種の課題を持っていた。しかし、正しく理解されたこれらの課題は、何時いかなるところでも、同一の本質を持っていた。この本質は、つぎのことがらに存していた、——すなわち、社会機構の現存の習慣的・法律的様式を利用し、かつ、現存のさまざまな科学上の思考の成果・哲学上の思考の体系・芸術上の思考の典型・道徳上の思考の理想を考慮に入れつつ、現存の生産と交換の諸条件に応じて、社会的勢力の配分様式・特に富の配分様式を修正すること、社会的結合の最大の強化と拡大・社会的意識の最大の成長を目指してこれらの修正を実現すること、最後に、実現された変革にもっともふさわしい政治的諸形態・この修正をもっとも正しく裏づける科学・哲学・芸術の理念上の所産・人間の健全な欲求にもっともふさわしい道徳的理想の具体化によって、この実現された修正を強化すること。

かかるものだけが、人間社会における進歩であり得たし、われわれがこれを出発点と認めた場合だけ、——歴史的進歩の現実的な発展諸段階が、実際的に何に存していたか？——という問題を、正しく提示することができる。

まず第一に、ここでは文明史の課題を考慮に入れ、これらの課題に基いて、歴史的過程の発展諸段階を全体として理解しなければならない。私は、すでに書簡其の一の中でこれらの課題を指摘した、しかし、今度はいくらか違った方法でそれらを公式化することができる。

文明の歴史は、つぎのことがらを示すに相違ない、——すなわち、自然的欲求から最初の文化がいかにして発達したか。それは自然的欲求に、人為的欲求を、いかにして習慣と慣例の形で直ちに付け加えたか。思考は、知識を豊かにし、正義を明らかにし、哲学を完全化し、それらの成果を生活の中に具体化しながら、いかにしてこの基盤の上で活動したか。この行程をたどりつつ、相次いで交替していった多数の文化が、いかにして発生したか。これらの文化的諸形態が、いかにして多少なりと思考活動の自由を許してきたか。かくして発生した文明が、個人の批判闘争によっていかにして発達したか、正義の要求に対する理解の不足からいかにして文明自体を弱体化し滅亡させたか、あるいは、批判的な思考活動の不足からいかにして停滞に陥ったか、あるいはまた、いかにして外的な歴史的破局の犠牲になったか。批判的な思考活動の盛んな時代が、いかにして人類の前進を促進し鼓舞したか。これらの時代は、先進的少数者によって十分に啓発されていなかった一般大衆の間で、まだ強大な力を持っていた慣習の支配の時代と、いかにして交替していったか。批判的思考は、恐らくはきわめて不都合な社会機構・きわめて不適当なスローガンの下で、いかにして新たに活動し続けていったか。諸党派は、いかにして成長し、いかにして互いに闘ったか。それらの旗印に掲げられた偉大な諸原理の

意味は、どのように変わっていったか。批判が、しかも批判だけが、いかにして人類を前進させたか。虚偽の理想化は、真の理想化にいかにして少しずつ席を譲っていったか。真理の領域は、どのように拡大していったか。正義は、いかにして明らかにされ、個人の生活と社会的諸形態の中に具体化されていったか。それらの前で、いかにしてきわめて強固な伝統が崩壊し、きわめて根深い習慣が消滅し、きわめて巨大な権力が無力化していったか。個人・民族・国家の名が、次から次へと、あるいは進歩の機関となり、あるいは反動の機関となりながら、いかにして歴史のドラマに書込まれていったか。あらゆる虚偽の理想化と明らかに反動的な志向・古い時代から積重なった文化的習慣と伝統・多数者の無関心主義を相手にして現に闘争しているところの進歩的活動の理想は、いかにして現代の人類の中に作り出されていったか。

もっと簡単にいえば、文明史の課題を次のように表現し得る、——個人の批判的思考が、文明の中により多くの真理と正義をもたらそうと努めつつ、社会の文化をいかにして作り変えていったか、を示すことである。

前述のことがらを根拠にする時、歴史的進歩の実際的な歩みに関する問題の解決は、次のような形で現われる。研究者は、人類学的習慣の王国から分立的諸民族の時代への移行を、まず考察しなければならない。物質的・精神的所産の交流が盛んになり、諸民族間の経済的・知的依存関係が増大した結果、普遍的な人智・普遍的な法治国家・普遍的な愛の宗教の理念が、次に研究者の前に現われる。しかし、正にこれらの普遍的原理が、人間の基本的欲求と緊密に結びついていなかったために、それらは人類の団結を確立し得なかった。そして、世俗的文明になったことを特色とする新しいヨーロッパ文明は、あらゆる言語・あらゆる学校で説かれている普遍的な科学的真理が存在し・万人にとって唯一の普遍的な宗教的教義が衰えながらもその存在を保ち続け・生産、交換、クレジット金融、株式投機、不可避的恐慌の制度を、あらゆる文明的ないしは半文明的な人類におしおぼしているところの普遍的・全世界的産業が存在し、かつ、ますます盛大に発展しつつあるにもかかわらず、諸国家の分立というまったく反対の理念に立ち戻った。もちろん、この際に作り出された相反する社会的理想は、強固であり得なかった。国家絶対主義の形を取った社会的団結の理想は、二世紀と持たなかった。それが国家民主主義の理想に席を譲るや否や、それと並行して、政治的諸理想を粉碎する経済学が、経済的諸原理の主導権を要求して立上った。しかし、ブルジョワジーの経済的・政治的支配の同盟者・思想的弁明者として・法治国家の科学的要素として登場した経済学は、すぐさま新しい諸問題にぶつかった。ブルジョワジーには、これらの問題を解決するだけの力がなかった。資本主義経済——それによって生み出された政治的諸形態・中世的封建制度との戦いによって発達した思想上の所産・新しい絶対主義を擁する資本主義経済——は、絶えず増大し・墮落し・荒れ騒ぐプロレタリアートの抬頭を宿命的に招来しているために、プロレタリアートの存在を排除し、かつ、その社会的勢力への発展を阻止する可能性を、ブルジョワジーに与えなかった。以前に作り出された民主主義の理想の名において、社会の経済的再編成の要求が、さまざまな形で幾たびとなく現われた。まずユートピア主義者が、人類の生活における新しい生气に溢れた時代・資本

と才能と労働の間に調和のある王国・労働と発達の面で全体が協力する整然たる世界について、思い思いの情景を世人の前に描きはじめた。しかし、社会的諸勢力間の闘争は、決してこのように無事平穩に片づく筈がなかった。現代の文明を支えている勤労者の陣営は、この文明の享受者たちの陣営から、ますます深い深淵によって隔てられていった。しかし、思考の発達した現代では、株式取引所の完全な支配者たちと筋肉や頭脳を市場に売込むプロレタリアートとの間に、多数の中間階層が必ず存在する。資本主義制度に対する反抗者たちの陣営に、過去のあらゆる思考の成果に立脚する闘士たちが直ぐさま現われた。この発達せる思考は、いつそう鋭い絶対的な諸問題を宿命的に提起した。それは、唯一の科学・科学の精華である社会学の問題を提起した。それは、普遍的発展の法則を提起し、あらゆる社会現象と社会形態が、一時的現象と一時的形態、すなわち、《歴史的範疇》に他ならないと宣言した。それは、資本と労働の深刻な対立・資本主義の発達そのものによるプロレタリアートの宿命的発生・資本主義を脅かす不可避的破局を、まざまざと感知させた。株式取引所の支配者たちは、自己の手中に巨万の富を蓄積するために、全般的な競争と全世界的な株式投機によって、ブルジョワの進歩的理想を追求する。このような理想に、勤労者の、しかも勤労者だけの団結の理想が対置された。有産者の神聖な財産を保護するところの絶大な権力を持つ国家という理想に、相互扶助に基く政治的無政府社会の理想が、対置された。社会の旧勢力を打倒するために新勢力を創造しようという理想は、あらゆる国・あらゆる種族の慢性的飢餓に苦しむ諸階級に対する《団結せよ！》というアップールの中に、具体化された。この新勢力組織の最初の試みは、まる8年間継続し、旧世界の支配層全体を震え上らせた。それが挫折したのは、旧勢力の反撃にさらされたからではなくて、かかる種類のあらゆる最初の試みに必ずつきまとうそれ自体の組織の欠陥のためであった。騒然たる国家間の政治闘争も、外交官の権謀術策も、精彩を失った教権主義に対する世俗的思考の《文化闘争》（カトリック教会とドイツ国家の闘争）の一時的火花も、無秩序な事態の経済的基盤——それが、現代の苦悩の大半を生み出している——と経済問題——その他のあらゆる問題の解決が、それらの解決に懸かっているがゆえに、緊急にそれらを解決する必要がある——を、注意深い観察者から隠し得なかったし、かつ、隠すことは不可能である。

そこで、進歩の一般的内容とその発展段階に関するこの理解を根拠にする時、先に提起した諸問題の中でもっとも緊急を要する第三の問題が現われる、なぜなら、この問題は、実践、すなわち、——現代にとって可能な社会的進歩は何に存しているか？——にもっとも密接な関係を持っているから。

もし現在の制度が正しくないならば、もしその中に深刻な軋轢が存在しているならば、もし過去の歴史が宗教的・民族的・家族的・国家的結合の一体性を破壊してしまったとすれば、もしすべての古い理想が色褪せて不毛になってしまったとすれば、もしわれわれが、諸現象の社会的依存関係の一般法則から、経済的欲求の不満があらゆる社会的疾病の根本原因であり、経済の再建があらゆる社会的治療のもっとも重要な第一歩であることを確信するとすれば、——現代にとって絶対に必要なこの再建は、果して何に存しなければならないか？ 現在の生産と交換の諸条件の中に、富の分配をどのよう

に修正すべきかを直接指示するものがないだろうか？ 科学と文学・哲学と生活は、現実に具体化すべき真理と広汎に実現すべき理想を、すべての誠実な識者の前にはっきり提示しなかったであろうか？ 競争は、いかなる面で、個人や集団間の利害の一致・団結の確立に関する思考を宿命的に不可能にしているか、団結は、いかなる面で、きわめて不利な諸条件・きわめて悲しむべき状況の下でも可能であり、かつ実際に実現されてきたか、ということ、完全明白に決定できないであろうか？ 前述の思考の発達に基いて、社会意識の来たるべき進歩的発達の段階を、十分正確に決定できないであろうか？

もし絶対に必要な経済の改造に関する問題が解決されたとすれば、もしわれわれが、現に破綻を来たしている社会の団結の回復と強化に関する明確な見通しと社会意識の発達に関する明確な見通しを持ったとすれば、どのような政治的諸形態が、生産・交換・分配の新しい経済様式・個人の全面的発達の要求・社会の集団的発達のための全体の協力にもっとも適合し、かつ、この進歩の過程をもっとも安全に守るであろうか？ どのような知識の体系・どのような哲学的世界観・どのような芸術的典型が、理念の分野における新しい秩序をもっともよく強化するであろうか？ 進歩のための闘士は、その闘争の決意を自分の生活に合致させるためには、現在どのように生きなければならないか？

私は問題だけ提起している。しかし、私が話しかけている読者・思考の安静と生活慣習をかき乱すものとして本書を途中でほうり出さなかった読者・本書で提起された諸問題を沈思熟考した読者は、これらの個々の問題に対する明確な解答を自分で見つけ出すであろう。これらの解答は、書物で読み知って、そのままのみにして信すべきものでない。それらは、生活から汲み取るべきものであり、生活上の信念の基礎となるべきものである。

これらの個々の解答が得られる時、正にこれらの解答の組合せによって、先に提起された次のごとき諸問題の解答が得られるであろう、——現代にとって可能な社会的進歩は、何に存しているか？ 現代の人類の最良の志向の代表者たらんと欲する社会にとって、社会的進歩は何に存しているか？ 旧慣墨守的な生活の平安や軟弱で淫らな動物的快樂に憧れず、意識における思考の生活・発達を希求するすべての人との一致協力的生活・人類のためにますます広大な未来を展開しつつある歴史的生活——このような生活の喜びを渴望する個人にとって、社会的進歩は何に存しているか？

進歩の理論は、この段階で進歩の実践と一体化する。実践によって進歩に協力せずには、進歩を理解することはできない。進歩の理解を明らかにするのは、実にこの実践そのものに他ならない。進歩の理解は容易でない、それは、精神の革命と多数の生活上の犠牲を必要とする。進歩の実践も容易ではない、それは、ある時は個人と彼に身近な人びととの関係を往々にして引裂き、ある時は個人の空想的信仰を破壊し、またある時は、家族や郷土から、個人に悦びと平安を与えるすべてのものから、無理やり彼を引離し、しかもそれと同時に、進歩に対する彼の情熱を失わせ、したがってまた、社会的停滞の泥沼に彼を導入することもある。歴史は犠牲を求めている。自分と他人の発達のための

闘士になろうという厳然たる大任をわが身に引受けた者は、自分と自分の周囲にあるものを犠牲に捧げる。発達の諸問題は、解決されなければならない。より良い歴史的未來は、かちとられねばならない。発達の必要を完全に自覚した各人は、——お前は、自覚と理解を持った進歩の活動家になり、あらゆる犠牲・あらゆる苦悩を辞せぬ覚悟のある人びとの一人となるか、それとも、自分がかって必要と感じた発達の道からそれたことを意識しながら、お前の周囲に展開される無数の悪を拱手傍観するか？ この二つの中からどちらかを選べ——という厳しい問題に直面する。

書簡其の一七

著 者 の 目 的

読者は、あるいは、これらの書簡を読みながら、——なぜこれらの書簡が《歴史的》なのか？ それらの中で何が歴史的なのか？ ——と自問されたかもしれない。私が考察したのは、個人や時代や事件ではなくて、若干の一般的原理である。当然ながら、これらの原理は、読者には、いくらか抽象的に感じられ、時には、歴史物語に見られる興味を欠いていると思われたであろう。しかし、もっと注意深く問題を考察してみよう。私は、ここで、これらの書簡のいろいろな個所で述べた思想と、あるいは私が十分明瞭に述べなかったかもしれないが読者の注意を喚起しようとしたところのことがらを、努めて比較対照してみたいと思う。この場合、私の論旨を正当づける根拠が見つからないであろうか？

われわれは、歴史の中に何を求めているのか？ はたして諸事件に関する華麗な物語であろうか？ 少数の人びとは、これに賛意を表明するであろうし、それだけを求めている人びとが、本書の抽象性に不平を鳴らすのも、まったく無理からぬことであろう。しかし、より重大な諸要求をたずさえて歴史に近づく際に、われわれは、あるいは、義理人情をめぐる個人や社会の闘争・主義主張のための衝突・さまざまな個人的理想の挫折と高揚を、あるいは、過去・現在・未來の歴史的諸事件の全過程を包括する一般的な自然的法則を、歴史の中に求めることができる。第一の観点は、歴史の関心対象を自然科学の関心対象から分離し、第二の観点は、自然研究の一般的諸原理を歴史に適用する。しかし、本質においては、厳密な研究にとって、これらの二つの観点はたがいにさして異っていない、なぜなら、ある対象の知識は、それについて知ることが望ましいものによって明らかにされるだけでなく、それについて知ることが可能なものによっても明らかにされるから。それゆえに、歴史の中に何を求め得るか？ ——という問題は、別の問題——人間は、その心理作用の不変の法則にしたがって、歴史にいかなる態度をとり得るか？ 歴史の中で、人間の科学的判断から不可避免的に滑り抜け、歴史的理論の虚妄の現象にしかかなり得ないものは何か？ ——という問題に変わる。この科学的研究の基礎を多少なりとも確立して後はじめて、個人はある程度の確信を以て、彼が歴史から知ろうと望んでいることに関する諸問題を、歴史に適用することができる。

しかし、私がまっ先に展開しようと努めた命題は、——個人は、必然的に、自分の個人的な道徳的達成と自分の道徳的理想に照らして、歴史的諸事件を評価する——ということであった。諸個人の闘争において、個人にとって何より重要なものは、彼が道徳的価値の構成要素と見なしている個人的特質、すなわち、知力・機敏・活動力・慧眼・信念の力・研究者の重視している諸理念に対する信仰・社会におけるそれらの強化ないしは弱体化に対する意識的ないしは無意識的協力である。

社会や党派の闘争において、研究者にとって何より重要なのは、人間としての彼にとって最良ないし是最悪・最大の真実ないしは最大の虚偽と思われる種々の思想傾向を、やはり強化ないしは弱体化することである。人間は、過去と未来の歴史の全過程を一般的世界観によって理解する際に、自分の思考の法則にしたがって、自分の道徳的理想の前向きの発達段階以外には、何一つ歴史の中に求め得ない。したがって、歴史を理解し、その中に思考の重要性を持込もうと努める際に、人間は、個人・事件・理念・社会的変革を、自分の発達の物差しで計らざるを得ない。もし、彼の発達が狭くて低ければ、歴史は彼にとって生気のない一連の事実となり、これらの事実は、彼の心を惹きつけぬ味気ないものになるであろう。もし、彼の発達が一面的であれば、彼がどれほど綿密に歴史を研究しようとも、歴史的諸事件の理解における一面性を免れないであろう。もし、彼が奇妙な幻想的信仰にとりつかれていれば、どれほど彼が歴史の客観的理解について努力しようとも、彼は歴史を歪曲せざるを得ないであろう。いずれにせよ、事実の知識が豊富な場合は、個人の発達程度・その道徳の高さが、歴史の理解を決定づける。何らかの個人・何らかの事件によって喚起される特殊な歴史的関心は、人類の進歩的発達へのそれらの参加によって喚起されるところの一般的関心に帰する。歴史の法則の全体的な探求によって喚起される一般的な自然科学的関心は、進歩的な歴史の歩みの中にわれわれの道徳的理想を実現せんとする関心に他ならない。

もしそうであるとすれば、われわれが歴史の中に求めており、かつ、求め得るものは、進歩のさまざまな発展段階だけであり、歴史を理解することは、われわれの道徳的理想の実現方法を、歴史的情勢の中で明瞭に理解することを意味している。われわれの理想は主観的である。しかし、われわれが批判によってそれをより良く点検すればするほど、それが現在可能な最高の道徳的理想であることがますます確実になる。われわれは、歴史の客観的事実にこの理想を当てはめる、しかし、そうしたからといって、これらの事実の客観的な正しさを枉げるわけではない、なぜなら、それらの正しさはここでもわれわれの知識とわれわれの批判に懸っており、主観的理想は、これらの事実に将来の見通しを与え、かつ、道徳的理想にうったえる以外にはこの見通しを立てる方法が一つも存在しないから。より正しい別な方法——諸事件の本質的關係と時代そのものの道徳的理想によって、その時代の諸事件の将来の見通しを立てること、——があるではないかと、私に異議を唱える読者もあろう。しかし、本質的關係とは何を意味するのか？ 所与の時代の道徳的理想とは、何を意味するのか？ ——われわれは、所与の時代について知っている多くの雑多な事実から、個人のもっとも正しい心理作用・人間集団におけるもっとも一般的な社会学的現象であると我々が認めた所のものに基いて、我々にと

歴史書簡

つてもっとも確実と思われる関係を組立てる。われわれにとっては、これが《本質的關係》である。社会のための経済問題について理解を深めた歴史家は、政治上のかけひきに重きを置く歴史家とは違って、諸事件の異った本質的關係を見出すであろう。個人の信念・熱中・無意識的自我妄想の力を認めている著作家は、すべてを常に打算と策謀に帰する著作家とは違って、別な方法で諸事件を關係づけるであろう。——ところで《時代の道徳的理想》の方はどうだろうか？ なぜわれわれは、その特徴をある諸事件から取出して、それらと同時に起こった他の諸事件から取出さないのか？ なぜわれわれは、特にある著作家から証明を引出して、他の同時代人から引出さないのか？ その理由は、それらの事件の方がより純粹で首尾一貫しており、その著作家の方が彼の同時代人よりも賢明で・首尾一貫し・誠実で・率直だからである。しかし、われわれは、正にそうすることによって、きわめて重要な事件・きわめて重要な個人について、我々の理想を吐露していないだろうか？ いうまでもなく、歴史的諸事件は、それらの《本質的關係》において論議され、《時代の道徳的理想》によって評価されなければならない。しかし、この本質的關係そのものとこの道徳的理想は、われわれ自身が公正な真理・歴史的正義の理想を培うことによって、明らかにされなければならないし、かつまた、明らかにされ得る。時代と首尾一貫せる諸理想の關係そのものは、別種の批判、すなわち、歴史的進歩の批判、——換言すれば、全体としての我々の道徳的理想の批判——に委ねるべきである。それゆえに、われわれは、ある時代を他の時代より重要視し、ある諸事件をそれらの本質的關係において他の諸事件よりも詳細に考察するであろう。繰返してしておくが、——歴史の道徳的理想は、全体としての歴史と個々の部分としての歴史に見通しを与え得る唯一の炬火である。

したがって、現在、歴史を理解することは、現代の最良の思想家たちによって作り出された道徳的理想とその実現の歴史的諸条件を、明確に理解することを意味している。なぜなら、歴史の過程は、抽象的過程ではなくて、具体的過程だから。それは、ある一定の方法しかとり得ない。それは、可能と不可能を決定する所与の状況の下で進展する。それは、他のあらゆる過程と同様に、自然の不可避的法則に縛られている。歴史を理解するためには、人間の理想の置かれているこれらの外的諸条件に絶えず注意を払わなければならない。物理学・生理学・心理学の必然的過程は、逸脱と飛躍を許さない。われわれは、この必然性から、決して自由になり得ない。それと同じように、われわれは、あらゆる社会勢力を擁する所与の時代に、歴史的に所与のものたる社会環境から、ほとんど自由になり得ない。いかに輝かしい真理も、いかに高い正義も、それが出現し広まる際に、これらの拘束的諸条件に制約される。いかに才能豊かで活動的な個人といえども、自然の必然的諸条件と歴史的に所与のものたる社会環境の諸条件以外からは、自分の思考と自分の活動のための材料を引出すことはできない。明瞭に理解された歴史的関心は、すべての時代に対して何よりもまず次のごとき問題を提起している——進歩的運動にとって何がこの時代に可能であったか？ 活動家たちは、彼らの置かれていた諸条件を、どれだけ理解していたか？ 彼らは、自分たちの諸目的のために、その時代のあらゆる諸条件を利用したであろうか？

しかし、現代の理想を明確に理解することは、旧時代の慣例・誤った思考の伝統・有害な習慣と絡み合った一切の幻想を、この理想から除去することを意味している。真理と正義は、ほとんど無条件に現代のあらゆる旗印に掲げられている。しかし、真理はどこにあるか、正義は何に存しているかという点で、諸党派は意見を異にしている。もし、読者がこれを理解しようと努めないならば、歴史は、彼にとって、もつれ合った諸事件の漠然たる過程・つまらないことから生ずる立派な人びとの闘争、妄想から生ずる愚者たちの闘争・少数の打算的陰謀家に奉仕する盲信の手先たちの闘争に止まるであろう。多くの響き高い言葉が、四方八方から轟きわたる。多くのすばらしい旗印が、あらゆる陣営にはためいている。あらゆる党派の代表者たちが、献身的な活動を展開している。彼らのスローガンが確かに非常に似通っているのに、なぜ彼らは争っているのか？ 彼らの中の最良の人びとが昨日掲げていた旗印が、なぜ今日は汚らしい手に握られているのか？ すばらしい思想が表明される時、なぜそれは激しい抵抗にぶつかるのか？ 所与の社会機構の搾取者たちだけでなく、誠実な人びとまでが、なぜこのすばらしい思想に抵抗するのか？ これらのすべての問題が解決され得るのは、次のような場合——真理を推進し強化する過程・諸党派の形成と衝突・人類を前進させる偉大な言葉の本質的意味と歴史的意義の変化・文化を改造する思考の過程を、われわれがより注意深く究明しつくす場合、必然的なものと歴史的に与えられたもの・文化的習慣と相闘う思潮・諸党派の旗印に掲げられた偉大な言葉と真理・正義・進歩の不滅の要求・信仰の批判を考慮に置いて、われわれが諸個人の状態を究明しつくす場合——だけである。私が本書で特に詳述しようとしたのは、正にこれらの問題であった。その理由は、歴史的進歩を促進しかつそれを条件づける種々の要素が十分に解明されていないにもかかわらず、うかつにも過去と現在の歴史の研究に着手する人びとの考え違いを、できるだけ取除くためであった。

しかも、歴史は完了していない。歴史は、われわれの眼前で歩み続けている。歴史は、現に生長しつつある世代・まだこの世に生まれ出ないあまたの世代によって実現されてゆくであろう。現在を過去から切離すことはできない。しかし、もし過去が現在と不可分に結びついていないとすれば、もし一つの偉大な過程が歴史を全体として包括していないとすれば、過去は一切の生きた現実的意義を失うであろう。過去の活動家達は、死んでしまった。社会の文化は、変わってしまった。新しい具体的な諸問題が、以前の諸問題に取って代った。過去のスローガンは、それらの意義と価値を変えた。しかし、個人の全人類的な役割は現在においても数千年前と少しも変わっていない。雑多な文化的諸形態の陰に・新しい時代の複雑な諸問題の中に・敗者と勝者のさまざまなスローガンの陰に、一切のまったく同一の諸問題が秘められている。真理と正義なしには、進歩は決して存在しなかった。個人の批判なしには、一つの真理さえ獲得されなかった。個人の行動力なしには、いかなる正義も実現されなかった。スローガンに対する信仰なしには、敵との闘争能力なしには、いかなる進歩的党派も勝利し得なかった。文化の諸形態は、過去数千年間におけると同様に、その発達のために思考の活動を要求している。まったく同様に、偉大な数々のスローガンも、絶えずその意義の喪失ないしは変更

歴 史 書 簡

の危険にさらされている。可能な進歩のための社会的諸条件は、変わらなかった。発達した個人は、進歩の代償をつぐなわねばならぬという欲求を、無視することはできない。これらすべては、われわれの父祖たちの時代にも存在していたし、われわれの子孫たちの時代にも存在するであろうし、われわれの時代にも存在している。違っている点は、われわれが父祖たちよりもそれを一そう良く理解するであろうということだけである。

それゆえに、この歴史書簡は、あらゆる歴史時代に存在したしかつ存在しなければならなかったところの諸問題を解決せんとする試みを含むと同時に、現代の諸問題を解明せんとする試みも含んでいる。私は、本書によって、過去だけでなく、現在についても、読者にうたっている。著者は、本書が不十分かつ不完全であることを、十二分に承知している。加うるに、現代は、かかる種類の考察をするには、あまり適当な時代ではない。これらの書簡は、難解で、抽象的で、無味乾燥で、当面の諸問題に無縁なものに見えるかもしれない。別な著者が、別な状況の下にあったら、もっと立派に、もっと面白く書くことができるであろう。しかし、私は、現代の社会の中に、せめて読書する青年たちの間に、現在まだ未解決の過去の諸問題に臆することなく真剣に取組まなければならないと考える人びとが、いくらかでも現われるであろうことを期待している。このような読者にとっては、恐らく、本書の叙述に見られる欠陥は、その内容に較べれば、重大なものでないだろう。このような読者は、当面の諸問題が、本書で著者の論じた永遠の歴史的諸問題から、現実的・本質的利益を受け、確かに理解するであろう。このような読者は、彼らこそが個人として現代の文化に対して批判的思考活動を行わなければならないこと・彼らこそが今まで溜った進歩の巨大な代償の自分の割前を、自分の思考と生活と活動によって返済しなければならないこと・彼らこそが社会に存在する虚偽と不正に、自分の信念を対立させなければならないこと・彼らこそが進歩の力強い前進のために、成長してゆく勢力を組織しなければならないことを、理解するであろう。もし、本書のこのような読者が、せめていくらかでも現われるならば、——著者の目的は達せられたといえよう。